
僕とアノ人とのイケナイ関係

神聖グラントル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕とアノ人とのイケナイ関係

【Nコード】

N8867S

【作者名】

神聖グラントル

【あらすじ】

僕の姉さんは死んでしまった。一緒に過ごせてよかったよ、サヨウナラ。僕は独りで生きて行くよ。そんな矢先、独りの女性と出会った。この女性は見覚えがある。ああ、あの人だ。――以前、陵辱し拷問を施した人だ。

第1話 プロローグ

僕の手、大量の赤い液体ベツトリ。

手についた“これ”が何なのかはすぐに分かる。

僕を抱きかかえる若い女性の体が流れ出たモノ。

———血だった。

そして、この女性は僕の唯一の家族だった。

そうだよね、サルリファス姉さん。

姉さんはもう何も言わない。

止まった呼吸と開くことなき目。

彼女の白いコートは赤く変色しきっていた。

真っ赤なコートも似合っているよ。

僕の、僕の、唯一の家族。

優しく強かった姉さん。

僕はアナタと戦って一度も勝てなかったね。

姉さんは僕を負かしたまま遠い世界に逝っちゃった。

勝ち逃げなんてズルイよ。

もう姉さんとは戦えない。

動くこともない。

何で死んじゃったの？

いや、分かってるよ。

“ 僕がコロしたからだよね——”

第2話 再会

僕は姉さんを近くの木の根元に埋めた。これで本当にお別れだね。彼女の持っていたハンドガンを取り、自分の物にした。これが姉さんの形見——……

【コールドフォレスト】

僕は白い霧が立ち込める森を歩き続ける。冷たい空気が僕の体から体温を奪っていく。寒いし、寂しい。

でも、独りで生きて行くしかない。姉さんは死んでしまったから僕は一人ぼっち。

「サルリファス姉さん……」

白い霧に向かって呟く。もうこの世界にいない人、僕の唯一の家族だった人の名前を……

それにしてもここはドコなんだろうか？ 全く知らない。知らない所を独りで歩くのは初めて。

正解が分からない。どっちに行けばいい？ 本当にこの方向であっているの？

「僕はどうすればいいの？ 姉さん、助けて……」

偉大な力を誇り、一時はとある組織の幹部にまで昇りつめた僕の姉さん。組織の幹部になっても僕には常に優しく接してくれた。

姉さんは本当に凄い人だった。僕よりも強くて、知識も豊富で常に正しい方向に導いてくれた。あの日を除いて——

「グオオッ！」

「……………！？」

突然聞こえてきた低い唸り声。僕は素早く周囲を見渡す。これでも昔はとある組織の暗躍部隊員だったんだ。

戦闘なら慣れている。それに僕は――

「グオオオッ！」

「……………はアッ！」

青い触手！？ 魔物だな！

僕は触手の飛んできた方向に目を凝らす。予想通りだ。触手を生やした巨大な人型の魔物が動いていた。

「“サンダーランス”！」

電気の槍を投げ、魔物の胸を貫く。僕は“電気の特殊能力者”パーフェクター！
電気を操る事が出来るんだ！

あの魔物は苦しそうに呻き、その場をのた打ち回る。これで終わりか？ 意外と呆気ないな。

「グオッ！」

「しまッ……………！」

油断大敵！ ヤツは触手を操り、僕の体に巻きつけ持ち上げる。このままだと食べられてしまう。マズイ事になった……………！

その時、1人の若い女性が森から飛び出して来た。彼女は両手に持ったサブマシンガンを使い、魔物を射撃する。悲鳴を上げながら魔物は僕を離し、後退していく。

「うわァッ！」

僕は空中で離された為、当然の事ながら地面に落下する。背中を強く打ち、苦痛に顔を歪める。

一方、あの女性は僕を無視し、あの魔物を追って走る。……あの誰だっけ？　どっかで見た事がある。

「グオオッ！」

魔物は1本の触手を伸ばす。その触手は先端が鋭く尖っていた。それに彼女は気づいていないのかサブマシンガンの銃口を魔物に向け、頭に狙いを定めていた。

尖った触手は彼女の肩に深く刺さる。そこから彼女の血を吸い取っているみたいだ。

「ウツグッ！　止めろッ！！」

「グオオ！」

この声、以前もどこかで聞いたことがあるような……

そんな事を考えている内に彼女はサブマシンガンを使い、その触手を撃つ。触手には穴が開き、千切れる。

「クソッ！」

肩に刺さった触手を抜いている間にあの魔物の本体は逃げていく。それに彼女は気づかない。

ズポッ！という音と共に触手は抜ける。抜けると同時に彼女の血と思われる液体が流れ落ちた。血なら姉さんので見慣れている。

「ハア、ハア…… また、か」

見失った魔物。彼女は木にもたれかかり、ため息をつく。この声や息の音。以前もどこかで聞いた覚えがある。

もう少し近づいて顔を見れば思い出しそうだけど……

「……………？ そこにいるのは誰だ？」

「え？ あ、僕は……！」

「……………！」

彼女の顔を見た途端、僕の表情は凍りついた。それは彼女も同じだった。お互いがお互いの顔を見て動けない。

この人、知っている。きっと彼女も僕の事を知っている。そして、凄まじい憎悪を抱いているだろう。

「貴様ッ……！」

彼女が素早く近づき、僕を押さえつける。更に、持っていたサブマシンガンの銃口を僕の額に押し付けた。

間近で彼女の顔を見て僕の体の震えは止まらなくなる。彼女によって僕は絶対に殺される。

何故なら彼女は僕が以前、陵辱し拷問を施した人だったからだ――

……………

第2話 再会（後書き）

※パーフェクター＝特殊能力者の事。生まれつき能力を有している。全ての人間が有しているワケではなく、有している人間は極稀。パーフェクターは1000万人に数人しかない。

第3話 後悔と自責

「まさか、こんな所で再会するとはな。サレファト」

サレファト…… 僕の名前だ。名前を知っていると言う事は本当に彼女は僕が以前、陵辱し拷問した人なんだ。

「私の事、覚えているよな……」

「パトラー……さん、ですよね」

警備軍の、コールド地方連隊に所属する彼女を捕らえた組織は彼女の口から情報を引き出すために拷問を行った。

その時、最初の拷問官こそ僕だった。その時、容赦なき拷問を加えた。彼女は最後には泣いていたのを覚えている。

「あの時、言ったよな？ “こんな事してただじゃ済まない” って」

「……はい、確かに」

「だったらどうなるか分かるよな？」

額に押し付けられる銃口の力が強くなる。サブマシンガンの引き金を引こうとする。このままだと本当に殺されてしまう……

「ま、待って！」

「何だ？ 遺言か？」

「ごめんなさい、許して！」

「ハハハ！ それが遺言かッ！ 哀れだな！！」

彼女には全く届いていない僕の言葉。殺気を出し、笑い声を上げる。きっと彼女は僕を殺したくてたまらないのだろう。

長い間、復讐とばかりに僕を探し回っていたのかも知れない。それほどにまで怨まれていたのか……！

「ここでお前を殺しッ…… ウッグッ！」

「……………」

突然、口を押さえて彼女は倒れこむ。口を押さえる手の指の間からは血が流れ出ている。急に何で……？

「だ、大丈夫ですか？」

僕は医者じゃないからどんな風に対処すればいいのかわからない。以前にもこんな事があった。僕の姉さんが死ぬ時だ。その時、姉さんの言葉に従って僕は……

苦痛の表情を浮かべる彼女の肩に触れる。その途端、彼女は僕の手を払いのけ、睨みつける。

「触るなッ！」

触れられたくもないのか……。それは当たり前かも知れない。あんな酷いことをしたのだから。

そんな事を思っていると彼女はその場に倒れこむ。気を失ってしまったようだ。何で？ どうしてだろう？

「あの……」

何も言わないパトラーさん。完全に気を失ってしまったようだ。どうする？ 助けを呼ぶ？ でもここはドコ？ 道なんて分からない。

……助ける？ 何で、助けるのが前提になっているの？ 彼女と

僕は敵同士じゃないの？ それに助けて元気になったらまた襲ってくるかも。

「……………」

無言で僕は姉さんのハンドガンを取り出し、銃口をパトラーさんの頭に当てる。僕にとっての災いの種をここで倒すんだ。

でも、引き金を引けない。何で？ ここで殺した方が絶対にいいのに！ やれ！ 殺してしまえッ！！

「……………」

目を瞑り、口を僅かに開け、意識を失っている彼女の顔を見ていると引き金がかかりますます引けなくなる。

……あの拷問部屋で彼女はどれだけ苦しんだんだろう？ あの拷問の最初の拷問官は僕だった。でもその次の拷問官は知らない。ウワサでは姉さんが行ったらしいけど。

では第3の拷問を行ったのはどんなヤツだったのか？ どんな拷問だったのか？ 体を切り裂かれるような拷問だったのだろうか？

僕は彼女に拷問を行った後、とても後悔した。勢いで、感情任せに彼女を陵辱した。でも後々、冷静になって考えると酷い事をしたと思った。

でも、時は戻せない。その日の夜、後悔と自責だけが頭を駆け巡った。

「ごめん、なさい」

僕はハンドガンをポケットにしまい込む。その目からは一筋の涙が頬を伝った。

霧は深くなり、辺りは不気味なほど静まり返る。次第に暗くなる森。夜になったのだろう。僕は木にもたれ掛かり、目を瞑った。

僕が目覚めます事はないかも知れない。寝ないでドコかに隠れた方がいいかも知れない。でも、もう疲れた。何もかも終わりなのかも。

辺りはますます冷えていった。そういえば、もう冬だったかな…

…

第4話 襲われるパトラー

私はふら付きながら体を起こした。何で私はこんな所で倒れていたんだ？

そう思いながらふと近くの木にもたれ掛かって寝ている少年を見た。それで全てを思い出した。

「コイツを殺すにはまたとないチャンスか」

私はサブマシンガンを持ち、銃口を彼に向ける。まだふらつく体でも相手は動かない。この距離なら簡単に射殺出来る。ここで彼を殺し、復讐を果たすんだ！

その時、近くの茂みから数人の男性の声が聞こえてきた。まさか、“敵”の人間か！？ 何でこんな時に……！

私は今すぐに彼を射殺しようかどうか迷う。先に殺すべき？ その前に身を隠すべき？ そう考えている内に茂みの中から声の主が現れてしまった。

「おッ！」

「んゝ、何だアリヤ？」

「へっへっへ、服装からして政府軍人だな。寝ているガキは知らねえが」

茂みから現れたのは人相の悪い3人の男性。全員が剣を持ち、近寄ってくる。この辺りに住む市民ではなさそうだ。

といっても“敵”というワケでもなさそう。ならばただの無法者か。

「何の用？」

「いやあ…… 用ねえ」

「何かいいモノでもないかな、と」

ああ、なるホド。コイツらはこの地にやって来る旅人や一般人を襲って強奪している連中だな。今回の獲物は、私か。

サブマシンガン握る手に力が入る。私ならこの無法者ごとき一瞬で……

「動くな」

「……………!？」

心臓がビクンと跳ねる。背中に冷や汗が流れる。油断していたかッ！

私の頭に後ろからハンドガンと思われる銃が突きつけられる。コイツラの仲間は後ろにもいたのだ。

「その立派な銃を捨てろ」

「……………」

「早くしろ!」

「クッ……」

仕方なくサブマシンガンを手から離し、地面に落とす。その途端、別の男がサブマシンガンを持つ。勝手に触るなッ！

更に数人の男が剣やその他の装備を勝手に取っていく。

「へえ、コイツ政府軍の大尉だったのか。年齢は17歳…… うん？ これ星暦2010年の年齢か」

「じゃあ、現在は21だな」

男の1人が私の手帳を見ながら言う。私は以前は政府の軍人だっ

た。今から4年前に辞職したが。

「さて、なんかいいモノはないかね？」

「お前達が持っている物で全部だけど？」

「フフフ…… そうかな？」

そう言うとその男はいきなり私の胸を触ってきた。服の上からだから何も感じない。しかし、いずれその男達は私を……

「へへへ、いいモノあるんじゃないの？」

「や、止めるッ！ 私に触るなッ！」

だが、彼らはその言葉を見做し、私を押し倒す。コイツら本気で私を……

「ハハハ、兄貴は気が早いな」

「あつたりめーだろオ！ この女結構美人じゃねえかよ。ガマンできねえぜ」

「止めるッ！」

「この女で“腰の運動”をしてやるぜ！」

「ぎやははは！ 誰か兄貴に運動後のスポーツドリンクを持って来てくれ！」

この男達に話は通じない。もう、私を犯すことでいっぱいなのだろう。誰も助けには来てくれない。どうすれば……！

そんな事を考えている内に私の服を脱がそうと男達が引っ張る。破くつもりなのだろう。でもこの服は軍の服。そう簡単には破れないが……

「ん、なかなか丈夫だな」

「きっと特殊な作りになってんだろ」

「チッ！　なら普通に脱がせるしかねえな」

クソッ！　やはりそうなるかッ！　何とかして逃げないと本当にやられてしまう。“あの時”のように……

脱出の策を考えていると男の手が私のズボンのベルトに触れられる。もう、時間がない。どうすればいい！　どうすればコイツらの手から逃れられるんだ！

「あと少しですぜ、兄貴」

「うはは、頼むぞ。俺はもう戦闘モードだぜ！」

「クッ、止めてッ！」

「この女、半泣きだぜ」

恐怖が私を支配し、頭が混乱していく。焦れば焦るほどいい策は出てこない。私は泣き叫んで助けを呼びたい。でもそれはきっと無意味だ。

だったらどうすればいいのだろうか？　彼らのモノを受け入れ、ガマンするしかないのか！？

「グエエエッ！」

「……………！！？」

突然、少し離れたところから男の悲鳴が上がった。何が起きたのか分からなかったが私は一瞬、救われたような気分になった。

悲鳴の上があった方向に視線を向ける。そこにいたのは……！

第5話 同行開始

僕は大勢の男の声とパトラーさんの叫び声で目を覚ました。彼女は数人の男に押さえ込まれ、服を脱がされそうになっていた。

必死で抵抗するが男4人では勝てそうにない。男の1人が彼女のズボンのベルトに手を触れる。早く助けないと……！

「おっと、動くなよ」

「……………！」

僕の首にナイフが当てられる。アイツらの仲間是他にもいたのだ。コイツとパトラーさんを襲っている連中を合わせて5人か。

「今から兄貴の“腰の運動”が始まるんだ。一緒に見学しようぜ……」

腰の運動？　そうか、アイツらはパトラーさんを犯す気か！　レイプし、泣き叫ぶ姿を見て楽しむつもりだな！　ふざけるなッ！！

「ははは、後少しだぜ〜！」

「“放電”！」

「グエエッ！！？」

僕は彼に電気を浴びせ、その場に倒す。彼は死んだかも知れないな。別にいいけど。彼の叫び声と共に一斉に男達が僕を見る。

「何してんだ貴様ア！」

「死にたくなかったら今すぐ彼女を放せッ！」

僕は声を張り上げる。男達は一瞬怯んだがニヤニヤしながら近寄ってきた。放す気はないし、僕が子供だからって油断している。

「フフフ、クソガキ君。死にたくなければって誰に言ってるんだ？」

「お前達だ」

「……ふざけるな！」

その怒号と共に3人の男達が一斉に飛び掛ってきた。全員、ナイフを手をしている。パトラーさんの近くで待機しているヤツは親玉か。

僕は指先にエネルギーを溜めていく。電気魔法でアイツらを一網打尽にしてやる。

「「エレキハンドガン」！」

僕の人差し指から電気の弾が飛び、男の胸を貫く。彼は悲鳴を上げ、血を撒き散らしながら地面に倒れる。

「何しやがるッ！」

「よくも仲間をやってくれ……！」

“サンダー”！」

「グエァッ！」

空から雷を落とし、1人の男を倒す。もう1人の男は狂ったような奇声を発し、ナイフを振り回しながら近づいて来る。

仲間2人を失って事で平常心を失い、混乱しているようだ。恐怖と敵を倒す事が頭を巡っているのだろう。

「ヤケを起こしたら勝てませんよツと！ “エレキハンドガン”」

僕の人差し指の先端から黄色の光が男の頭を貫く。彼は呆気なくその場に倒れ、動かなくなる。これで残るはコイツらの親玉だけだ。

「クッ！　こうなったらコイツを人質にして……」

そう言っただけで彼はパトラーさんの胸倉を掴もうとする。が、その前に彼女は彼を殴り倒す。そして、素早く頭を抱きかかえるようにして掴む。

「オ、オイ、何を……！」

そして、無言のまま彼の首を180°回し、へし折る。鈍い音と共に彼はその場に倒れ、動かなくなった。

親玉を殺したパトラーさんは放り投げられていたサブマシンガンを持ち、僕の方に視線を向ける。やっぱり、彼女は許してくれないのか……

「……………」

しばらく僕にサブマシンガンを向けていたパトラーさんは突然、銃口を下に向け、リュックを背負って歩き始めた。

次第に遠ざかっていく彼女の姿。僕は彼女を追おうかどうか迷ったが一応、着いて行く事にした。だって、ここドコか分からないし、他に誰もいないし。

「……何で着いて来る？」

「す、すいません」

やっぱりダメなのかなア？　僕は彼女に憎まれているから仕方ないよね。

「まあいい。勝手にしろ」

「有難う御座います」

「もし、下手なマネしたら即刻消す。覚えておけ」

「は、はい」

僕はパトラーさんに着いて行く。

以前はパトラーさんは政府の人間で僕は政府に敵対する組織のメンバーの1人だった。

ある時、彼女は捕まった。そして、僕は彼女に性的な拷問を行った。彼女の仲間を調べる為に。でもそれは失敗に終わった。

元拷問官の僕と元捕虜のパトラーさん。まさか、一緒に行動するなんて僕も、彼女も想像出来なかった。

でも、今は一緒に行動している。傷つけた僕と傷つけられた彼女が一緒に。今度は傷つけない。何が起きても僕は彼女を守る。絶対に！

「遅い。置いていくぞ」

「え、ごめんさない」

第6話 ゴミ山の戦い

——酷いよ。

姉さん？　そこにいるの？

——今、一緒にいるあの人は敵じゃない。

それは以前の話だよ。今は仲間なんだ。パトラーさんはそう思っ
てないけど。

——私よりもそのパトラーの方がいいんだね。

そんな事ないよ。僕は姉さんも大切に。

——でも、彼女の方が大切なんですよ？

だって昔、傷つけてしまったし、今度は守って上げたいんだ。

——へえ、そう。やっぱり、サレファトはパトラーの事が好きな
んだね。

え？　ええ？

——以前、彼女を拷問した時にやつちやたけど、凄く気持ちよさ
そうなかオしてたじゃん。

それは……！

——フッフ、入れて、とろけそうな快楽を得てさ。

い、言わないで……！

——そして、任務を忘れて快楽に浸ったんでしょ？

そんな事ない！

——せっかく再会したんだしさ、もっかいやったら？

え？

——彼女を襲って、押さえつけて、入れればいいじゃない。

………

——あのカラダを突き抜ける快楽をもう一度得てしまいなさい。
気持ちイイよ。

………！ いや、ダメだッ！ 僕は彼女を———！

＊

「うわァッ！」

僕は飛び起きる。さっきのは……夢だったのか。

「うるさいぞ」

「あ、すいません」

近くで座っているのはパトラーさん。彼女が今持っている武器はサブマシンガン……だったかな？ 確かそうだ。

僕は壊れた戦車の上から降りる。今、僕達がいるのはあの森から西の“ウォーズダスト”と呼ばれる軍用兵器廃棄地帯だ。

この世界を支配してる国際政府と呼ばれる一大組織が管理するエリアで市民は立ち入り禁止。……パトラーさんによるとそうらしい。

「……にしてもこんな所があったなんて驚きですね」

「……………」

無言のままパトラーさんはサブマシンガンを持ち、リュックを背負って先に歩き始める。僕は慌ててその後を追った。

まだ暗いウォーズダスト。東の空がうつすらと白くなり始めただけ。まだ夜は終わらない。

それにしてもさっきの夢が気になる。ただの夢なんだけどね。

「これからドコに行くんですか？」

「……ステイラルシティ」

ステイラルシティ？ どこだっけ？ 確かこの大陸の北にあったような気がするケド。うーん、思い出せない。

「それにしてもゴミが、廃棄された軍用兵器が多いですね」

「戦争が起きて以来、政府は大量の軍用兵器を生産し、使ってきたからな」

なるほど。このゴミ山は全て戦争で使えなくなった軍用兵器や飛空艇なのか。

……ん？ 戦争？ 何の話だ？

「“敵”に利用されないように警備軍が俳諧している注意しろ」

「は、はあ……」

敵？ 国際政府に逆らう反乱者の事だよね？ つまり、戦争とやらの相手。

どうしようかな？ パトラーさんに聞いてみようかな？ でも彼女、普通に言ったから一般常識なのかなあ？ 一般常識だったら聞いたら怒るよね？

「あの……」

「どうした？」

「戦争って何の話ですか？」

「は？」

やっぱりマズかったか！ そうとう変な顔されてるし。やっぱり一般常識だったんだ。

「侵入者を発見！」

「“連合軍”のスパイだな」

「捕らえろッ！」

突然、ゴミ山のカゲから数人の兵士が姿を現した。全員が白い装甲服を着ている。また肩には灰色の装甲。灰色という事は地方兵か。きっとこここの監視部隊に所属する兵士達だろう。

「チッ！」

「ど、どうします？」

「殺るしかないだろ。全員」

「こ、殺すんですか？ 彼らは政府の人間じゃ……」

「捕らえられたら拷問されて監禁される」

拷問……。以前、パトラーさんが受けた事のある取り調べだ。その時の拷問官は僕達だったけど……

「政府が本当にするんですか？」

「少し前にとある都市で連合軍のメンバーではないかと疑いをかけられた1人の少年が捕まった」

「ま、まさかその人は……」

「そうだ。彼は拷問された。辛い死ななかったらしいが……」

そんな……。拷問は警備軍には禁止されている。政府はそれを破ったのか？ いや、そんな事はないと思う。もし、やったら市民の反発を買うだけだ。

「大人しく投降しろ！」

「クッ！ “サンダー”！」

「グアッ！」

僕達に向かって走って来たその兵士は悲鳴を上げ、転がるようにして倒れる。所詮、警備軍最下級の地方兵士。この程度か……

僕はパトラーさんの方を向く。そこにはサブマシンガンを持った彼女が立っていた。銃口から上る煙が意味するのは一つ。兵士に向けて発砲した事だ。

第7話 サレファト救助

「やっぱり殺すなんて……」

数人の地方兵との戦いから数分。サレファトは未だに兵士を殺したことを後悔しているようだ。さっきからずっと同じような事を呟いている。

だったら他に方法があったのか？　ないだろうな。彼はただ単に人を殺したくないのだろう。市民はいつもそう言う。人殺しはダメと。

だから“自称平和団体”とかが政府に対し、堂々と軍縮を求める運動を起こすのだ。公言するヤツは少ないが市民は少なからずそう願ってる。強大な軍勢力は必要ない、と。

確かに軍は人を殺す事に多い仕事だ。恐らく最も人を殺す事が多いだろう。当然のことながら平和に過ごす市民からはあまりイイ目では見られない。

「やっぱり、ダメですよね」

死とほど遠い市民。彼もまたその市民の1人だ。いや、元とは言えど拷問官。純粋な市民じゃないのかも知れないが。

戦争が勃発してからは以前より軍縮を求める世論は減少した。逆に軍勢力強化を求める声が相次いでいる。これは“敵”との戦いで一時劣勢に立たされたからだだろう。今では互角の戦いを繰り広げているのだが。

「何している、先に行くぞ」

「あ、待って下さいよ」

彼の事は無視し、更に先に進んで行く。彼は以前私を拷問し、陵辱した。そんなヤツに優しく接されるか。いや、そうする必要もない。

本当ならここで殺してもいいのだが…… 一度だけ助けてくれたから生かしている。それだけだ。

しばらく進むとゴミの絶壁に出会った。ゴミが高く積み上げられて崖のようになっていいる所だ。先に進むには回り道するかここを登るか、だな。

……私ならこれぐらいワケない。アイツはどうか知らないけど。

「え、え？ そこ登るんですか？」

「イヤなら来なくていいぞ。そこでくたばってろ。捕まって性拷問して貰えるかもしれんぞ」

「……………！ 行きますよ！ 僕も登ります！」

からかい過ぎたか？ 彼はゴクリと唾を呑み、絶壁を登り始める。大丈夫か？ まあ、別にどうでもいいけどな。

私は素早く登っていく。ここを登ったらステイラルシティまであと少しだ。一方、サレファトはかなり遅い。まだ半分も登っていない。

「クッ………！」

「遅い」

絶壁を登り終えた私は見下ろしながら言う。彼は半分以上登っていた。あと3メートルぐらいか？

「待って下さいよ」

「早くしろ」

「だって……」

その時、サレファトが右手で掴んでいた部分が音を立てて崩れる。その途端、彼はバランスを崩し、叫び声を上げ、私に助けを求める。今、掴んでいる左手が離れたら彼は真っ逆さまに落ちるだろう。この高さから落ちれば重症を追うだろう。最悪“死”も有り得る。

「た、助けてッ！」

彼と最初に出会ったのはオーロラ支部の拷問室。次は先日私が魔物を追って向かったあの森。この出会いは単なる偶然に過ぎない。しかも、お互い敵同士なのだ。助ける義理などない。むしろ、本来なら殺し合いをするべきだ。

「クッ！　パ、トラー、さん……！」

彼が死んでも私は後悔しない。むしろ喜ぶ、ハズだ。

「も、もう……！」

そのまま死んでしまえ！　消えろ！　自業自得、お前には天罰が下ったんだ！！

「ク、ア……　もう、ダメ、です……」

……………。これは何故だ？　“この行動”の意味が分かっているのか？

今、私は苦痛と絶望に歪み、涙するサレファト。そんな彼の小刻みに震える腕を掴み、引き上げた。

つまり、私は彼を助けてしまったのだ。何故助けてしまった？

何か困ることでもあるのか？

「早く上がれ！」

「ウツグツ……」

私はサレファトの腕を引っ張る。彼は一気に平地部分に登り上がり、その場に倒れる。荒い呼吸をしながら腕で涙を拭う。

……。彼を助けたのはあの森での借りを返したただけだ。そう
だ、それだけのハズ、だ。

決して私は彼を許してないし、仲間だとも思っていない。

廃棄された大量の軍用兵器。それらの先にオレンジ色の朝日に照
らされた美しいステイラルシティが私の目に入る。

……目的地は近い。あの街で彼との同行も終わりだな。

第8話 華麗都市ステイラルシティ

【ステイラルシティ】

コスーム大陸の東北に位置する都市・ステイラルシティ。

政府首都グリードシティに近いこの都市を警備するのはステイラル防衛師団であった。この警備軍は私の所属していたコールド地方連隊より実力の高い部隊で規模も大きい。

オレンジ色のレンガで造られた屋根と肌色のレンガで造られた壁。テラスや道の脇に植えられた色取り取りの植物。それらがこの街を美しく優雅に見せていた。

町並みから分かることだがこの街の経済状況は良好だ。何しろ美しい街を造るにはそれなりの費用がかかる。にも関わらずこの街は美しい。それはつまり、この街の良好な経済状況を表すには十分すぎるモノであった。

私とサレファトはそんな美しい都市にやって来た。

「パトラーさん、この都市ではゆっくり出来そうですね」

「……………」

彼には何も言っていないが私はこの都市で別れるつもりだ。

彼と私の間にあるのは霧でぼかされた憎しみの関係。殺し合いの関係。いや、彼は私の事を憎んでないし、殺そうとも思っていないが、では私の一方的な憎悪か。

過去は消せない。私は彼を許したつもりはない。いつの日か、殺してやりたいと思っている。

今まで一緒に行動し、協力して来たのは、あの森でたまたま悪党

に襲われ、お互い共通の敵と一緒に倒したから。言ってしまうはこの関係は“成り行き”で出来た関係なのだ。

「これからどうしますか？」

「日も暮れてきた。今日はステイラルシティホテルに泊まる」

「え、えっと、ホテルってお金っていりますよね？」

「無料で泊まれるホテルがあるなら紹介してくれ。どこにあるんだ？
ん？」

私は皮肉を込めて言っちゃった。

「あの、僕、お金ないんで…… その、少し……」

「は？ 私のお金でホテルに泊まりたいのか？ お前ってホント最低なガキだな」

彼は悲しそうな顔をして下を向く。そして、「ごめんなさい」とだけ言って私の側を離れて行った。まさか、ステイラルシティで野宿でもするのか？

……それしかないよな。今から働いてお金を稼いでホテルに泊まるわけにもいかないし。

私は寂しそうに肩をすくめて去って行く彼の背中を見た後、ステイラルシティホテルに入った。今日はじっくり寝れそうだな。……たぶん。



日は落ち、ステイラルシティは闇に包まれる。しかし、流石、ステイラルシティ。夜も美しい。眩しいほどに明かりが灯され、その夜景はきらめく光の海とも呼べる。

美しい街。だが、流石の経済良好のステイラルシティでも一晩中

この光の海が展開される事はない。1時を過ぎると暗くなる。

そして、この都市の条例で午前2時から午前4時まででは外出禁止となっている。……この時間帯に“ステイラル闇の顔”が現れる。

このステイラルシティの長官は前政府総帥トメルラーの息子でタイラントという男であった。彼は表向きは良き長官。ステイラルシティの今の繁栄があるのも彼のお陰と言っても過言ではない。

だが、そんな彼の心の内側は“歪んだ心”だった。毎夜、私設ステイラル治安部隊を率いて外出禁止時間に外にいた者を捕まえるのだ。

そして、捕まった哀れな者の内、男性は遙か南方に位置する疫病と不毛の大陸・“アポカリプス大陸”に売られる。奴隷として、だ。また女性と子供はステイラルシティ中心に位置するタイラント低に連れて行かれ、生物実験の材料になるか、卑劣な拷問でじわじわと殺される。

野宿は危険。彼は、サレファトはこの事を知らないのだろうか？

まあ、知った事ではないが。……ではこの心に残る不安は一体何なのだろうか……？

私はもう一度、窓からステイラルシティの夜景を見る。明かりが減った。これからますます暗くなっていくだろう。夜の2時を回った瞬間、明かりはほとんどなくなる。

そして、ステイラル治安隊が動き出し、街の違法者をとっ捕まえるのだ。今日は誰が捕まるんだろうな……？

第8話 華麗都市ステイラルシティ（後書き）

「ステイラル治安部隊」は「ステイラル防衛師団」とは別の部隊です
ステイラル治安部隊はステイラルシティ長官のタイラントが私的に
編成した組織です

第9話 サレファト捕まる

ステイラル治安部隊。狂気の市長、タイラントが私的に編成した部隊。外出禁止時間に出歩いた違反者を捕らえ、違法に裁き、慈悲なき罰を下す。

もう、外出禁止時間だ。彼らが動き出す。哀れな違反者を捕らえに……

＊

【ステイラルシティ 裏町】

狭い道。光の少ない暗い路地。捨てられたダンボール。

僕は人目に付きにくそうな所で夜を明かす事にした。この捨てられたダンボールをベッドに寝る事にした。

パトラーさんに迷惑はかけられない。以前、酷い事したから。もう、これ以上は迷惑かけられない。僕はどんなに苦しくても耐える。その時、どこからか多くの人々が走ってくるような足音がした。そういえば、さっきから人の姿を見ていないぞ。

「こっちで間違いないか？」

間違いない？

「ええ、治安飛空偵察兵が確認したと……」

確認した？ まさか、僕の事を探している！？

その時、建物の角から数人の人間が現れた。全員が装甲服を着ていて、彼らが政府関係の組織に所属している事がすぐに分かった。

「あ、いました！」

「おお、アイツか……」

大勢の兵士が次々とやって来る。何？ 僕に何の用なんだ！？
もしかして、僕の“正体”がバレた？ それともウォーズダスト
で兵士を殺した事がバレたのだろうか？ もしかしてその両方？

「その君、我々と共に来てもらおうか」

「え？ 何ですか？」

「そんな質問をするという事は、お前は知らないようだな」

そういうと彼らはアサルトライフルの銃口を向ける。黒い穴。その下から発せられる赤い光。その光は僕の顔に当たっていた。

背中にヒヤリとしたモノが流れ、僕の鼓動が早くなる。胸に槍が突き刺さったような感覚を覚える。

「……歩け」

「……………」

「早くしろ！」

「クッ……」

その兵士の怒声にビクリとし、僕は誘導されるがままに歩き始める。今はひとまず言うことを聞いて、怒らせないようにしよう。そう思ったから僕は歩いた。

でも、この先、僕はどうなるのだろうか？ 殺されるのか？ いや、そんな事はない。政府の人間がそんな事をするハズない。だから大丈夫だ。

僕は誰もいない冷たい風が吹き抜ける街を歩いて行く。本当にこの街では誰一人出歩かないんだ。何でだろう？ 何かあるんだろう

か？

【ステイラルシティ ステイラル防衛師団本部】

僕が連れて来させられたのはこの都市の警備軍の本部だった。街の中心に建設されたこの巨大な建物。多くの国際政府防衛兵を有し、いつ襲撃されても即座に対応出来そうであった。

まさか、こんな所まで連れて来られるとは…… 僕の正体がバレたとか考えられない。でなければ、僕のような子供がこんな所に連れて来られるハズがない。

建物内は豪華。至る所にシャンデリアが吊り下げられ、壁には美しい植物の模様。床には真っ赤なじゅうたんが敷かれ、美しい模様が描かれた木製の扉は自動ドアであった。

だが、最も驚いたのはステイラルシティ長官の部屋へ通じると思われる扉。その扉にはバラの模様。しかし、茎の部分はエメラルドの宝石。花びらの部分はルビーの宝石で出来ていた。

「タイラント長官！ “サクリファイスB”を持って来ました！！」

僕を連れて来た連中の隊長と思われる男が大きな声で叫ぶ。彼もまた豪華な服装で、髪は金髪。肌は白く、体は細かった。……こういう人の事を美形というのだろう。

ところで“サクリファイスB”って何？ 持って来たというのは？

「はっはっはっ…… よくやったぞ、チョイス隊長」

「有難う御座います、タイラント長官」

……え？ 扉が開いていないのに声が！ どうなっているんだ？

そのトリックは簡単であった。よく見ると黄金の取っ手の部分に小さなスピーカーがあった。音声はここから出ていたのだ。それにしても一瞬、本物の肉声かと思ってしまった。このスピーカーはどれだけ高性能なんだ。

「チョイス隊長、今回の“サクリファイス”は“賞品”でしょう」

「では、“ステイラル大会”を開催するのですか？」

「さよう…… 数年ぶりに“ステイラル大会”を開催する……」

サクリファイス？ 賞品？ ステイラル大会？ この人達が開けば出てくる言葉は理解不能な言葉ばっか。何を言っているんだろう？

「では明日、市民に大会の開催を発表します」

「うむ、久しぶりの大会だ…… じっくりと楽しもう……」

「はい、長官」

よく分からないが近いうちに大会が開催され、その賞品がサクリファイス。……サクリファイスが何か分からないとこれ以上、推測できないな。

僕の腕を掴んでいた兵士が引きずるように僕を別の部屋に連行する。今はまだじつとしていよう。下手に逆らったら殺されるかもしれない。サクリファイスが何か分からなくなるかもしれない。

そして、パトラーさんにも迷惑かけられないから、今はじつと耐えるんだ——……

第9話 サレフアト捕まる（後書き）

サクリファイスAⅡ男性

サクリファイスBⅡ女性・子供

第10話 参加

【ステイラルシティ 市内】

ホテル（高級というのはサレファトには内緒）で一夜を過ごした私は多くの人々で賑わい活気溢れる市内を歩いていた。

サレファトは結局どうしたのだろうか？ 彼は電気を操る特殊能力者。今は崩壊した大組織の元幹部。間違ってもステイラル治安隊に捕まるという事はないだろう。

恐らく私に捨てられ、ステイラル治安隊に追われたのだからもうこの街にはいない。昨夜の内に逃げただろう。

もう、会うことはない。私も関わることはない。これでよかった。全てが丸く収まった……と思う。

「……ステイラル、が開催……」

「既に……の強者がエントリー……」

………？ 注意深く人の話を聞くとある話題ばかり聞く。ステイラル、賞品、参加、大会……

昨日はそんな話は全く聞かなかった。一体何か始まるのか？

「……4年ぶりだな」

4年ぶり？ そういえばウワサで聞いた事があったけ。4年前のこの時期にステイラル大会が開催された事を。

私は4年前、政府の地方軍に所属していた。あの当時、政府の特殊軍であるP A R U M。そのP A R U M軍の副長官ネスト・フィルドさんと共にサレファトの所属していた組織を探っていた。

そんな時だった。私が彼の組織に捕らわれ、拷問を受けさせられ

たのは。

聞きたいのは一つだけよ。

――仲間は……いない。

フフフ、パトラーさんでしたっけ？

――クッ……！ 何をするッ！

そろそろ仲間の事を教えてくれないかしら？

――イヤッ！ 絶対に言わないッ！

蘇る記憶。まだ私が未熟で幼かった頃に受けた記憶。それが消える事は永遠にないのだろう。つまり、サレファトやその仲間に対する憎しみも永遠に……

「そのアナタもどうですか？」

「ん？ 私か？」

華やかな衣装に身をまとった1人の女性が声をかけてくる。その手にはたくさんのチラシ。その内の1枚を差し出してくる。私はそれを無言で受け取った。

受け取るなり彼女は私の前から去り、別の市民に声を掛け、同じようにチラシを渡していく。

「ステイラル大会の参加用紙、か」

その用紙にはステイラル大会の詳細が書かれていた。それによるとステイラル大会とはバトル大会のようで優勝者には“サクリファイス”が渡されるらしい。

……サクリファイス？ 確か“生け贄”って意味じゃなかったか？
？ どういうことだ？

私はこれから特にする事もない。以前、政府軍人だったからそれ

なりに力はある。サクリファイスについても気になる。

方向を変えて歩き始める。行き先はステイラルシティの中心にあるステイラル闘技場。このステイラル大会の参加受付はそこで行われているらしい。

暇潰しに、自分の腕試しに、そしてサクリファイスを確めにこの大会に参加してみるか。

【ステイラルシティ 闘技場】

受付にて参加申し込み書を提出した私はそこで配られた別紙に必要事項を記入してそれを提出する。これでエントリー完了だな。

説明によると大会は一週間後。武器の使用制限はない。それに相手を殺してもいいらしい。普通のバトル大会なら確実に問題になっている。それが出来るのは主催者であるタイラントが前政府総帥の息子だからだろう。親の権威を利用した愚行だな。

そんなヤツが仕切る大会の賞品は何なのだろうな？ どうせ下らないモノだと思うが……

「それでは2日後にテストを行います。テストは全部で5回。つまり5回、こちらが召喚する魔物を倒していただきます。途中で負けた場合は失格。本戦への出場は出来ません」

「ああ、分かった。2日後だな」

派手な衣装を着た受付の女性から説明を受けた私は会場を後にする。あの豪華なドレスは着るように指示されているのだろうか？

まあ、どうでもいいケド。

その派手な受付員から渡された紙を見る。そこには予選についての説明が書かれていた。ま、簡単な内容だな。召喚される魔物を倒す、それだけだ。

魔物退治なら軍に所属していた頃、よくやっていた。何だか、懐かしいな……あの頃は戦争もなく平和な世界だった。

私が軍を抜けて2年後だったな。恐怖と混乱を巻き起こす戦争が勃発したのは。

第10話 参加（後書き）

【予選について】

本戦に出場するには予選を通過していただきます

予選の内容は魔物を5体倒す事です

魔物は一体ずつ召喚されます

召喚される度に強くなっていきます

死なない程度に頑張ってください

※魔物はレベルD↓C↓B↓A↓Sの順に召喚されます

第11話 スティラル大会 予選

【スティラルシティ 闘技場】

受付を済ませてから2日後。私は闘技場のバトルフィールドにいた。四角形に造られたバトルフィールド。少し空間を開けて周囲には客席。そこに座る人は少ない。予選だからだろう。

天井はなく、あるのは蒼い空と白い雲。そこから光と風が入り込み、闘技場内は清しい。

私はこれからここで予選であるテストを受ける。

「それではエントリーNO. 95 パトラー テストDを開始します」

アナウンスと共に空中に青と黒の穴が広がり、中から一匹の魔物が出現する。飛び出してきたのは植物の葉と蔓で構成されたような人型の植物モンスター・プランツィー。

問題ないな。ただのザコモンスターだ。

「バトルスタート！」

私はスタンロッドに内蔵した“魔法発生装置”を起動させる。アイツは草タイプのモンスター。炎技が弱点のハズだ。炎魔法を使って一撃で仕留めてやる！

スタンロッドの先端をプランツィーに向ける。敵は蔓の腕をフラフラと動かしながらゆっくりと近づいて来る。プランツィー系の魔物は動きが遅い。だから落ち着いて戦える。

「消えろッ！」

私はスタンロッドの側面に取り付けられたボタンを押す。すると赤い炎が先端から飛び出し、一直線にプランツーに向かって飛ぶ。ファイア弾はプランツーの胸に直撃し、爆発する。炎がプランツーの体に巻きつき、炎上する。たちまちプランツーは黒い灰を空中に撒き散らしながら静かに音を立てて倒れる。それは紙が床に落ちたような音と似ていた。

「レベルD 勝利です。次はレベルCです！」

先ほどと同じように空中に穴が開き、一体の魔物が出現する。鋭い爪を持つ四本の脚をコンクリートの地面に付け、魔物は私の前に立ちはだかる。

「バルルウウ！」

濃い緑色の体毛を持ち、鋭い2本の牙。目はオレンジ色に光り、私を睨みつける。形は犬だがその姿を見れば誰でも魔物と分かるだろう。

毒タイプのバイオバウ。こいつがレベルCの魔物か。

「バトルスタート！」

アナウンスと共にバイオバウは走ってくる。さっきのプランツーとは大違いだな。犬だけにスピードがある！

バイオバウは一気に距離を詰めると、右脚で引っここうとする。長く鋭い爪。それが迫る。

金属特有の高い音。それが会場に響く——……
バイオバウの爪は私を傷つけられなかった。何故なら、持ち込んだ

軍用のアサルトソードでその大きな爪を止めたからだ。

バイオバウはすぐに後退し、再び走ってこようとする。同じ事を繰り返す気か？ でも、私は同じ事はしない。

魔法発生装置の先端をバイオバウに向ける。プランツを倒したときと同じようにファイア弾を放つ。

「喰らえッ！」

「バオオ！」

顔にファイア弾を喰らい、火の粉を上げながらバイオバウはのた打ち回る。

これで倒れた…… いや、ダメだ！ まだ生きている！

「バオオ！」

油断した私の隙を衝いて、バイオバウは近くにまで寄って来る。

そして、爪で…… いや、爪じゃない。口を開けた。噛み付く気か

！？ 私は素早くアサルトソードを構える。来い！

「グオオオ！」

「……………！！？」

バイオバウに噛み付く気はなかった。口を開けたのは…… “毒ガス”を吐く為だったのだ。

濃い緑色の煙が私にかかる。その有毒性の気体を吸い込んだ私は急激に気持ち悪くなる。腹から何かがつき上がってくるような気分にかられ、咄嗟に口を手で覆う。

その瞬間、コンクリートの床にうつ伏せに叩きつけられる。叩きつけられた時に顎を強打し、危うく舌を噛みそうになる。また、背中に激痛が走る。この痛みはあの爪で引っかかれたからだろう。

「クッ……！」

「ガルルルウウ！」

前脚を私の背中に乗せたバイオバウはゆっくりと顔を近づける。
爪が背中に食い込み、痛みが走る。

こんな所で負けるのか……？ いや、絶対に勝つんだ！ 私は負けない！

素早く手を伸ばし、落としたアサルトソードを拾う。そして、近づいてきたバイオバウの目に突き刺した。バイオバウはまさかの攻撃とそれによる激痛で飛び上がる。チャンスだ！

私は激痛に耐え、立ち上がると魔法発生装置で攻撃する。今度は薄い水色の塊を飛ばす。氷の弾だ。それはバイオバウの背筋に当たると大きな氷の塊となり、そこを凍らせる。

「バオオ……！」

「これで終わりだ！」

再び魔法。今度は空中から小さな雷を幾つも浴びせる。電気系の魔法・サンダー。それを浴びたバイオバウはその場に倒れ、動けなくなった。……私の勝利だ。

「レベルC クリア！ 次はレベルBとなります」

もう、次の戦いか。連戦とは聞いてなかったのだが。文句を言ってもどうせ取り合ってくれないのだろうな。だったら最善と全力を尽くすだけだ。

魔法発生装置を使い、バイオバウから受けた毒と傷を癒す。さあ、かかって来い！

「ケケケケ……」

私の視線の先には一匹の小人。その大きさは50センチ程しかない。何だ？ 小人型の魔物“ゴブリン”か？ いや、そんなハズはない。ゴブリンはレベル“G”ぐらいしかない。ではコイツは……？

「ケゝケッケッケ♪」

ソイツの目が怪しく光り、私に紫色の光りを浴びせる。今のは何だ？ 体に異変はないが……

いや、待てッ！ 思い出したぞ！ アイツは“グレムリン”だ！
！

第11話 ステイラル大会 予選（後書き）

【プランツ】 レベル16（D）／タイプ草

植物型の魔物。物理攻撃が主。

一度捕まると脱出はほぼ不可能で食べられてしまう。

【バイオバウ】 レベル22（C）／タイプ毒

毒タイプの猛獣。吐く息は有毒性。

集団戦の方が得意だったりする。

第12話 ヤミノキオク

グレムリン。小人魔物でもそこそこ強い魔物だ。主な攻撃は魔法。機械の、特にコンピュータに異常を発生させる魔法を使う。という事はさっきの魔法攻撃は……

「ケ〜〜！ ケツケツケツケ〜！」

私は魔法発生装置でグレムリンにバイオ弾を放つ。いや、放ったハズだった。しかし、出てきたのはファイア弾。しかもそれはまったく別の方向に飛び、客席に張られたシールドに当たる。

クソッ！ さっきのグレムリンの魔法は“これ”が狙いだったのか！ 魔法発生装置に異常を起こさせる事が！

私は魔法発生装置を投げ捨てる。こうなったら直接、物理攻撃で倒してやる。血のついたアサルトソードの先端をグレムリンに向ける。彼はニヤニヤと舌を出しながら笑っていた。……キモ。

「ケキヤケキヤケキヤ……」

「失せろッ！」

アサルトソードを振り上げながら走り、グレムリンの近くに寄る。その瞬間を待っていたかのようにグレムリンは大量の白い球体を飛ばす。……マズい、衝撃弾かッ！

私は慌てて、動きを止めるが既に時遅し。無数の衝撃弾が私を襲う。最初の衝撃弾が私の正面で爆発する。それによって私の体はコンクリートの地面に倒れこむ。

「クアッ……！」

更に次の白い弾。再び爆発。息をつく暇もなく次の衝撃弾がやって来る。私は両腕で顔を守り、体を丸めて激痛に耐える事しか出来なかった。この攻撃はいつまで続くんだ……！

「ケケケケッ！」

「グッ！ クウッ！ ウアッ！」

「ケケケケケ！」

「グアッ！ 止め、ろッ！ クアッ！」

＊

攻撃が止んだ時、私は既に立つ気力すらなかった。でも、見ればグレムリンも魔力を使い切ったのかかなり動きが鈍く、ヨロヨロとしている。

チャンスは今しかないようだ。今を逃せばもう二度とチャンスは巡ってこないだろう。今を逃せば再びあの攻撃が……

私は上半身を上げ、腰のカバンからハンドガンを取り出し、銃口をグレムリンに向ける。ヤツは未だにヨロヨロと歩いている。

乾いた音が会場に鳴り響いた――……。グレムリンの額から血が飛び、その小さな体は倒れる。

「レベルBクリアです！」

そのアナウンスを聞き、私は落ちている魔法発生装置を拾い上げる。もう、グレムリンは死んだからあの魔法の効果は消えた……と思う。私はそれで自分に回復魔法をかける。グレムリンから受けた傷が癒される。

ふと見ると魔法発生装置の残りエネルギーが0になっていた。これでもう使えない。次のレベルAとレベルSはアサルトソードか武器を使うしかなさそうだ。

「それでは次はレベルAです！」

空中に黒い空間が現れ、魔物が召喚される。飛び出して来たのは巨大な怪鳥。この魔物を見たことがある。確か名前はランフォリンクス。翼竜の一種で物理攻撃が主な攻撃だったと思う。

「キャパパパパ！」

奇声を発しながら空中を飛び回るランフォリンクス。2メートル近くもある巨大な翼。獲物を狙う鋭い目。口からチラつかせる牙。アレに捕まったら即食べられてしまう。この大会は死者も出る。予選として例外はない。

「来い！」

いや、別にこの言葉に意味はない。来いって叫んでも相手は魔物。私の言葉を理解できるハズもない。

ランフォリンクスはグルグル空中を旋回していたかと思うと突然、高度を下げ、私の真正面から突っ込んで来る。見えるのは黄色く不気味な歯と透明な液体、涎。そして、赤い舌。ヤツは口を開け、突っ込んできていた。

「魔法攻撃してくるヤツよりかはマシだッ！」

手に持った“物”を投げる。それは真っ直ぐと飛び、口を開け、突っ込んで来るランフォリンクスの口に入り込む。

そして、私は即座に横に飛ぶ。そこに立っていたら食べられてしまうからだ。これで攻撃回避……出来なかった。口で食べられる事は回避。問題はデカイ翼だった。ランフォリンクスの翼は2メートル

ルもある。その翼と正面衝突し、その衝撃で私は吹っ飛ばされる。

「……………！」

吹っ飛ばされた体は地面に落ち、背中を強打する。翼に当たった顔と床に強打した背中がズキズキと痛む。

一方、ランフォリンクスは空中に舞い上がり再び旋回していた。が、その体は突如爆発する。血と肉片が飛び散り、辺りに赤い水玉を描く。さっき口に放り投げたのはハンドボムだった。

「ハア、ハア、どうよ？」

ランフォリンクスは燃えながら墜落する。大きな翼はボロボロになり、顎がなくなっていた。それでも尚、動き私を狙おうとするソイツ。私は手に持ったハンドガンでトドメを刺した——……

「レベルAクリアです」

アナウンス。レベルAはクリアした。正直、レベルAは楽だった。レベルCのバイオバウやレベルBのグレムリンより楽だった。

次はレベルSか。強力な魔物のご登場だな。この魔物に勝って私は優勝する！ あ、本戦に出場する、か。

そんな事を考えている内に空中に黒い穴が現れ、魔物が召喚される。次の魔物は……！

「クアアア……」

「なッ……！！ こいつは、まさか！」

私の前にやってきたのは植物の魔物。その体は人間に幾つものツタを絡めたような体をしていた。大きさは3メートル程だろうか。

プランツが突然変異を起こして生まれたと言われる触手型植物
モンスター“アルテミス”だった。

“ヤミノキオクが蘇る。心の奥深くに封じ、絶対に思い出さく
ないヤミノキオク、が”

第13話 VSアルテミス

私は先手を打って銃弾を飛ばす。黄色い光と共にサブマシンガンから銃弾が飛び、緑色の触手で覆われたアルテミスの体に当たる。濃い緑色の樹液が飛び、白いコンクリートの床に散る。

だが、そんな事ではコイツは倒れない。ヤツは数本の触手を伸ばし、私を捕まえようとする。

「クッ！ 私に近づくな！」

私は剣を取り出し、向かって来る緑色の触手を斬っていく。だが、ヤツは次から次へと触手を伸ばし、私を捕まえようとする。

ヤツは相手を捕まえ、体液を吸収する。主な栄養源は生物の体液だった。しかもアルテミスはある程度の知能もあるらしく、捕まえた獲物を体内で長い期間生かしておくこともするらしい。

「お前なんか私に捕まえられるかッ！」

斬る。斬る。斬る。

飛ぶようにやってくる触手を私は斬り続ける。捕まりたくない。あの触手に捕らわれて利用されるなんてイヤだ！

私の心に恐れが湧く。“4年前の忌まわしき記憶”が蘇る。“あの時”は私の敬愛するあの人が助けてくれた。彼女は危険を顧みず私の為に全力で戦って助けてくれた。

私は助かった。永遠の苦痛に引き込まれるところを救ってくれた。あの時、どんなに嬉しかったか。どれほど感謝したか。

「シュウウー！ シュウウー！」

「近づくなッ！」

また一本の触手が斬られ、切り口から緑色の樹液を飛ばしながら落ちる。

“あの時”、私を救ってくれた彼女はいない。私が軍を抜けて3年後、反乱者として政府に追われ、行方不明になってしまった。どこに行ってしまったんだろうか？ あんなにいい人だったのに。あんなに強くて仲間思いの人だったのに……

その時、一本の触手が私の剣を突き飛ばす。剣は高い音を何度か立て、遠くに飛ばされてしまった。

「し、しまった……！」

戦闘中に他の事を考え、気を取られるなんて……！　なんて愚かなんだ！　私は！

でも、もう後の祭り。たくさんの触手が私の体を目掛けて四方八方から飛んでくる。回りは全部敵。味方なんて誰1人いない。

恐怖が一気に高まり私の心を染め上げる。4年前と同じようにただのエネルギー源にされる。苦痛を与えられ、一生エネルギー奴隷にされる……！　そんなのイヤだ！

「うわアアッ！！」

消えろッ！　消えろォ！　私に近づくなッ！

炸裂するサブマシンガンの銃撃。無数の弾が飛び、触手に穴を空ける。だが、それも一瞬の間だけ。別方面から飛んできた触手が私の白いブーツを履いた右足首に巻きつき引っ張る。

バランスを崩し、サブマシンガンを落とす。ヤツはそれを拾う間さえ与えてくれず、私を引きずり回す。引きずられる先はアルテミスの本体だった。

「クッ……！」

何とかしないと！ 何とかしないと本当に……！

私はアルテミスを見る。幾つもの触手を伸ばし、私を待ち構えていた。その触手群は先端を鋭くしていた。コイツは獲物を長く生かすタイプじゃないな。捕まえ次第、あの触手群で突き殺し、体液を吸うのだろう。

あの時、4年前のあの日、私はどうやって救われた？ もっと言えばあの人はどうやって私を救ってくれた？ 絶体絶命の危機から……

あの時の何度も聞こえた腹に響く爆音。体を感じた熱。あれは何だったんだ……？

「ク、どうやって……？ “ファイル……”！」

そう思っている間にもどんどん引きずられていく。その速度は決して速いものではなかったが確実に引きずられていく。

爆音と熱……？ そうか。分かった。爆発物！ それを使っただ！

「も、もう4年前とは違う……！ 私1人でも勝てる、いや勝つんだ！」

私は手榴弾しゅりゅうだんを取り出す。右足首に巻きつき、触手によって引きずられる体。クッ！ 狙いが定まらない。でも時間はない。アルテミスの体はもうすぐそこまで迫ってる。一か八か、私はピンを引き抜いて投げた――

「当たれ、当たってくれ！」

私はついつい口に出す。それが意味ない事だと分かっている口に出してしまう。

手榴弾は飛ぶ。その体を回転させながら飛ぶ。それはアルテミスの方に真っ直ぐと飛ぶ。が、しかし、無情にもそれは跳ね飛ばされた。

「……………！」

終わった——…… 希望が打ち砕かれた。そんな感覚に陥った。背中に冷たい水を流し込まれているような気がした。

引きずられる私の体。一本の槍のような触手。それが私の肩に突き刺さった——……

第13話 VSアルテミス（後書き）

【パトラーの過去】

◇星歴2010

- ・とある所で性的暴行を受ける
（関係者にサレファト。「ある人」によって助け出される）
- ・パトラー、政府軍を辞職する

◇星歴2013

- ・パトラーの敬愛する「ある人」が反乱者として追われ始める

◇星歴2014（11月）

- ・サレファトと出会う
- ・ステイラルシティに入る
- ・ステイラルシティ大会 開催（現在）

第14話 予選突破!

【ステイラルシティ ホテル】

夜になり、私は昨日泊まったホテルに戻った。右肩がズキズキと痛む。そこを左手で抑えながらベッドに倒れ込む。

予選は突破した。あのレベルSの魔物、アルテミスは倒した。なんとか倒せた。アレは奇跡だろうか？ あの時――……

＊

右肩に突き刺さった触手。他の触手も私の体液を吸い尽くそうと槍のように先端を鋭く尖らせ、私の体を目がけて突き進んでくる。

……私、こんな所で死ぬのか？ こんな所で死んでしまうのか？ クッ！ こうなる事が分かっていたら参加しなかった。自分を過大評価していたんだ。死にたくない！ 誰か……！ “フィルド”さん…… 助けて！

その時、轟音と共に煙が舞い上がり、地面が僅かに揺れる。何が起きたんだ……？

「クオオオオオ！」

「……………」

アルテミスが苦しみの声を上げる。煙で彼は見えなかったが何か起きたらしい。気がつけば肩に刺さった触手は力なくその動きを止めていた。

しばらくすると煙が晴れ、彼の体が見え始める。その体は無残だった。緑色の体は炎に焼かれ黒くなり、一部は灰となって空中に消えていく。

「な、なんで……？」

アルテミスはフラフラと歩き回っていたがやがてその場に倒れる。彼は植物の魔物。炎にはとても弱い。いくらプランツの時と比べて攻撃力・素早さが上がったといっても弱点である炎攻撃を食らえばひとたまりもないのだ。

「レベルS クリアです」

そのアナウンスを聞いた私はようやく恐怖から解放される。アイツは本当に死んだんだと実感し……

＊

アルテミス戦の最後に起きた謎の爆発。あれのお陰で私は死を免れ、勝利を手にした。

今、考えてみればあの爆発が起きた原因も分かる。あれは自分の投げた手榴弾だ。あの時投げた手榴弾はアルテミスの触手に弾かれた。だが、全く別の所に飛ばされたワケでなく手榴弾は運よくアルテミスの足元に落ちた。それが爆発したんだろう。

もし、手榴弾が全く別の所に飛ばされたら今頃私は生きていなかった。死んでいただろう。ヤツに全身の体液を吸い尽くされて……

「……華麗都市ステイラルシティ、か」

私はホテルの窓から市内を眺める。今、私のいる所は最上階の部屋。（つまり、おカネが凄くかかる部屋）この部屋からだとも市内を眺める事ができる。

この都市の長官がタイラントになって急成長した。小さな地方都

市でしかなかったこの都市を巨大な都市にし、その名は大陸全土に知れ渡っている。

だが、その一方でこの都市には外出禁止時間帯が制定され、それを破る人間は消される。

「光と闇の2つの顔を持つ都市、だな」

私はカーテンを閉め、窓から離れる。

予選は後10日行われる。参加者が多いからであろう。私は今日の3日目で終りだが……

聞いた話によるとこれまでの予選で脱落した参加者は121名。その内2名は死亡。予選突破者はまだ3名しかいないらしい。私を入れて3名だ。

「優勝商品って何なんだろうな……？」

それが最も気になる。ステイラルシティ長官の主催するこの大会の優勝賞品。一体何なのか……

莫大なおカネだろうか？（そうだと嬉しいケド）それとも宝石や黄金といった物だろうか？ ……私たちの考えつかない物か？

まあ、ここで考えていても仕方ないな。優勝すれば分かることだし、な。

私は部屋にあって冷蔵庫から炭酸飲料の入った缶を取り出すと、それを一気に飲み込む。喉の奥深くで炭酸が炸裂する。

「……………！ うッグアッ！」

缶を勢いよく机の上に乗せる。何度か咳き込みながら胸を押さえ、椅子に座りこむ。な、なんで炭酸飲料を一気飲みしたんだ…… 罰

ゲームを受けているワケでもないのに……！ 目から涙が出そうになる。

しばらくして落ち着いてくると再び缶に手を伸ばし、残りを今度はゆっくりと、少しずつ飲んでいった。

第14話 予選突破！（後書き）

【アルテミス】 レベル38（S）／タイプ草

草タイプの魔物・プランツーが突然変異して出来た魔物。人型をしているのはプランツーの頃の名残と推測される。長い触手を使い、生物の体液を吸って活動する。

第15話 サレファートの推測

【ステイラルシティ 防衛師団本部 地下特殊監獄】

寒く暗い監獄。ステイラルシティ防衛師団本部の地下。暗く人目のつかない所。重罪人を閉じ込めておく所。狭い通路。監獄の数はたった3つ。僕はその1つに閉じ込められていた。

サクリファイス。ステイラル大会の優勝賞品のこと。何を意味するのかは分からない。……ケドそれは僕にとってよくない事なんじゃないのだろうか？

いや、確かサクリファイスは賞品って言っていた。という事は優勝者に送られるのはサクリファイス。もしサクリファイスが僕だったら？

「……奴隷？」

ゾクリとしたモノが背筋を走る。冷たい手で背中を撫でられたような感じ。

僕は奴隷にされる？ 女性だったらどんな使い方をされるのか分かる。ハッキリ言っちゃえば性奴隷。では男だったら……？

——「働けッ！」「ぶっ殺すぞ！」「サンドバッグだ。お前は」

「腹いせに殴らせろ」「ハハハ！ 苦しんで死ね！」「奴隷だろ！？」
「口答えしてんじゃねえよ！」

「う、わア……！」

ガクガクと体が震える。捕まってから数日。僕はこのサクリファイスやこの後について考えて来なかった。ワケは分からない。いや、もしかしたら薄々答えは分かっていたのかも知れない。それに気づ

かない為に僕はワザと考えなかったのかも知れない。

「クッ、ど、どうしよう……」

ヤバい。もしそうなら本当にヤバい。僕は“飼われる”。もし飼
い主が極悪非道な人間だったら、もし人をイジめるような人間だっ
たら……？

こ、殺される！？ いや死よりも酷い目に合わせられる！？ 死
んだ方がマシだと思わさせられるのか！？

「それなら今すぐに……。……。……！」

死ぬ？ 今ここで死のうとすれば出来る。そんな事はワケない。
舌を噛み千切ってしまえば死ぬる。ちょっと痛いかもしれないケド
……

でも、それは命をムダにする事になる。姉さんに助けて貰った命
を！ 姉さんが死と引き換えに守ってくれた命を！

「僕は死ぬに死ねない……。？」

姉さんの命をムダにして死ぬ？ それは絶対に出来ない。では死
よりも苦しい苦痛を受けながら生き続ける？ それもイヤだ。……。
けど、姉さんの命はムダに出来ないから生きるしかない。奴隷とし
て……

……。ふと思い出す以前の記憶。あの北に位置する“オーロラ支部
”。僕が以前までいた組織の支部。そこで“やった事”の罰なのか
……。僕のやった事の報い……

「パトラーさん……」

嫌がるパトラーさんを無理やり僕は……。尋問というのを名目に彼女を犯した。奴隷という人生は僕に与えられた当然の報い……！イヤだ！ たとえそれが当然の報いだとしても僕はイヤだ！ そんな人生なんて生きている意味がない！

「クウツ……！」

誰か、助けて！ 誰か僕を救って！ パトラーさん、後1回だけでいいから助けて……！

はち切れそうな心。その中で強く念じる。だけどそれには誰も応じてはくれない。静まり返った監獄。誰も応えてくれない。当たり前といえど当たり前なんだケド……

「ハア……」

僕はため息をつき、ガクガクと僅かに震える体動かし、壁にもたれる。ヒンヤリとした感触が伝わってくる。

考えないようにしていた。サクリファイスと賞品。でもつい考えちゃった。きっと僕の予想は当たっている。だってチョイス長官とタイラントの会話。そこから考えられるのは僕がサクリファイスという事。大会の賞品はサクリファイスだという事。

「……………」

ぼーっと見つめる先はコンクリートの地面。とても薄暗い。電気はなく、入る光は天井からの光のみ。その光も今は弱い。時間的に夜明けだろうか？

……それにしても何でこんな大会始めたんだろうか？ 主催者、つまりタイラントが楽しむ為だけだろうか？ 本当にそれだけなのだろうか？ 何かウラがありそうな気がするのは僕だけかな……？

第16話 彼女との出会い

【ステイラルシティ 闘技場】

ステイラル大会の予選は終わり、予選を勝ち抜いた16人の強者達が出揃った。この大会に参加した挑戦者は500人近い。その内の16人だ。果たして勝ち抜いた彼らはどれほどの力を持っているのだろうか？

本戦はトーナメント形式で行われる。試合は1日4試合行われ、最終日には決勝の1試合のみ行われる。

私は配布された本戦のトーナメント表を見る。私は5番。最初は6番の“タウ”という選手と戦う事になる。

>i29305—1537<

「……それでは只今よりNo. 1、“華麗なる斬り裂き人ツエータ選手”とNo. 2、“破壊の豪傑カイ選手”の試合を開始します！」

女性アナウンサーの声が会場に響く。観客席からは歓声が上がる。私はその観客席の1つに座っていた。

勝った方はこれから戦う相手になるかもしれない。第3回戦で。

もつとも私が1、2回戦を勝ち、彼らのどちらかが2回戦を勝てればの話だが。

一方、ステージでは2人の男がいた。

片方のツエータは蒼い髪で長身、身長2メートルはあるだろうか？ その両手には長い剣。

そんな彼の相手となるのがカイ。彼は横にも縦にもデカイ。といっても縦はツエータとそう変りないが。筋肉質な体はそうとう鍛え上げられている。

「クハハ、握ったら折れちまいそんな体だな！ 骨折れる前に降参してどうだ？」

「アナタこそそのムダな筋肉でどこまで戦えるのか、見ものですね……」

「バトル、スタート！」

女性アナウンサーの高い声。それが会場に響き渡った途端、試合は始まった。その瞬間、カイはツェータに近づく。そして鍛え上げたであろう右こぶしを繰り出し……

「クハハハ！ 死ねノッポ！ “死の鉄拳”！」

打ち碎いた。ステージに砂煙が舞い上がる。白いコンクリートの地面には大きくヒビが入る。あんな力で殴られたらただじゃ済まない。骨を折るどころでは済まないだろう。

「おーっと、ツェータ選手、早くも不能か！？」

舞う砂煙の中で立つ男はカイただ1人。その右こぶしを天に上げ、勝利を確信した晴れ晴れとした顔。会場からは歓声が上がる。

力自慢、か。筋肉だけの男のようだがあそこまで強大な力を持っていたら相当強い。一発の破壊力が半端じゃない。

私は第3回戦で（私と彼が勝ったらの話だが）あの男と戦うのか。

「あの男、勝ったね……」

「ん？」

突然、横から話かけられる。私に話かけてきたのはセミロングの大人しそうな女性だった。髪の色は白銀の美しい色をしていた。

彼女は鋭い目で私を見る。この女性、只者じゃない。

「ツェータ、カイは共にこのコスーム大陸出身の男性。ツェータは普段、フリーの傭兵。パトラー、アナタと同じ傭兵よ」

「……………！」

な、何でコイツ私の名前を知っているんだ！

「一方、カイは政府関係者。政府精鋭軍の少将。アナタが以前、勤めていた国際政府の軍人ね」

バカな！ 何でコイツは私が国際政府に勤めていた事を知っているんだ！？ どこでそんな情報を得たんだ！

「私はNo. 4のイプシロン。宜しく。それと試合が終わったようだわ……………」

「え？」

私はステージを見る。そこには剣を片手に持ったツェータが立っていた。隣には気絶したカイ。……………どうなっているんだ！？ 何でカイがやられているんだ？

「No. 2カイ選手戦闘不能です！ No. 1のツェータ選手の勝利です！ みなさん、拍手を……！」

会場は熱気に包まれ、歓声が上がる。割れるような拍手喝采が起こり、ツェータは手を振る。一方、意識を取り戻したカイは係員の指示に従いステージを後にする。悔しさで暴れず素直にステージを後にするのはさすが政府軍人だ、と言っておこうか。

「何でカイが負けたのか分かってないね」

「当たり前だ！ さっきまでは勝っていただろ！ カイが！」
「そう、さっきまでは、ね」

そう言うとな彼女は表情一つ変えずに立ち上がる。

「ど、どこ行くんだ！ さっきの試合はどうなったんだ！」

「……あの拳を避けたツェータ選手は素早くカイ選手の後ろに回った。砂煙で彼の姿は見えにくかったケドね。自分の力を信じていた彼は勝ったと思い込んだ。そこに生まれたのは油断。その油断が彼の敗因よ。後ろに回ったツェータ選手は素早くカイ選手を斬った」
「で、一撃でダウンか！？」

「ええ、そうよ。きつと剣には毒が塗ってあったんでしょ。彼の友人に薬剤師もいるし、死なない程度の毒を手に入れるのはワケないわ」

そう言うとな彼女は去ってしまった。

あの女、何故“ツェータの友人に薬剤師がいる”という事を知っているんだ？ どこでそんな情報を得たんだ……？

あの女はNo.4のイプシロンって言った。という事は第3回戦で戦うことになるかも知れない。私が勝ち抜ければ、の話だが。

会場を包むのは熱気と歓声。でも私にはそれが全く別の世界の出来事に見えた。

>i29391—1537<

第17話 毒のパーフエクター

「さア！ 次はN.O. 3 “鋼の烈爪ミュー選手”とN.O. 4 “暗黒の情報士イプシロン選手”のバトルです！」

第1回戦第2試合……あのイプシロンが戦うのか。ステージには既にミューとイプシロンが立っていた。

ミューは男性。いたって普通の男性だがその両腕には銀色に光る長く鋭い爪。あんな武器は見た事がない。自作の武器だろうか。

一方、イプシロンは何も持っていない。恰好は長袖の服にスカート。黒のブーツ。腰にあるのは剣。あれで戦うのか？

「それではバトル、スタアアト！」

湧き上がる歓声。バトルが始まった。彼女はどうかやって戦うんだ？

「なあ、俺に勝てるのか？ そのキレイな顔に切り傷残したくなかったら……」

「アナタは負ける。この私に」

なッ……！ 何なんだコイツは！ いきなり勝利宣言！？

会場は突然の勝利宣言に静まり返っている。

「な、なんとイプシロン選手、勝利宣言です！ それほどにまで自信があるのでしょうか！？」

「N.O. 3、ミュー選手。アナタはコスーム大陸ポートシティ出身。年齢は26歳。使用武器はその立派な鋼の爪。その武器は自作。戦争で家を失い各地で魔物を狩りながら生活している。この大会に参加したのはおカネの為、生活費が欲しいのね」

「……………!!!?!」

凶星だったのかミューはぎょつとした表情でイプシロンを見る。
その長い爪は僅かに震えていた。

「さ、さすが“暗黒の情報士”だ。でもだからって勝てはしないぜ……
頭がいいだけじゃ勝てないぜ!」

そう言うのと銀色に光る長い爪を振り上げてイプシロンに近づく。
しかし彼女は何の動きも見せない。彼女は頭がいいだけ? いや違う。
頭がいいだけなら予選落ちだ!

「ミュー選手、言ったハズよ。負ける、と」

イプシロンは鋭い視線をミューに突きつける。その瞬間、ミューの動きが止まる。いや、止まっただけではなく素早く後ろに下がる。なぜだ? あのまま切り裂けば勝利は決まっていただろうに。なぜ後方に下がったんだ?

「危ねえ! このニオイは“毒”のニオイだ」

「……よく気づいたね」

毒のニオイ? 何も見えないが。無色透明の毒なのか? それが発生しているのか?

「私の周囲には猛毒の気体が充満している。アナタと話している時に発生させたのよ」

「クソッ! あの長いセリフはそういう事だったのか!」

そんなバカな! いつの間に毒を放ったんだ!? アイツは何も

してなかったのに！ 魔法発生装置を使うにしてもボタンを押したりしなければ使えないハズだ。どうやって放ったんだ。どうやって……！

「アナタの攻撃は近距離。私の周囲には猛毒。これでアナタは私に絶対に勝てない。分かる？」

「クッ、お前は何者なんだ！」

「……私は」

イプシロンは僅かに間を開ける。その目はもはやミューを見ていなかった。見ていたのは大勢の市民が座り試合を観戦する観客席の方だった。

そして彼女は口を開いた。

「毒のパーフエクター」よ」

………？ 一瞬言っている言葉の意味が理解できなかった。毒のパーフエクター？ その意味が理解できると共に背筋に強烈な寒さを感じた。

パーフエクター。特殊能力を生まれつき持つ者。サレファトもそれに当たる。彼の場合は電気のパーフエクターだったが。

彼女は毒のパーフエクターだったのか。だから何もせずに毒を生させたのか！

「残念ね。もうすぐ毒はステージ全体を覆うわ。私の体から湧く毒が、ね」

「クッ！ この化け物がア！」

ミューは再び爪を振り上げ、イプシロンに向かって走り出す。一か八か一撃でケリをつける気なのだろう。相手を気絶させれば勝ち。

それを狙って。だがそれはムダだ。きつと出来ない。

「ムダよ」

その言葉と共に彼は倒れる。まだ気絶はしてないが。その体を引きずって必死にイプシロンに近づこうとする。

「あ、ウ。この……」

「強烈な痺れを引き起こす毒よ。安心して、死なないから」

イプシロンはミューの近くに立つ。彼は既に長い爪を上げるだけで精いっぱいだった。

「第1回戦第2試合は私の勝利、ね」

そうイプシロンが言った瞬間、彼は気を失った。自慢の長い爪。その先端がイプシロンのブーツの先に当たった。

>i29417—1537<

第18話 紫の玉

【ステイラル闘技場 控室】

夜になり本日の最後の試合がもうすぐ始まる。その試合に出場するのは私と6番のタウという選手。予選を突破したのだから恐らく彼も強者である事には変わりないだろう。

魔法発生装置のエネルギーを確認し、サブマシンガンとハンドガン、アサルトソード、ハンドボムを装備。最後にスポーツドリンクを一気に飲む。

私は勝つ。絶対に負けない！ ここで負けているようじゃ“X成体”は倒せない。……北の森に潜むあの“触手型生物兵器”は倒せない。

「次はアナタの番ね」

「……イプシロンか。何の用だ？」

「No. 6のタウ選手はコスーム大陸グリードシティ出身。両親は政府元老院議員、ね。……これ、上げるわ」

そう言うといプシロンは紫色の玉を差し出す。ハントボムか？

「な、なんだこれは？」

「知りたかったら使ってみるといいわ」

「こんな物、使わなくなつて……」

そこまで言った時だった。イプシロンが私を押し倒したのは……！

「なッ！ おい、お前……！ ………………！」

抵抗しようとしたが上手く体が動かない。全身がマヒしたかのような感じでまともに動けない。イプシロンの毒か？ まさかこんな所でも……！

一方彼女は私に覆い被さり、口を近づける。そして舌を私の口内に侵入させ、私の舌を舐める。コイツ、女同士で何をするんだ！

「んグッ！ んんッ！」

なんとか抵抗しようとするが僅かにしか体が動かせない。手で彼女を押しつけようとするが、痺れた体では不可能な事だった。

その間にもイプシロンは私の口内で舌を動かし至る所を舐め回してくる。

「ッグウッ……」

私に出来る事といえbaumき声を上げる事ぐらいだった。口内で舐め回され、好きなように弄ばれる。

脚を絡まされ、口内では彼女の舌が蠢く……

＊

「フッフ、頑張って…… 私はアナタの勝利を願ってるわ。だって、そっちの方が面白いもの」

クッ！ 何なんだ！ この変態女は！

私は彼女を睨みつけながら控室から出ていく。扉を閉める音は自分でもビックリするほど大きかった。

それにしてもあの女は何がしたいんだ？ ただ単に毒のパーフェクターなだけなのか？ 変な女に目をつけられたもんだ。性欲丸出し少年の次はレズ女か！ 全く、私の性の運は壊れているのだろう

か？

【闘技場 バトルフィールド】

私は白いバトルフィールドの上に立つ。相手は男の選手。黒髪に体に密着した黒い戦闘スーツのような物を着用している。アレは政府特殊軍P A R U Mの疾風部隊が着ている物だ。

「さア！ 本日最後の試合となりました！ まずはN O . 5 “心優しき傭兵パトラー” ！ そんな彼女の対戦相手はN O . 6 “名家の疾風タウ” 選手！」

月の明かりの下、ステイラル闘技場からは大きな歓声が上がる。

夜にも関わらず多くの人々が集まっていたのだ。

あの客席にはイプシロンもいるのだろうか？ 彼女は私をどんな目で見ているのだろうか？ きっと彼女はあの無表情な顔で見ているだろう。その心は何を思っているんだ……？

「それではア~~~~……バトルバトルスタートオ！！」

女性アナウンサーの大きく高い声が響く。私は負けない。今回も次も。彼女もきつと勝つだろう。私は絶対に勝って第3回戦である女を倒す！ 私に目をつけた事を後悔させてやる！

「さて、心優しき傭兵、でしたっけ？ 僕は元老院議員を両親に持つタウ。どうぞ宜しく…… アナタの武器を使わせて頂きますよ」
「……………！」

何を言っている！？ 私の武器を使う？ 確かコイツは名家の疾風タウ。……疾風？

そう思っていると、彼は素早い動きで私に近づいてきた。その手には何も持っていない。ただ突っ込んでくる。何のつもりだ？

私はアサルトソードを取り出す。近距離戦ならハンドガンやサブマシンガンといった銃火器より剣の方が使えるのだ。

「来いッ！」

私は剣を構える。あの速度なら見えないことはない。斬れる。剣の刃に電流を流す。このアサルトソードは刃に魔法で電気・炎・氷・水の属性をつける事が出来た。人間相手なら電気がいいだろう。

残り10、9、8……。……！！ 後5メートルというところでタウの走る速度は格段に上がった。今までの速度とは比べものにならない。

「フフフッ！ ハハッ！」

「クッ！」

剣を振り下げた時には彼は私を突き飛ばしていた。私は後ろに吹っ飛ばされ、倒れ込む。剣は落とさなかった。が、しかし、彼は素早い動きで私の手からアサルトソードを、持ってきていたサブマシンガンを奪う。

私の武器を使う、そういう意味だったのか！ でもそう簡単に思惑通りにさせてたまるか！

私は彼の脚を掴む。彼は全く予期せぬ事をされたのか思いつきり正面から倒れる。彼の脚から手を離し、奪われた武器を奪い返そうとする。だが鼻から血を流す彼はサブマシンガンを遠くに投げた。サブマシンガンはバトルフィールドと客席の間、緑色の芝生の上に落ちる。ここに選手が立ったら脱落になる。

「クッ！ 余計な事を！」

「奪い返されてはたまりませんからねえ！」

そう言うのとタウはアサルトソードをも投げ捨ててしまう。それだけでなくハンドボムをも素早い動きで奪い取り投げ捨てる。彼はよっぽど肩がいいのか投げる物は全て規定範囲外にまで飛ばしてしまう。これが予選を勝ち抜いた者の力なのか！

私はひとまず彼から離れようとする。こんな調子じゃハンドガンや魔法発生装置をも……？ アレ？

「ハア、ハア…… 探し物はこれですか？」

「なッ……！ それは私の魔法発生装置じゃないか！」

疲れて息を荒げるタウの右手にはスタンロッド型の魔法発生装置が握られていた。それは紛れもなく私のだった。彼はそれを大きく振りかぶって投げる。飛ばされた先は……見るまでもない。

私に残されたのはハンドガンのみだった。これを奪われたらもう戦えない。いや素手で戦うハメになる。

「ハ、ハハ…… そのハンドガンは使わせて頂きますよ！」

タウが走り始める。その速度は最初から全速力だった。目にも止まらぬ速度、という程ではないがかなり早い。

私は発砲する。乾いた音が鳴る。ハンドガンの弾は実弾ではなくプラスチック弾で殺傷能力はかなり抑えてある。当たればただじやすまないが。

乾いた音。でもタウに当たらない。彼の動きが早すぎて当たらない。連射できるサブマシンガンだったら当たったかも知れないが。

「クッ……！ 狙って撃つハンドガンは嫌いなんだ！」

「そうですか。じゃ僕が使いますよォ！」

「……………！」

その声が聞こえた時、1つの影が走り去った。言うまでもなくその影の正体はタウだった。私の手からハンドガンを奪い取られた。

「アナタの武器は頂きましたよ。ハンドガンと……」

彼は左手に球体を持っていた。アレは確かイプシロンから貰った（貰わされた？）紫色のハンドボム。

「毒玉、かな？ 予選突破ご苦労だったねえ…… でも君はここでバイバイですね。心優しき傭兵さんは小さな魔物でも狩って旅して下さいよォ」

「クッウッ……」

私は負ける…… やっぱ私は1人で戦うなんて出来なかった。フィルドさんや仲間がいないと何も出来ない。1人だといつも負けてしまう。4年前も今も何も変わっていなかった。

「ほらよッと！ アナタの持ってきた毒玉ですよ！」

タウが毒玉（タウ曰く、だが）を投げる。それは空気を切り、真っ直ぐと私の足元に飛んでくる。負けは決まった。

紫色の玉が足元に着弾し、爆発する。私の体は爆風で僅かに飛ばされる。爆風と共に大量の紫色の煙が広がる。私の体はすぐに包まれた。

「……………？ な、なんだ？ この煙吸っても何も起きないぞ？」

私はこの紫色の煙の中でも普通に動ける。煙を吸ってもなんともない。

「グええッ！ この煙、俺のどこまで……！ グッ！ がッハッ……！」

「……タウ？」

なんでだ？ いやこの煙はどこまで広がっているんだ？ 何で私は大丈夫でタウには効いているんだ？

「バトルフィールド全域を覆う煙です！ タウ選手、パトラー選手はどうなっているのでしょうか！？」

会場に響くアナウンス。この煙はバトルフィールド全域を覆っているのか？

徐々に煙が晴れていく。紫色の煙は薄くなっていき私の目には倒れたタウが……

「タウ選手戦闘不能！ パトラー選手の勝利です！」

なぜだ？ なぜ私に毒は効かなかった？ なぜタウには効いて私には効かなかったんだ？

そんな疑問が私の頭を駆け巡っていた。

月明かりに照らされたステイラル闘技場。波乱の大会1日目は幕を閉じた。

第19話 パーフェクター

【ステイラル闘技場 控え室】

私が控え室に戻ってくるとイプシロンがいた。待っていたのか？

「……勝利おめでとう」

「……………」

彼女の言葉をムシし、私は去ろうとする。でも彼女は私の左腕を掴む。

「……なんだ？ まだ用があるのか？」

「なぜあの煙の毒が効かなかったか知りたいと思わない？」

「……………」

私は黙って彼女を見つめる。その目は真っ直ぐと静かに私を見ていた。実際は私の答えは「Yes」だし、気になる。が、そのまま「はい」とは言いたくない。

「……アナタが試合に出る前にして上げたコト、それでアナタは耐性を得た」

「何の話だ」

「私の唾液に“あの毒”に耐えられるようになる成分を含ませたのよ」
「毒のパーフェクターがなぜそんな事出来る？」

そこまで言うとな彼女は私の腕から手を放す。

「私は“完成したパーフェクター”よ」

は？ 完成したパーフェクター？ 何を言っているんだ？ 完成って、じゃ完成してないヤツもいるのか？

「どういう事だ？」

「それはアナタの泊まっているホテルで教えて上げるわ」

そう言うとな彼女は先に控え室から出て行く。アイツ、私がどこに泊まっているのか知っているのか？ だとしたらなぜ？ どこでそんな情報を得るんだ？

私は武器や弾薬をバッグに詰めるとあわてて彼女の後を追った。その時、時計は12時を指し、既に日付が変わっていた。外出禁止時刻は午前2時から。ホテルには30分もあれば辿りつけるから大丈夫だな。

【ステイラルシティ ホテル】

ホテルに戻り、私とイプシロンは夕食を食べる。ホテルの大型食堂ではなく私の部屋で。私が食べているのはミートスパゲティ。フオークでくるくると巻きながら口に運んでいく。イプシロンはカレー。食べる物は普通だな。

「で、そろそろ完成したパーフェクターについて教えてくれないか？」

「……いいわよ」

空になった皿にスプーンを置き、まだ温かいコーヒーを飲んだ後、彼女は話し始めた。



パーフェクターについてはもう知っていると思う。生まれつき魔法が使える者。魔法発生装置なしで魔法が使える者を指す。

彼らは基本1つから2つの魔法を使える。風を操る者、電気を操る者、炎を操る者、水を操る者、彼らは特殊型パーフェクターと呼ばれているわ。

特殊型とは別に体を土や鉄、紙、布といった材質に変化させ形状を自由自在に変化させる者、彼らは物理型パーフェクター。

「そんな事はもう知っている。私が聞きたいのは“完成したパーフェクター”について、だ」

分かっているわ。少し黙ってくれるかしら？

1000万人に数名というパーフェクター。彼らはそのままでも、鍛えなくてもとても強い。何しろほぼ制限なしに魔法を使えるからね。

でも鍛える事によって更に強力な魔法を使える事になる。意識的に強力な魔法を使い続ける事が鍛える事になるわ。

「お前は使い続けたのか？ 強力な毒の魔法を」

そう、私は小さい頃から使い続けた。最強のパーフェクターになる為に。

そして完成した。私は体その物が毒になった。特殊型にも関わらず物理型としての能力を得た。



そこまで言うといプシロンは再びコーヒーを飲む。

「なぜそうなった？　なぜそこまで能力を上げた？」
「……………」

無言のままコーヒーを置く。私を見るその目は今までよりも鋭かった。

「バカ共を苦しめる為」

「は？」

「そのままの意味だけど？」

その時、私の背筋にゾクリとしたものが走る。コイツ、普通じゃない。表面には出さなかったが狂っている！

「バカ共って誰なんだ？　そいつらはどうしたんだ？」

私は内心恐怖を覚えながら彼女に聞いた。私はイケナイ領域に踏み込んでいたのではないか？　答えを聞いたら取り返しのつかない事になるかも知れない。でも聞かずにはいられなかった。

「バカは姉と弟。2人は……………」

まさか……………！

「殺した」

「……………！！　姉と弟を殺したのか！？」

「バカ共は私に苦痛を与えた。さんざん苛めた。私が何も言わないのいい事に」

「そんな、だからって…………　家族だったら話し合えば」

「家族も他人よ、所詮！　人の事なんて考えていないんだわ！」

イプシロンは机を強く叩き立ち上がる。その表情は怒りに満ちていた。鋭い目が、突き刺さるような目で私を睨む。私も立ち上がる。なんて事を聞いてしまったんだ。余計な事を聞くんじゃない……！ でも、もう後に引き返せない。

「パトラー、アナタには全て教えて上げるわ」

「え、え？」

「私がこの大会に参加した理由は“サクリファイス”を惨殺する為」

サクリファイスを惨殺？ 何を言っている？

「サクリファイスは人よ。人間が賞品なの」

「何だと！」

人間を賞品にするなんて……！ 人をなんだと思ってる！ それにこの女は手に入れた人間を惨殺するのか！

「サクリファイスはアナタのよく知る人物よ」

「は！？」

私のよく知る人物？ 誰だ？ まさか、フィルドさんか！？

「今はなき“財閥連合”の幹部……」

「サレファト！？」

静まり返る部屋。イプシロンはしばらく私を見つめる。が、再び口を開いた。

「そう、賞品は捕まったサレファトよ。それにしてもその名が出て

くるのが早かったね」

「……………！」

「もしかして気になっていた？ 考えていたのね、彼のこと」

私がサレファトの考えていた？ 何のために？ いやそんなハズはない。考える必要などないからだ。

じゃア何ですぐに彼の事が浮かんだんだ？ ただ財閥連合幹部、と言われただけで。まさか私が彼の事を気にしているのか？ 頭のどこかで。

「サクリファイスについては教えたわ。あとは勝手にどうぞ」

勝手にどうぞ？ このまま大会に参加し続けるか、棄権するか、という事か。あんなヤツとは二度と会いたくない。こんな大会今すぐ……

そこまで考えて私は動きを止める。もし私が棄権し、イプシロンが優勝したらサレファトは殺される？ 惨殺される？

「オイ、サレファトをどうするつもりだ？」

私は靴を脱いで勝手にベッドに寝転がってるイプシロンに声をかける。……ここで寝るのか？

「さっきも言ったでしょ。毒の能力でじわじわと殺す。さんざん苦しめて、ね」

僅かに微笑みながら言ったイプシロンの残酷な黒い瞳が私に底知れぬ恐怖を感じさせた。

第20話 悪夢

ステイラル大会、優勝者イプシロン――……

「アナタの気になっていた少年は頂くわ」

「クッ！ イプシロン！ お前、サレファトを！」

僅かに離れた所にイプシロンと灰色の柱に縛られたサレファト。

彼は状況が呑み込めてないのか動揺した表情を浮かべていた。

逃げろサレファト！ 逃げてくれ！ その女はお前を殺すつもりだ。自分の楽しみで！

「アナタを凌辱した少年は私の手で逝かせて上げる」

「……………！ やめろォ！」

しかし体が動かない。彼女を何としても止めてサレファトを助きたいのに体が動かない。まるで自分の体が誰かに乗っ取られたかのような感じ……

「な、何をする気、ですか？」

「アナタは私の奴隷。私のおもちゃよ」

そう言うといプシロンは自らの手を紫色のゼリーのような物に変化させる。それを勢いよくサレファトの顔に押し付ける。

まさか、あの手、毒なんじゃないのか！？

「……………！」

しばらくの間、サレファトの顔に押しつけていたがやがてその手

を離す。彼は咳き込みながら荒い息をする。

その姿を見たイプシロンはニヤリと不気味な表情を浮かべ、彼の側から離れる。

「彼に与えた毒は死の毒。まもなく彼は死ぬ」

「ふざけるなッ！」

私は走り出す。一目散に彼の元に。イプシロンは何もせずにただじっと私を見ていた。

「うッグウッ！ 苦し、い。パト、ラ……」

「サレファト！？」

「い、きがッ……」

サレファトが死ぬ。私を犯し、黒い過去を与えた彼が。以前はそれを望んだ。強く望んだ。何度も願った。でも本当にそれでいいのか？

私はイプシロンに素早く飛びかかり、彼女の首を絞める。

「今すぐ解毒しろ！」

「グウッ…… も、もう手遅れ、よ」

震える手で指差す方向にはサレファト。彼はしばらく苦しんでいたが突然、血を吐き出す。それも大量の。そして彼は動かなくなつた。

「死、んだ、わ……」

「クッ！ イプシロンッ！！」

彼女を絞める手に力が入り、爪を立て、彼女の首を絞めた。爪を

立てられて絞められるその首からは血が飛んだ――……！

＊

「ハア、ハア、ハア……」

私はベッドの上で目を覚ます。全身から汗を流しながら。

イプシロンがステイラル大会で優勝し、サレファトを殺す。その後、私がイプシロンを絞め殺す、そんな夢だった。

そのイプシロンは今、私の隣で寝ている。外出禁止時刻で自分のホテルに帰れなくなったから泊めてくれといわれ、泊めてやったのだ。

「……悪い夢でも見た？」

「イプシロン？ 起きていたのか？」

「自分が殺される夢？ それとも私が大会で優勝し、サレファトを殺す夢？」

「……………！」

「まあいいわ。サレファトを死なせたくなかったらこの大会で優勝する事だね」

サレファトを死なせたくなかったら優勝しろ？ なぜ私が危険を冒してまで彼を助けないといけない？ 彼は4年前私を犯したんだぞ？ 例えそれが財閥連合長官の命令だとしても、だ。それに彼に恩など全くない。

「棄権は勝手にどうぞ。私は止めないわ。でも……」

「でも？」

「アナタが彼をこの都市に連れてきた。それにも関わらずアナタは彼を突き放した。この都市の外出禁止時刻という条例を教えずに」

「……………！」

「そして彼は捕まった。ステイラル治安隊によって。アナタが突き離し、教えなかったばかり、に」

だから何だよ。私の責任とでも言いたいのか？ ふと窓を見ると夜が明け始め、東の空が明るくなり始めていた。

第20話 悪夢（後書き）

【イプシロン】 18歳／女

毒のパーフェクター。その実力は相当高く。本人曰く「完成したパーフェクター」

過去に姉と弟から苛めを受け、その性格は酷く歪んでいる。そしてその苛めを行っていた姉と弟は彼女によって殺された。

あらゆる事に詳しく“闇の情報士”という異名を持つ。大会に参加した理由は賞品であるサレファトを殺す為。

第21話 2人目の……

【ステイラルシティ 闘技場】

会場に巻き上がる歓声。雲ひとつない青空、そこから眩しい太陽の光が会場に照りつける。白いバトルフィールド。そこには2人の選手。ファイという女性とシグマという男性だ。

私は大会を続けることにした。決してサレファトの為じゃない。3回戦でイプシロンを倒す為だ。彼女を倒した後は棄権する。それが最上だろう。私にとっても彼女にとっても。

「それでは、大会2日目！ 最初のバトルは“絶対服従ファイ選手”と“打ち碎きのシグマ選手”です！」

ファイはメガネをし、ピンクの髪をした女性。年齢は20前後か？ 武器らしい武器は何も持っておらず、服装も至って普通。

一方、シグマは黄色いハンマーを片手に緑色の装甲服を着た男で、その頭部も装甲で覆われていた。

「それでは、バトルスタート！」

女性アナウンサーの元気な声が会場内に響き渡る。第1回戦第4試合開始だ。

私は横に座るイプシロンを見る。彼女は興味なさそうな目で見ていた。私の視線に気づいたのか彼女は顔をこっちに向け、一言言った。

「何分で負けるかしら？」

「は？」

な、何分で負ける？ どっちが、だ？

私はバトルフィールドの方を見る。まだファイもシグマも動いていなかった。

「オイ、女。叩き潰されたくなければ今すぐに……」

“マインド・コントロール”

「……………!？」

ファイがそう呟いた途端、赤い多角形の輪が幾つも現れ、シグマはそれに取り込まれる。なんだアレは？

「ミッション1＊シグマ リタイアする」

何を言ってる？ ミッションってなんだ？ それにリタイアするってするワケないだろ！ こんなところでリタイアするなら予選なんて受けないはずだ。

だが次の瞬間、考えもしない事が起こった。

「ふあい様、みっしょんニ従イマス……」

はッ!!？ なぜだ!？

彼はゆっくりと歩いて行く。向かう先はバトルフィールドと客席の間にある緑色の芝の部分。あそこに落ちれば……失格になる！

「ファイ選手は“精神のパーフエクター”よ」

「何ッ!？ パーフエクターだと!？」

私はイプシロンの顔も見ずに言う。目線は常にシグマとファイの方向だった。

シグマは時折うめき声を上げながら歩く。抵抗しているのか？
ファイのマインド・コントロールに。

でも彼はバトルフィールドの端に着いてしまう。そして、彼は僅かに躊躇ったが緑の行動範囲外に出てしまった。

この行動に会場はあ然とする。時間が止まったかのように静まり返る。しばらく誰一人として声を発さなかったがアナウンサーがはっと我に返り慌ててアナウンスをする。

「え、えっと、シグマ選手行動範囲外のエリアに出た為、失格とします！」

「ミッション1＊成功　アハハ、2はないよ。もう解放して上げる☆♪」

ファイはそう言うのと右手を高く上げた。その途端、シグマを取り囲んでいた赤い多角形の輪は消滅する。その途端、彼はその場でよろける。

「ク、クソッ！　どうなってんだ!？」

彼は悔しそうにファイを睨みつける。彼女は精神のパーフェクターで人を操る“マインド・コントロール”という技を使う。そして私の2回戦の相手。

まさか、この大会に極稀にしか存在しないパーフェクターが2人もいたなんて……

額から汗が流れる。拳を握る手が僅かに震える。2回戦は精神のパーフェクター・ファイ。彼女に勝った後、3回戦では毒のパーフェクター・イプシロン。パーフェクターと連戦になるなんて全く考えていなかった。

雲が太陽を隠し、風が吹き始める。もう冬だからか、その風はと

でも冷たかった。

3回戦でイプシロンを倒し、棄権するという私の計画は大きく狂い始めていた。私は第3回戦に、イプシロンにたどり着けるのか……？

> i 2 9 6 6 5 — 1 5 3 7 <

第22話 作戦と読み

午後、第1回戦5試合が始まる。昼食を食べた私は観客席に座り試合を観戦する。その隣にはイプシロン。……なんていつも隣にいるんだ？

「さア！ 波乱のステイラル大会第1回戦第5試合は“政府軍中将グザイ選手”と“血紅組のリーダーガンマ選手”の戦いです！」

今度は2人とも男性。片方は政府軍人、もう片方は血紅組のリーダー、か。政府中将のグザイの方が強そうだが……

グザイは防弾・身体能力増強のコートを羽織っている。その手にはスタンロッド。恐らくアレは魔法発生装置であろう。腰にはアサルソード。

ガンマは金髪の頭に黒くゴツゴツした服。金属製のバット何だアレは？ 街のヤンキーか？ 血紅組っているぐらいだから暴走族か？

「政府軍人ン！ ここで会ったが百年目！ 俺らの爆走、邪魔はさせねエゼ！」

「いつもどおり全力で挑む。市民の皆様の為にも私は勝つのだ」
「バトル、スタートオ！」

始まったか。政府VS暴走族の戦闘が、いや代理戦闘か？ どうでもいいがこれは少し面白そうだな。……イプシロンは興味なさそうな表情で見ている。

「ヒヤアッハッハッハ！ 喰らいやがれ！ “サンダー”！」
「ムッ！？」

ガンマはバットを振る。その瞬間、1本の黄色に輝く雷がグザイを貫く。あのバット、魔法発生装置が仕込まれているな。まさか、市民が魔法発生装置を持っているなんて……

グザイはその場に倒れかけるも踏みとどまる。さすが政府中将。そのまま回復もせずにガンマに向かって走る。その手にはアサルトソード。電気を帯びたアサルトソード！

「……斬る！」

「……………！」

素早く接近し、両手で持ったアサルトソードで斜めに斬ろうとする。会場に木霊す高い金属の音。金属同士がぶつかり合った音。火花が宙に舞う。

グザイのアサルトソードとガンマの金属バットが接触していた。その2つはブルブルと震える。互いに一步も引いていない。

「やるじゃねえかよ……」

「お前の方こそ、たかが族でここまでやるとは思わなかった」

しばらくアサルトソードと金属バットが触れ合っていたがグザイは素早く後方に飛ぶ。その瞬間を見逃さなかった。見逃さなかったのは言うまでもなくガンマ。彼はバットを振った。

「“3連ファイア”！」

3つのファイア弾が飛び、それぞれ見事なカーブを描きグザイの腹部に胸に直撃する。着弾し、爆発。勝負あり、か？

「どうだ！ 思い知ったか！」

「“スパイラル・エア”！」

「なにイツ!?」

強烈な風が吹き、勝利を確信したガンマの体を浮かび上がらせる。グザイはまだ倒れていなかった。彼は不意を衝いて強力な風魔法を繰り出した。スパイラル・エア―は小型の竜巻のようなものだ。私の髪が強い風に煽られる。

「ぐッアッ……!」

「隙あり! “ブリザード”!」

間髪を入れず、グザイの魔法発生装置から蒼色、いやほぼ白色の弾を放つ。氷属性の魔法、ブリザードだ!

「クッ、やられてたまるかよ! “増重力”!」

ブリザードがやって来る直前、ガンマは自分に魔法をかける。紫色の光。それを受けた途端彼は一瞬にして地面に着地する。アレは自分にかかる重力を増加させる魔法。そうか、ブリザードを避ける為に……

「やるな。だが私は負けないぞ! “10連ギガレベル・ウォータ―”!」

魔法発生装置の先端から飛ぶのは巨大な水の塊。それがガンマを襲う。着弾したと同時に破裂音。それと共に大量の水がバトルフィールドに流れ出す。ガンマは増重力のお陰で何とか流されずに済んでいるが……

さっきの水の塊が割れ、バトルフィールドを水浸しにしている間に別の水の塊が出来る。確か、10連だからさっきの塊があと9つも降り注ぐのか……!

「なるほど、ね」

「え？ イプシロン？」

「グザイ選手の狙いは分かったわ」

「な、何ッ!？」

狙いつてなんだ？ あのギガレベル・ウォーターでガンマを倒すんじゃないのか？

「ガンマ選手は増重力で流れない。つまりバトルフィールド外に出て失格にはならない。それに彼は強力なシールドを張っている。見えないけど、ね」

「シールドだど!？」

「そう。そしてグザイ選手はそれに気づいている。にも関わらずあの水攻撃。狙いはただ1つよ」

「なんなんだ？ それは……?」

「強力な電気技でし止めるつもりよ。バトルフィールドを水浸しにして、ね」

そういう事か！ グザイの真の狙いはそこにあったのか！ でもそんなに上手くいくのか？

既にグザイの攻撃は終わり、バトルフィールドは水浸しになっていた。ガンマは自分にかかっていた増重力魔法を解く。シールドは既に消えていた。

「ヒヤハハ…… 残念だったな、政府中将グザイ。もう魔法発生装置のエネルギーも少ないんじゃないのか？」

「……………!」

「まあ俺も人の事言えねえけどな」

お互い消耗し尽した魔法発生装置のエネルギー。でもグザイには最後の技がある。さっきの水攻撃はその為の下準備。

……次の技で決まるかも知れない。魔法発生装置のエネルギーが切れかけているならもうバトルの決着がつくのはそう遠い事じゃない。

「これで終わらせよう」

グザイが魔法発生装置を振りかざす。電気魔法を飛ばす気、か。

「……ああ、そういう事か」

……え？

ガンマがそう呟いた。まさか、気づいたのか？ グザイの作戦に

……

「“ギガレベル・アイスフィールド”！」

「……………！」

ガンマは予想外の行動に出た。魔法発生装置を使い、バトルフィールド全体を凍らせたのだ。勿論、水も全て。これはグザイにとっても予想外だっただろう。

「お前のやろうとしてる事は分かったぜ」

「……………！」

「フィールド全域を水浸しにして俺を感電させるつもりだったんだろ？」

悔しそうな表情をするグザイ。ガンマは魔法発生装置の内蔵されたバットを投げ捨てる。エネルギーが0になったのだらうな。持つ

てるだけ邪魔、か。

バットを投げ捨てたガンマは剣を取り出す。長い長身の剣だった。刃が太陽の光を反射して光る。

「……だが魔法発生装置のエネルギーは0になったようだな」

「大した問題じゃねえよ」

グザイはアサルトソードを鞘から引き抜く。剣で戦うつもりか？ 剣同士の戦いか。魔法発生装置が勝敗を決めるかと思っていたが、そうでもないようだな。

私は漂ってくる冷気に体を震わせた。

第23話 忌まわしき黒い過去

グザイとガンマの2人が凍ったフィールドを走り出す。その手には剣。2人の剣が激しく触れ合い、火花が散り、金属特有の高くよく響く音が鳴る。

負けられない戦い、か。私にはよく分からないが2人はこの戦いでなんとしてでも勝ちたいのだろう。2人には何らかの目的があるようには見えない。ならば“プライド”か。

グザイは政府軍人としてのプライド。ガンマは血紅組のリーダーとしてのプライド。それが彼らを燃え上がらせる。

「つまんな過ぎ。クソすぎて」

「……イプシロン？」

「男ってムダにプライドが高く欲望渦卷いたつまらない生き物よね」

私はイプシロンの方を見る。彼女はつまらなさそうな目で試合を見ていた。が、どこかその目には何か、黒い負の感情が渦卷いているような感じもする。

これは彼女の過去に関係しているのか？ いや、しているな。間違いない。

「どっちが勝つかなんて知らないし、興味もないけど——」

「ないけど？」

「どっちかが死んだら面白いよね」

なんだと……！ 人の死が面白い、だと！

「お前は何か言いたい？」

「別に。試合でしょ？ 観客も楽しまない」と

く、狂っている……！ コイツは人が死ぬのを娯楽と考えてる！
なんてヤツだ！

私の額に汗が滲む。

「お前の過去は知らないが、人の死を楽しんで……」

「私の過去も知らないで口を出さないで！ どうせアナタにも私の苦しみは分からないのよ！」

「……………！」

イプシロンが声を荒げて言う。どす黒い感情が、闇の感情がこもっていた。

黒い過去。私にも4年前に陵辱されたという黒い過去がある。許せない事だけどその憎悪を他人に向け、人を殺し、快感を得ようとは思わなかった。

でも当事者は全員殺してやりたかった。私の心を引き裂いた者達を。けどあのオーロラ支部で起きた戦い、オーロラ支部の戦いでそのほとんどが死んだ。これで生き残った当事者はサレファトだけ。

「ねえ、あのお姉ちゃん、どうして怖そうな顔してるの？」

不意に隣から声が聞こえてくる。そこにいたのは13歳ぐらいの可愛い女の子だった。黒い髪にポニーテールをした子。その近くには彼女の兄と思われる男性。短く黒い髪。その筋肉質な肉体。普段から相当鍛えているな。アレは。

「さあな。俺には分からん」

男性はこっちを向くと会釈した。そして、女の子の手を引き、去

って行った。同じように周りの観客も立ち上がり、荷物を持って動き始める。一体何が始まったんだ？

「な、なんだ？」

「試合が終わったから、でしょ」

「え？ え、え？」

私はバトルフィールドを見る。もうすでにバトルフィールドには誰もいなかった。青白く凍った氷があるだけだった。

いつの間に試合が終わったんだ？　そしてどっちが勝ったんだ？

【ステイラルシティ　ホテル】

私とイプシロンはホテルに戻ってきた。（なんでイプシロンは私にくっついてくるんだ？）

彼女の話によると第1回戦第5試合はあの後、すぐに決着がついた。

まず、ガンマが氷で転倒。その隙についてグザイが魔法発生装置の残りエネルギー全てを使い、ガンマに大ダメージを与えた。そしてトドメに電気を帯びたアサルトソードで斬りつけた。これで勝敗が決まった。勝ったのは政府軍人のグザイだった。

いつの間にこんな情報を得たのかは知らないが、私は1つ思う事があった。彼女は私についてどこまで知っているんだ……？

「アナタについて私が知っている事？」

「そうだ。どれ程知っているんだ？」

イプシロンは外を眺めていた。太陽が赤く染まり、西の空はオレンジ色に。もう夕方。もうすぐ第1回戦第6試合が始まる。

「全部知ってる、と思っていた方がいいわね」

「全部だと？」

「4年前オーロラ支部でやられたコト、サレファトとの関係も全て」

「……………！ し、知ってるのか？」

4年前の私の忌まわしき黒い歴史まで知ってるのか？ この女は。無意識の内に拳を握りしめ、体が僅かに震える。

「4年前、当時17だったアナタは当時、世界最大の民間企業だった財閥連合社のオーロラ支部を調査していた。極秘に。でもアナタは捕まってしまった。捕まえた財閥連合社は他にも仲間がいるのではないかと思い、その仲間についての情報を聞き出そうとした」

ゾクリと体に恐怖の感情が走る。太陽は沈み、空はだんだん暗くなっていく。

「でもアナタに言う気はなかった。だから財閥連合社はアナタに苦痛を与えて吐かせる事にした。つまり拷問を施した。それも性的、な」

「……………」

「強制絶頂、寸止め、性行為…… 望まない快楽に甘い声を上げ、何度も絶頂の渦に叩き落とされた。でもアナタは耐え、ガマンした。その内、オーロラ支部の戦い。この戦いによりアナタは解放された。仲間のフィールドという女性によって」

「……………！」

涙が頬を伝う。誰にも知られたくない過去。それをこの女は当事者に匹敵するくらい知っている。なんで？ なんで知っている？ どこでその情報を得た？ 忌まわしい過去をなんで知っている！

「イプシロン！」

怒りと悔しさで心がぐちゃぐちゃにされた気分だった。激しい憎悪が湧き上がる。冷静にならないといけないのは分かっている。でも体が止まらなかった。外は暗くなり、空は黒くなり始める。

私はイプシロンの胸倉を掴み、彼女を壁に押し付けた！

第24話 バラされたくない過去

知られたくない過去。抹消してしまいたい過去。思い出したくない過去。それをこの女は知っている。それも詳しく。

「どうしたの？ 私を殺したい？」

イプシロンがいつも通りの顔で、無表情な顔で、感情のない顔で私にそう言ってくる。

……殺す？ ここで殺してしまうのか？ 私の黒い過去を知る人間を。過去を知ってるというだけで。なんで？ 知られただけで殺すのか？ なんで？ ……人にバラされたくないから、か？

「……なんで知る必要があった？」

「……………」

「なんでそこまで調べたんだ！ この大会に勝つだけの情報なら4年前は関係ないだろうッ！ なんで私の過去を……！ 誰にも知られたくないのにッ……！」

そこから先はもう言えなかった。涙が溢れ、イプシロンの胸倉を掴む力が抜ける。その場に座り込み、涙で濡れた顔を手で覆い隠す。知られたくない過去を知られた。絶対に知られたくない過去を知られてしまった。もう知ってるのはサレファトだけだと思ったのに……

「で、アナタはその黒い過去の“創造者”サレファトを救おうとこの大会に参加している。変な話よね」

「クッ」

「変だよ。自分自身変だと思わない？」

創造者サレファトを救うために？ 違う……！ 絶対に違う！

私はこの女を、イプシロンをこの大会で痛い目に合わせるために参加しているんだ！ 決してサレファトを救う為じゃない。

「まあいいわ。黒い過去なら私もあるから知られたくないっていう気持ちは分からなくもないケド、ね」

分かっているならなおさらだ。なんで私の過去を暴いたんだ！

私もお前の過去を暴いてやりたい。

……イプシロンの過去？ そういえば以前、コイツは姉と弟を殺したって言っていたな。

——バカ共を苦しめる為。バカは姉と弟。2人は殺した。バカ共は私に苦痛を与えた。さんざんイジメた。私が何も言わないの进行事に。

家族である2人を殺したくなるほどイジメられたのか？ それってよっぽどの事なんじゃないのか？

いや、待て。彼女は毒のパーフェクター。イジメなんて防げるだろう？ それとも姉と弟もパーフェクターだったのか？ でも極稀のパーフェクターが家庭内に3人は確率的に低すぎる。

じゃア、なぜ防げなかった？ なぜそうなる前に止められなかった？

「泣き止んだ？」

「……お前の姉と弟はパーフェクターだったのか？」

「いいえ、ただの人間よ。それがどうしたの？」

ただの人か。ますます分からない。なぜ止められなかったのか、が。もはやこれは本人にしか分からない事なのだろう。

「……私の過去について考えてるわね。知りたい？」

「別に。知っても何の得にもならんからな」

「そう？ 使い方によっては大きな効果を生むわよ？」

使い方？ 過去をどうやって使うんだ？ 過去からは戦闘データ

ぐらいしか分からないんじゃない？……

「パトラー、10秒以内に棄権しなさい。さもなければアナタの過去をバラす」

「は！！？」

「10、9」

な、何を言っているんだ！？ バラすだと！？

「8、7」

棄権しないとオーロラ支部の事をバラされるのか！？ 誰にも知られたくない過去を！

「6」

「……………！」

——感じていますか？

「全然！ 下手くそ！」

——アレ？ 顔が赤いですよ？ やっぱり感じているのですか？

「止めろッ！」

「5、4」

——……フフフ、これで何回目でしょうかね？

「クッ……！」

——ところで仲間は誰ですか？　そろそろ言ってもらえませんか？

「……い、言わない！　誰がお前なんかにッ！」

「3、2」

——最後に聞きますよ？　仲間は誰ですか？

「……言わない」

——何ですか？　仲間なんて所詮は他人でしょ？

「絶対に言わない！」

——フフフ、今から起こる事ぐらい予想できるのではないんですか？

「い、イヤ……」

「1……」

誰にも知られたくない。絶対に知られたくない！　バラされるなんて……！

「イプシロン……！」

私は彼女のあの無表情な顔を思いっきり殴りつけた！　彼女は後方に吹っ飛ばされ、血が宙を舞った。

第25話 槍と剣

手に残るのはイプシロンを殴った感触。私は彼女の顔を殴りつけしまった。彼女は壁に背中を打ちつけ、倒れる。口内を切ったのか口の端から一筋の血が流れる。

「あ、す、すまない」

「……別にいいわよ。これくらい、平気だから」

冷たい目と無表情な顔。私の背中にゾクリとしたものが流れる。イプシロンは血を拭うと赤くなった頬を押さえて立ち上がった。そして、私に「そろそろ時間よ」っとだけ言うのと部屋から出て行く。そうか、試合の時間だった、な。私もまた彼女を追うように部屋を出た。

あの黒い性格。無表情な顔。感情がないような心。全てを見抜き、感情をいれずに、冷たく物事を判断する心。あの心はどうやって生まれた？ なぜそうなった？ 彼女の黒い過去に関係しているのは間違いないが……

そして、なぜサレファトを殺すつもりなんだ？ 何か怨みでもあるのか？ 何か関係でもあるのか？

彼女にイジメを行った姉と弟。2人はどんなヤツだったんだ？ 家族は2人しかいないのか？ もしそうだったら唯一の家族を失って寂しくないのか？

きっと彼女は多くの人と関わる性格の人間じゃない。関わってきた人間はそう多くないだろう。その数少ない人間を殺した事になる……

＊

【ステイラルシティ 闘技場】

ステイラルシティの闘技場。ほったに白いガーゼを貼り付けたイプシロンはまた私の横に座る。あれから彼女とは喋ってない。ずっと無言でここに来た。

「それではNo. 11 “槍の使い手ラムダ” 選手と“猛剣シータ” 選手の試合です！ バトルスタート！！」

ん？ シータっていう男は見た事あるぞ。ここでガンマとグザイの試合の時、イプシロンが怒鳴ってきた時に見た。

——さあな。俺には分かん。

13歳くらいの女の子が「ねえ、あのお姉ちゃん、どうして怖そうな顔してるの？」と言った時にそう答えた男。短く黒い髪に筋肉質な肉体をした男。

彼も大会の参加者だったのか。

「槍イと剣ンですかァ。槍のほうが優れてるツスよォ」

「それはどうかな？ ラムダ君」

「だって、ホラ“優れてごめんオーラ” 全開じゃないっスか」

どんなオーラだ。

「そうか。ならばそのオーラ、かき消そう！」

そう言うときシータは剣を取り出し、ラムダに切りかかる。だがラ

ムダは横に飛び、素早く立ち上がる。その手には赤く長い槍。

「MAXのストレート・オーラ」！

赤い槍の先端は白い金属。ラムダはシータを突き刺そうと素早い動きで何度も突いて来る。だがシータはその全てを剣で受け止め、受け流す。

槍の使い手ラムダも猛剣シータも相当高い実力の持ち主だ。でも近距離戦はそう長く続かない。魔法発生装置の戦いは長引くが近距離戦は体力を激しく消費する。そう考えれば長くはない。

「ハイヤア！ ハイヤア！」

「……………！ クツ……………！」

だがシータは防戦一方だ。さっきから攻撃するのはラムダ。何度も突き続ける。

「ミーのモットーは！」

「……………！」

「相手に隙とチャンスを与えないッだア！」

剣が宙を舞ってしまった。弾かれたか。勝敗は決まったな。ラムダは槍を引き戻し、槍を押し出す。防ぐものがないシータ。槍は肩に突き刺さった。

「勝利への道・黄色のオーラ」！

槍の先端から電撃。シータはその場に倒れた。

「シータ選手戦闘不能！ ラムダ選手の勝利です！」

歓声。大きな歓声が上がり、勝利したラムダを称える。

「うッググッ……」

「お、おお、大丈夫かァ？」

そう言ってラムダは手を差し伸べる。その手を取って立ち上がるシート。

「ああ、すまないな。お前の槍の力、凄かった。次も頑張れよ」

「ミーに負けはないッスよ。でもミーの攻撃をあれだけ受け止めれたヤツ、ユーが最初。“ちょっと焦ったオーラ”がにじみ出たッス」
「ハハハ、次会ったら俺が勝つさ」

会場を包む歓声。そんな歓声の中、2人はバトルフィールドを後にした。この時、私以外に誰か気づいただろうか？ この歓声の中、1人の少女が泣いていたのを。

「お兄ちゃん…… 私、お兄ちゃんの分も頑張るからねッ！」

>i30099—1537<

第26話 ばーん☆

【ステイラル 闘技場】

翌日。太陽の光の下、ステイラル大会は始まる。今日は第1回戦は2試合しかない。第1回戦第7・8試合の2試合だ。夜は第2回戦第1試合が行われる。

「それでは第1回戦第7試合を始めたいと思います！ No. 13 “衝撃のイータ”選手とNo. 14 “鉄斧のプサイ”選手です！」

イータ。昨日、この会場で唯一泣いていた黒い髪にポニーテールをした少女。間違いなくシータの妹だ。兄妹でこの大会に参加とは凄い兄妹だな。

……でも兄はともかく、あんな少女がなぜ予選を突破できたんだ？

「それでは早速バトルスタート！」

試合が始まる。このアナウンと歓声も聞き飽きてきたな。言っちゃ失礼だが。

「ガハハハ、可愛いガキじゃねえか。俺の大斧の餌食になりたくないければさっさと降参しな！」

鋼の仮面した大男プサイ。この男、かなりデカイ。3メートルくらいあるぞ。その手には巨大な鋼の大斧。それを片手で持つとは。バトルフィールドを拳で割ったカイにも劣らぬ筋力の持ち主かも知れないな。

「それはコッチのセリフ！ 私は負けないんだからねッ！」

そう言うのと両手をプサイに向ける。その手は親指を立て、人差し指を前に突き出す。……銃の形？

「……………」

「ばーん☆」

「……………」 ガハハ、撃たれてしまったぞ。痛くって血が出ちゃうぞぉ」

プサイは笑いながら言う。仮面で表情は分からないがきつとその顔も笑っているだろう。それにしてもイータは勝てるのか？ いや、どうやって予選を突破してきたんだ？ 魔法発生装置で何とか勝てたのか？

「ばーん☆ ばーん☆」

「ガハハ、そろそろ降参するか？ それともちよこつと痛い目に合うか？」

「お兄さん、降参しないんだね。そろそろ本気でいくからねッ！」
「……は？」

そろそろ本気でいく？ まあそうだろうな。これが本気なハズがない。……で、何で“手の銃”は戻さないんだ？

「私は勝つんだからねッ！ ばーん！ ★」

そう言った瞬間、イータの指先から白い弾が飛んだ。アレは魔法発生装置でも使える“衝撃弾”だ！ でも何で魔法発生装置なしで使えるんだ！？

彼女の両手から飛んだ衝撃弾はプサイの体を覆う鋼の鎧に当たる。

その瞬間、衝撃弾は巨大化。爆発。轟音と共に鎧は砕けた。

「ぐぎゃアッ！」

悲鳴と鎧の破片が飛ぶ。大斧はバトルフィールドに落ち、プサイは危うくバトルフィールドから落ちそうになる。

そんな彼にイータは衝撃弾を飛ばす。その手には何も持っていない。轟音と共に強烈な爆発。プサイの巨体は倒れる。

「せ、戦闘不能！ イータ選手の勝利です！」

アナウンサーが慌てて言う。予想外の展開。大男であるプサイが負けて小さな少女が勝利を得れた。誰も予想せぬ展開だっただろう。どうなっている？　なんで魔法発生装置なしで衝撃弾を飛ばせたんだ？

「パーフェクターよ」

「え？」

「イータ選手は衝撃のパーフェクターよ。だから魔法発生装置なしで衝撃弾を飛ばせた」

ウソ、だろ。1000万人に数人といわれるパーフェクターがまた、だど！？　毒のパーフェクター・イプシロン。精神のパーフェクター・ファイ。そして、衝撃のパーフェクター・イータだと……！？

まさか、この大会3人もパーフェクターがいるなんて……

「それよりも次は第1回戦最後にして最大に面白いバトルよ。楽しみね」

「は？」

最後なのは分かるが最大に面白いつてどういうことだ？ 何かあるのか？

私はもう一度バトルフィールドを見る。そこには倒れたプサイを運び出す大会スタッフ達だけ。イータはもういなかった。そして、私の周囲の観客も会場から出るのか立ち上がっている人もいた。次の試合は1時から。今は11時をちょっと過ぎた辺り。次の試合までの時間はまだある。

私も食事を取る為、立ち上った。その時、ふと空を見上げる。太陽が隠され、ほんの少し暗くなっていた。冷たい風も吹き出す。悪い事が始まる前兆か――？ いや、そんな事はないだろう。私は心に湧いた不安をかき消すように歩き出した。

> i 3 0 1 5 4 — 1 5 3 7 <

第27話 255倍<691倍

【ステイラル 闘技場】

「さア！ ステイラル大会第1回戦第8試合！ つまり第1回戦最後の試合ですッ！」

眩しき太陽の光が注ぐステイラル闘技場。ついに最後の戦いが始まる。しかし、この試合の前にイプシロンが言っていた事。それが気になる。あの言葉の意味は何なんだ？

そのイプシロンは今も私の横に座っている。片手にタッチパネル式の新型携帯型端末器を操作しながら。

「No. 15 “コピーのロー”選手とNo. 16 “狂戦士オミクロン”選手です！」

……コピー？ コピーって何だ？ どういう意味だ？

バトルフィールドにはローとオミクロン。

ローはピンク色の髪に白い肌。すらりと伸びた手足、細い腰、逆三角形に近い顔。いわゆる美女ってヤツだろう。年齢は10代後半くらいか？

一方、オミクロンは男性。金色の髪にごつい顔。見る者を恐怖に陥れる。そんな顔をしていた。その筋肉質な腕には刺青。年齢はローと同じく10代後半くらい。

「それでは最終試合の開始ですッ！ バトルスタートオ！」

イプシロンは端末機の操作を止め、バトルフィールドを見ていた。今回は興味あるのか？ そんなに凄い戦いになるのか？

「さて、と。君、オミクロンって言うんだね」

「……ああ」

「戦う？ 降参する？」

「……戦う」

ローは何を言っているんだ？ ここに来て降参はないだろう。何が言いたい？ そんなに自身があるのか？

私がそう思っているとローは言った。

「私、“コピーのパーフェクター”！ よろしくね！」

な、何ッ……！？ あの女、パーフェクターだったのか！？ クソッ、これで何人目だ！ 毒、精神、衝撃、そしてコピーだど！？ 会場からはざわめき上がる。そりゃそうだろ。1000万人に数人のパーフェクターがこれで4人もいるんだぞ！ どうなったんだ、この大会は！ バトルフィールドに立つ男もさぞ驚きだろ！

「パ、パーフェクター、だと……？」

「そう！ 私はコピーのパーフェクター！ 他人の能力・知力をコピー出来るのよ！ コピーすればコピーするほど私の力は上がる。それで私が今までにコピーした人数は……」

ローは少し間をおいて叫んだ。

「“一般市民136人、政府軍人89人”！ 合計して“225人の力を得たのよ！ 私は最強よ！！”」

225人だど！？ つまり、一回殴っただけで普通の人の225倍のパワーが出せるという事か！？ クッ、なんてヤツだ！ これ

じゃ勝ち目なんて……

「パーフェクター？ 俺“も”だよッ！！」

は？

「え？」

「俺は“吸収のパーフェクター”だ！！」

どうなって、いる……？ パーフェクターが5人？ 吸収のパーフェクター？

「俺は相手の能力をコピーする事も可能。だが、相手の攻撃を吸収する事も出来る。ロー、お前より数段上だ。お前との能力の違いは吸収された人間は“死”だ」

コピーされても死なない。でも吸収されたら死……！

「俺は最強のパーフェクターだ！ 吸収して殺した人間は691人！！」

691人！？ ローの3倍以上だと！？

「さア、パーフェクターを“食べる”のは初めてだなァ……ギヤハハハ……」

オミクロンはベロリと舌を出す。その目は狂気に満ちていた。クッ……“狂戦士”が！

「そ、そんなの、あるワケ、ないじゃない！ パーフェクターは1

000万人に数人しかないのよ!」

そう叫ぶとローは走り出す。普通の人の225倍の速度で。それはもはや瞬間移動だった。だが、691倍の速度で彼女の攻撃を避けるオミクロン。もはや異常な戦いだった。

255倍VS691倍。圧倒的な力の差がある。ローが勝てるはずない。いや、もしかしたら彼女は殺されてしまうかも知れない。オミクロンに吸収されて!

「おっと、危ないねえ」

「クッ、コピーさえできれば勝てるのに!」

ローはオミクロンに向かって突進を繰り返す。きっと彼の体に触れれば一瞬でコピー出来るのだろう。コピー出来れば彼女の勝ちとなる。255倍+691倍 $\parallel$ 916倍VS691倍で。でもそれをさせるハズがない。

「ヤバいぞ…… ローのヤツ、殺されるぞ」

「そうね。早いうちに降参しないと命なくすでしょうね」

バトルフィールドを見ながら言うイプシロン。人の死を何とも思わない、いや楽しむ彼女にとってこの試合はどう映っているのだろうか? ローが殺されるのを求めているのだろうか?

「クッ! 私は最強のパーフェクターでアンタなんかには苦戦するハズじゃなかったのに……!」

「最強のパーフェクター? 自分が最強? ギャハハ! “たかがコスーム人”! お前らが最強なワケねーだろ!!」

オミクロンが唾を飛ばしながら叫ぶ。

たかがコスーム人？ オミクロンのヤツ、何を言っているんだ？
コスーム大陸とその周域の島々。そこに住む人々の名称。それが
コスーム人。まさか、オミクロンはコスーム人じゃないのか？

「オミクロンはこの大会で唯一コスーム人ではない人間だわ」

「コスーム人じゃない？」

「そう。彼はコスーム大陸南方に位置する国際政府の支配の及ばない地、アポカリプス大陸の人間」

「……………！」

アポカリプス大陸の人間、だと！？ 疫病と紛争が蔓延し、科学
力を持たぬ未開の地。年中、紛争が起き、人が殺されるのが当たり
前の地。それが私の知るアポカリプス大陸だ。

オミクロンはそのアポカリプス大陸出身なのか！？

「さて、そろそろこの試合に決着をつけようか…… パーフェクタ
ーの女はどんな味がするかな……………？」

オミクロンが舌なめずりする。彼から発せられるオーラ。それは
まさに狂気そのものだった。

第28話 アポカリプスのオミクロン

オミクロンが消えた——……

いや、違う。彼は一般人の691倍の速度で移動したのだ。だから私達にはその姿が見えなかったのだ。彼が移動した先はローのいる場所。

「……………」

オミクロンはローの首を持ってその体を持ち上げる。691倍の力を持つ彼にとってこんなのはワケないのだろう。彼女は彼の手を必死で振りほどこうとするがビクともしない。255倍と691倍では勝てないハズもない。

「苦、し……！ は、離せエ……ッ！」

「ハッハッハッ！ 哀れだなコスーム人。お前らコスーム人共が下とと思っていたアポカリプス人に負ける。どんな感じだ？」

そう言うオミクロンは苦しそうな表情をするローをステージに叩き落とす。コンクリートで出来ているステージ全域に大きく亀裂が走る。一体どれほどの力で叩きつけられたんだ……！

だが、オミクロンの猛攻は終わらない。彼女を何度も足で踏みつける。その目には深い憎悪のようなものを感じ取れる。

北大陸のコスーム大陸と南大陸のアポカリプス大陸ではお互いがお互いを嫌悪し合っている。コスーム人は“野蛮で危険な人々”と呼び、アポカリプス人は“北の悪魔”と呼ぶ。特にアポカリプス人は疫病が蔓延し、紛争が起こるのは北のコスーム人が豊かさを横取りしていったから、と考えている。

それは間違いじゃないだろう。その昔、コスーム人は資源という資源を奪った。国際政府が大軍を送り込み、アポカリプス人を奴隷とし、資源を取った。資源がなくなれば国際政府は全ての物を持ち帰っていった。

そう、彼らアポカリプス人には何一つ残さなかった。奴隷として使い、利用価値がなくなったらコスーム人はアポカリプス人を捨てていったのだ。

「テメェらコスーム人のおかげで俺らの大陸はどうなったと思ってるんだ!？」

「……………!」

「資源を失った俺らは残された資源の奪い合い!」

オミクロンはローを踏みつけながら怒鳴る。

資源の奪い合い、か。僅かな資源を巡って彼らは殺し合いを続けたのか。それは知らなかった。

資源を奪い合う為に戦争をする。その為に資源を使う。使えば資源はなくなる。ないから奪う為に戦争をする。そして僅かな資源を使う。

国際政府は、いやコスーム人は知らない。私も含めて。資源がないに等しいアポカリプス大陸などどうでもいいのだから。この大陸に攻め込んでこない限り。

「もう、や、め……」

小さく力のない声でローは言う。だが、そんな事は知った事ではないオミクロンは彼女を再び持ち上げる。もはや彼女に抵抗する気力すらないのか、さっきと違い彼の手を引き離そうという抵抗をしなかった。口を動かし、何かを呟いているようだったが私にはそれを聞き取る事が出来なかった。

「人のクソであるコスーム人！ テメエらはいずれ淘汰される！！」

オミクロンはローを投げ飛ばす。彼女の体は緑色の芝生に吹き飛ばされ、そこにめり込む。砂煙が上がる。その砂煙が晴れた時、彼女のボロボロになった体が見えてきた。その体はピクリとも動かなかった。……アレ？ 彼女は吸収するんじゃないかったのか？

「ん？ ああ、やっちゃったか」

バトルフィールド外に倒れるローを見、オミクロンが言う。コスーム人に対する怒りで冷静さを失い、力任せに彼女を投げ飛ばしてしまったらしい。

彼女は九死に一生を得た。いや、今生きていればの話だが……

「まあいい。まだ試合はあるからな。だが覚えておけ！ コスーム人！ いずれアポカリプスはお前らコスームを滅ぼす！ いずれお前らは歴史から消え失せる事になるだろう！！」

客席に向かってそれだけ叫ぶとオミクロンはバトルフィールドから去っていく。ローは大会スタッフによってタンカーに乘せられて行った。彼女は生きているだろうか……？

アポカリプスのオミクロン、か。アポカリプス人がここにいても驚きだが、まさかパーフェクターとは。

……どうでもいいが彼がこの大会で優勝したら間違いなくサレフアトは殺されるだろうな。絶対に吸収される。そして彼の優勝を止められるような選手はいない……

第29話 助ける？ 見捨てる？

「クウッ……！」

白いバトルフィールドに散る血。彼女は斬られた腹部を押さえながら後退する。その表情はいつもと同じくあまり変化が見られない。少し歯を食いしばっている感じはするが。

一方、対戦相手の彼もまた苦しそうにしている。その顔にはガスマスク。表情は見えないが時折上げるうめき声と動きから分かる。彼が苦しそうにしているのが。

「う、ググッ……」

月が出る夜。冷たい風の吹く夜。ステイラルシティの闘技場では2人の男女が戦っていた。第2回戦第1試合・ツエータVSイプシロン――！

人はパーフェクターに勝てないのだろうか？

試合開始と共にイプシロンは紫色をしたゼリー状のモンスターを召喚。その姿は2メートルもあるカエル。その手は人の手をしていった。

「グッあッ……！」

ツエータはその場に倒れる。体に付着した毒。あのカエルに殴られた時につけられた毒。それは時間と共に彼の体を蝕んでいった。

落ちていく体力。蓄積されるダメージ。ツエータを勝利という文字から遠のかせていく。

「1回戦で私は毒ガスを使った。だからアナタはガスマスクを用意

してきたんでしょ？ でも残念ね。私は毒ガス以外の攻撃法を有しているわ」

イプシロンはツエータに近づく。彼にはもはや抵抗する力はない。彼女は倒れている彼のガスマスクに触れる。そしてそれを器用に外し、投げ捨ててしまった。

小さく微笑むイプシロン。投げ捨てられたガスマスク。絶望がツエータを襲う。あの毒は精神をも蝕むのだろうか……？

「ク、ソツ…… パー、フェクター、には勝てない、か」

ツエータは倒れ、気を失う。勝ったのはイプシロン。

彼女の腹部から流れ出る血。彼が出来たのは彼女を一斬りした事だけだった。“カエル”を斬り倒し、素早く彼女に近づき、斬った。それだけ。

「イプシロン選手の勝利です！」

あつという間の試合。第1回戦第1試合でカイを倒したツエータ。彼は毒のパーフェクター・イプシロンによって脱落という道を辿った。

一般人3名、パーフェクター4名。本戦参加者は残り7名……

>i30390—1537<

イプシロン。18歳女性。

本人曰くサレファトを殺すつもりでこの大会に参加しているらしい。毒のパーフェクターで多くの情報をも持っている。危険な人物。

ファイ。年齢不明の女性。

人进行ののままに操る事の出来る精神のパーフェクター。仮に優勝してもサレファトを殺しはしないと思う。優勝して欲しいが私の次の対戦相手。倒すしかない。

グザイ。若い男性。

パーフェクターではなく、魔法発生装置を駆使して戦う政府軍人。彼なら確実にサレファトを助けてくれるだろう。しかし、私の目からすれば残った本戦参加者の中でも弱い方のような気がする。

ラムダ。年齢不明の男性。

彼もグザイと同じくパーフェクターではない。必然的に近距離戦となる槍を使って戦う。優勝してもサレファトには危害を加えない、ような気がする。だが恐らく本戦参加者の中で最弱。

イータ。まだ幼い少女。

衝撃のパーフェクター。きっとサレファトを傷つける事はないと思っている。しかし、彼女の次の相手はあのオミクロン。最悪彼女が殺害されるかもしれない。優勝して欲しいが期待は出来ない。

そして、オミクロン。アポカリプス大陸出身の若い男性。

吸収のパーフェクター。コスーム人の命を何とも思っていない感じがある。優勝したら100%サレファトは殺される。吸収されて。

この大会で最も危険な人物。

別に私はサレファトを助きたいワケじゃない。……ハズ。

っていうか、なんでこんな面倒な事になっているんだ？ 発端はサレファトが捕まった事。そして私がたまたまこの大会に参加してしまった事だろうな。

最初は優勝する気はなかったが……

「優勝しなければサレファトは死、か。別にあんなヤツ死んでもいいケドな……」

死んでもいい。ならなぜ私は戦っている？ イプシロンの言うようにどこかで悔やんでいるのか？

——アナタが彼をこの都市に連れてきた。それにも関わらずアナタは彼を突き放した。この都市の外出禁止時刻という条例を教えずに。

教えなかった私の責任。私のせいで彼は捕まった。中途半端に彼をステイラルシティに連れてきたから。無責任な私のせいで捕まった……

「クッ…… 私のせい、なのか」

ここで棄権すれば私は“死の渦”にサレファトを捨てた事になる。彼を残酷な未来に捨てた事に。でも助けたくはない。彼に私は犯された。

では見捨てるか？ でも彼には一度助けられた。私を犯したのだから財閥連合社の命令だったのかも知れない。

彼は私のせいで捕まった。私が無責任に突き放したから……

助ける？ それともここはスッパリと見捨てた方がいいのだろうか……？

第30話 棄権

【ステイラル闘技場】

私はこの日も今までと同じように闘技場内にいた。今日は第2回戦第2試合の日。つまり私とファイが戦う日。

彼女は精神のパーフェクター。私は彼女を倒し、次に勝ち進めるだろうか？ この試合に勝てれば次はイプシロン戦だ。

「マジやべえって」

「オミクロンはまさに狂戦士だぞ」

「人を殺す事をなんとも思っていないからなあ。特にコスーム人に対しては」

「勝てるワケないだろう。……私は本業に戻るとする」

「そ、そうだよなア。1回戦のユーには悪いケド、ミーも……」

「ローはかろうじて生きていたらしい。でも相当酷いらしく政府首都の病院送りだとき」

「酷いやツだよな。さすが野蛮なアポカリプス人だぜ」

「……分かったよ」

「すまない、でもこの大会は所詮、ゲームみたいなものだ。ムダに死ぬ事はないだろう」

私は勝ち進む。勝ってあの女を、イプシロンを倒す。オミクロンは衝撃のパーフェクターであるイータや政府軍人であるグザイが倒してくれる……と思う。それを信じている。

だから私は今日の戦いに集中する。全力で勝つ！ 勝ってイプシ

ロンを倒す！

＊

そして時間がやって来た。相手は精神のパワーエクター・ファイ。1回戦では対戦相手であるシグマを操った。あれに抵抗できるのかどうかは分からないけど、私はアイツの魔法を破る。破って彼女を倒す！

私は白いコンクリートで出来たバトルフィールドに立つ。眩しき太陽。白い雲とその隙間から覗かせる蒼い空。私は……勝っッ！

「えー、皆様にお知らせ致します」

……………？ 例の、いつも司会をしている女性アナウンサーの声。何かあったのか？

「No. 5のパトラー選手、No. 7ファイ選手の戦いの予定でした
がファイ選手は棄権しましたので……」

は？ 棄権……？

「No. 5のパトラー選手を勝利とします！」

会場からどよめきが上がる。観客全員が驚いているのだろう。だが、一番驚いているのはこの私だ。なぜだ？ なぜ棄権したんだ？ ハッキリ言って私とファイなら彼女の方が能力は遥かに上だろ。それがなぜ棄権したんだ？

ファイの突然の棄権。何はともあれ“勝利”した私はバトルフィールドから闘技場内へと戻っていく。暑いワケでもないのに額から汗が流れた。

＊

「……………！」

闘技場内で会った。私の第2回戦第2試合の相手になるはずだった選手と。そう、圧倒的力の差があり、私に勝てる可能性が高かった女性を、精神のパフォーマンス・ファイを。

「ファイ、だよな」

「……………」

「なんで棄権したんだ？ 何かあったのか？」

斜め下を見つめたまま、黙ったままのファイ。しばらくすると彼女は私に目を向け、静かに、ゆっくりと話始めた。

「アナタ、死ぬよ」

「は？」

「第1回戦第8試合を見てなかったの？ あの狂氣的なオミクロンの試合を」

第1回戦第8試合…… ローVSオミクロンの試合の事か。

「それがどうした？」

「あの試合を見て、アイツの能力と性格を見て、誰が戦う気になるの？」

誰が戦う気になる……？ どういう事だ？ ファイは何が言いたいんだ？

「アナタは同じ第2回戦第2試合で私と戦うハズだった。その縁で教えて上げる」

「……………」

「もう、この大会は異常よ。オミクロンという殺人鬼の出現でね」

「それがお前の棄権とどう関係が」

「まだ分らないの？ もうグザイもラムダもイータもこの会場から去ったよ。言いたい事、分かってきたでしょ？」

この瞬間、私はようやく分かった。彼女が何を言いたいのか、何で棄権するかも、全て分かった。

残った選手全員、オミクロンを恐れて棄権する、いやもう棄権した。そうなれば自動的にオミクロンが決勝へ進出。第2回戦は第1試合のみで終了。すぐに第3回戦が始まる。第3回戦は私とイプシロンの戦い——！

彼女は大きなバッグを背負う。そうか、彼女もここから去るのか。

「私は死にたくないから棄権するよ。あとは頑張ってね。参加し続けるのか棄権するのかはアナタの自由だけど」

「あ、ああ」

「……私もパーフェクターだけど、能力を悪い事に使った事はないよ。でも、悪い事に使ったら恐ろしいね。同じパーフェクターだけど、彼は怖いよ」

そう一言呟くと、ファイは去って行った。大きな荷物を背負って。その時、アナウンスが入る。

「お知らせ致します。N.O. 9グザイ選手は公務の為、棄権。N.O. 11ラムダ選手は急病の為、棄権。N.O. 13イータ選手、緊急の用事の為、棄権致しました」

「クッ…………！ 全員、棄権したのか！」

「No. 16オミクロン選手は決勝進出。本日の夜、No. 4イプシロン選手とNo. 5パトラー選手の試合を行います」

これで決まった。私とイプシロン。勝った方が決勝進出となる。決勝ではオミクロンと戦う事になる。あの吸収のパーフェクター、コスーム人を憎しみ抜くオミクロンと……！

第31話 激突！

【ステイラルシティ 闘技場】

バトルフィールドに立った私とイプシロン。第3回戦第1試合。第3回戦の最初で最後の試合。これに勝った方は決勝に進み、オミクロンと戦う事になる。

死にたくはないが、負けたくもない。オミクロンと戦って勝てる可能性はない。でも彼女には絶対負けたくない。

では彼女に勝って棄権するか。しかし、それではサレファトを救えない。オミクロンは恐らくサレファトを吸収するだろう。吸収は死……

「来たのね、パトラー」

「……………」

イプシロンもまたサレファトの命を狙っている。だから彼女も倒さないといけない。彼女とオミクロンを倒さないとサレファトを助ける事はできない。

“あの時”サレファトと行動しなければ、“あの時”サレファトを突き離さなかったら、“あの時”サレファトに条例を教えていれば……もう、どんだけ過去を悔やんでも時間は戻らない。過去を悔やんで、時間が戻ってほしいと強く願うのは私の悪いクセだな。

「それではバトルスタート！」

アナウンサーの元気な声。しかしそれに応える歓声は少ない。よく見ると観客が前日までに比べ少なくなっていた。この大会にもう関わりたくない、という事か。

静かな夜。風が吹く夜。私とイプシロンの試合は始まった。サレファートの運命を決する試合の1つが始まった。

「さア、始めましょう。“最高のゲーム”を」

最高のゲーム、か。どこまでも歪んでいるなイプシロン。この試合を最高のゲームを言う時点で。

私はスタンロッド型の魔法発生装置の先端をイプシロンに向ける。一撃で仕留めれるとは思ってないケド、彼女は毒のパーフェクター。防御に関しては一般人とそう大差ないハズ。事実、彼女は第1回戦第1試合でツェータに斬られた。その時、血も出ていた。防御は普通の人間と同じ！

「喰らえッ！ イプシロン！」

魔法発生装置から衝撃弾を飛ばす。あの衝撃のパーフェクター・イータの飛ばす衝撃弾に比べればこの衝撃弾は小さく威力もそんなにない。でも一般人が喰らったら一応ダメージは受ける。

私の放った衝撃弾は真っ直ぐイプシロンを指して飛ぶ。

「衝撃弾、ね」

彼女はあのいつも持ち歩いているタッチパネル式の携帯端末危機を取り出す。そして素早く何かをタッチした。アレで何をするつもりだ？

私がそう思っていると黒と青が混ざり合った塊が現れる。衝撃弾は突然出現したソレに取り込まれていく。何だアレは！？

しばらく見ているとその塊は弾け飛ぶ。衝撃弾はなくなっていた。魔法、だな。

「全ての物質を取り込み潰す物質、闇。私のこの端末機器は魔法発生装置としての役目もあるのよ。知らなかったでしょ？」

知るワケないだろ。

「次は私の番ね」

彼女は素早く何かを入力していく。その手の動き、あの端末、そうとう長いこと使っているな。右手1つで扱う。

「苦しみなさい、パトラー」

私の周囲に赤い多角形の輪っかがまとわりつく。これは見た事がある。あの精神のパーフエクター・ファイが使っていた技だ。まさか、同じ能力が……！？

「ミッション＊パトラー」

な、何をする気だ……！？

「攻撃を受け続けろ」

「……………！」

イプシロンの声を聞いた瞬間、体がまともに動かなくなる。攻撃を受け続けろ、だと！？

彼女は端末を操作する。すると、彼女の持つ端末の近くから白色をした衝撃弾が飛び始めた。向かってくる先は言うまでもなく私の方向。

「クッウツ……！」

体が動かない！ 全く動かないワケじゃないケド、いつものように素早く動くことができない。迫ってくる！ 白色の衝撃弾が！ 動け、動いてくれ！

しかし、無情にも魔法で操られた体は動きがとても遅い。衝撃弾は私の顔に直撃する。直撃した衝撃弾は爆発。私はその場に倒れる。それでも体は動きがノロい。鼻からドクドクと熱い血が流れていく。一方、イプシロンは無表情で端末を操作していた。まだ何かする気か……！

「耐え続ける苦しみ、誰も助けにはきてくれない。助かりたければ自分で何とかするしかないのよ」

「クッ……」

イプシロンがより強く画面をタッチする。今度は衝撃弾が7つも。それらが全て私を目がけて飛んでくる。

私は目をつむり、必死で体を動かそうとする。だが、やはり体は動きが鈍い。精神は早く逃げろと言っているが肉体がそれに全くついていけない。

ほどなくして私の体に衝撃弾が浴びせられる。何発も何発も……！ この状況を例えるなら集団リンチを喰らっている、と例えられるだろう。容赦ない物理的な攻撃を思わせる魔法攻撃。それが四方八方からやってくるのだ。

「あグッ！ ぐッアッ！ イプシロ、グアッ！」

全ての攻撃を受け、私はその場に倒れ込む。体がガクガクとする。目が捉えるのは無表情なイプシロンとバトルフィールドに転がった魔法発生装置。少し遠いところにあった。私はそれを取らず、右手をゆっくりと動かす。目はしっかりとイプシロンを捉えて。

「4年前、財閥連合社という世界最大の民間企業を滅ぼした4人の戦士。その内の1人がアナタ。4人の内の1人であったアナタがこの程度の実力しかないとはね」

何が言いたい！ 私はイプシロンに向ける視線を鋭くする。右手は密かにハンドガンを握っていた。後は素早く狙いを定めて撃つだけ。防御は普通なのだから一発撃てば倒せるハズ。

「アナタでこの程度。他の3人の実力も知れているわね。リーダーのフィルドという女性。彼女と私が戦ったらきっと勝てるでしょうね。楽に」

「……………！」

なんだと……！？ お前が私の、あの人達と戦って勝てるだと！ フィルドさんと戦って勝てるだと！ お前なんかが、フィルドさんに……！

私は下唇を強く噛む。仲間をバカにされて悔しい。仲間がそう言われるのも自分が弱いから。自分自身にも腹が立った。でもイプシロンに対する憎悪の方が大きかった！ ふざけるのも大概にしろ！！ 会場に力強い銃声が鳴り響いた。

第32話 反撃

やってしまった、と思った時にはもう遅い。私は昔から一時の感情で動いてしまう事がある。そしてその行動を後悔する。これはもう私の性格なのだろう。

「グッ、うアッ」

白いバトルフィールドに飛び散った赤い液体。イプシロンの右腕から流れ出す赤い液体。それはまぎれもなく彼女の血。それは私が彼女の右腕を撃ち抜いた事によって流れ出した。力強く握る魔法発生装置を内蔵した携帯端末。それが血で染められていく。

私は震える手でハンドガンを握り、銃口をイプシロンに向ける。赤いスコップライトが彼女の脚に当たる。

「こ、降参するか？」

「……するワケないでしょ？」

イプシロンは一言呟くように言う。と血で濡れた携帯端末を落とす。その顔はいつもと同じように無表情。いや、少し笑っているようにも見えた。狂気的な笑いを感じた。こいつ、戦闘を楽しんでいる……！

「殺し合いこそ、最高のゲーム。追い詰められた相手。その相手が恐怖する時こそ私は快感を得る」

そう言うイプシロンの両腕は紫色のゼリー状に変色し、巨大化していく。半固体の手。指先から紫色の液体がバトルフィールドに落ち、煙を上げる。もしかしたらあの煙にも毒が……

「私が4年前、バカ2人とやったゲームも面白かったケド、このゲームも楽しめそうね」

「黙れ！」

「アナタが敗北したらアナタのせいで捕まった少年は死ぬ。さア、どうする？ どうやって勝つ？」

私はチラリと斜め下に視線を向ける。そこには私の魔法発生装置が転がっていた。私はそれを取ろうと素早く走り出す。

だが、それを待っていたかのようにイプシロンは動いた。巨大化させた手を使って、私を殴りつけた。ゼリー状になった手で。水音と共に私は後方に吹き飛ばされる。

「ガ、ハッ……！」

大きく吹っ飛ばされた体。その体には紫色のゼリーがへばり付いていた。まさかこれには毒があるんじゃない……！

私の予感は的中した。全身が電気技を喰らったかのように痺れてきた。まともに体が動かない！ 自分の体なのに他人の体のような感じに陥る。クソッ、神経毒か……！

「どうかしら？ 動かないでしょ？ アナタの体」

「クッ……」

イプシロンの手は既に元に戻っていた。だが、その代わりにサソリ型の巨大生物が彼女の前にいた。その体は大型化した彼女の腕と同じような性質、色だった。つまり、ゼリー状で紫色。いつの間に……

「私は全部で5匹の大型生物を作り出せる。彼らは全て私の意思で

動く忠実なペット」

5匹の生物？ ツェータ戦でも出現させたカエル。今いるサソリ。他にも3体の生物を作り出せるのか。毒のパーフェクターで生物を生み出せるとは、な。

私は痺れる手で対衝撃コートの内側に隠し持っていた“アレ”を握る。

「わ、私は負け、ない……！ お前を、倒す！」

その瞬間、私の体は蒼色の光に包まれる。イプシロンから受けた毒が消えていく。体の痺れが消えていく。

これは奇跡でもなんでもない。コートの内側に隠していたもの、それは“2本目の魔法発生装置”！

「……………！」

「喰らえッ、イプシロン！」

私は魔法発生装置の先端を空に上げる。そこから一筋の雷。それは空高く上がり、やがて下に落下してくる。落下する場所はサソリではなくイプシロンのいる場所だった。彼女を倒せばきっとサソリも消滅する。そう思って私は彼女に向けたのだ。

私が魔法発生装置を2つ持っていた事はきつと彼女も以外だったのだろう。

「クッ、まさか、2本目の魔法発生……！」

眩しい光と共にイプシロンの体に小さな雷が直撃する。煙が巻き上がり、辺りが僅かに振動する。彼女は毒のパーフェクター。攻撃面では優秀な能力だが防御面は普通。さすがの彼女でもこれで終わ

りだ。

「驚異の毒のパーフエクター・イプシロン選手、この攻撃には耐えられなかったのでしょうか!? 彼女もここでアウトでしょうか!」

煙が晴れる。見えてくる光景。それに私は目を疑った。
そんなバカな……!

「おおっと! イプシロン選手、まだ立っております!」

私の目に映る光景。毒の怪物、大型のサソリ。そして所々黒く焼け、ボロボロになったイプシロンの姿だった!

第33話 優しさがアダになる時

「私を、その程度の攻撃で倒せる、と思った……？」

フラフラとしながらイプシロンは言う。彼女は近くに落ちていた携帯端末を拾い上げる。その動きは決し早いとは言えない。ゆつくりとした動きでそれを拾う。

私は思った。今、攻撃しないと、今しかチャンスはない。この機を逃したら劣勢に立たされる。トドメを刺せ！ 彼女を倒せ！ 私の過去を知る彼女を消してしまえ！ ……彼女ヲ殺せ……

「うッグウツ……」

イプシロンは画面をタッチしていく。その動きは最初と違い、とても遅かった。そんな彼女の口から血が垂れる。その体は小刻みに震えていた。

もしかしたらこれ以上、攻撃したら彼女は本当に死んでしまうかも知れない。今はチャンス。でも攻撃したら本当に死んでしまうかも。死んだら彼女の今まで歩んできた人生は崩壊する。彼女の黒い過去も一緒に。

この大会で人を殺しても、その事実はおもひ消してくれる。国際政府前総帥トメルラーの息子、タイラントが消してくれる。だから私に問題はない。ないケド……

「ハア、ハア…… わ、私の、私の息の根を止めなかったのはきつと後悔する、わよ」

イプシロンは蒼い光に包まれる。回復魔法、か。
本当にそうなのだろうか？ 私は彼女を殺さなかった事を後悔す

るのだろうか？　いつものように後悔してしまうのだろうか？

「“優しい傭兵” にアドバイスして上げるわ。敵に情を持つといつか死ぬわよ」

イプシロンの声が聞こえた瞬間、ゼリーで出来た紫色の巨大なサソリが私に向かって突っ込んできた。私の意識があるのはここまでだった……

優しい傭兵……

4年前に別れた仲間達がそう名付けてくれた。

私は今も昔も強い口調で話していた。誰にも弱いように見られないように、と思いきやそういう口調で話し始めた。でも行動が全く合っていないかったらしい。

仲間の世話や困っている人の世話。人々の生活を害する魔物の退治。政府特殊部隊に所属しているのに私のやっている事は地方警備軍のやっているような事ばかりだった。

そんな調子だったから何度も特殊部隊をクビにされそうになった事もあった。その度に助けてくれたのが仲間のフィールドさんだった。彼女は特殊部隊副長官で私を何度も助けてくれた。

そして私の優しさがアダになる時がやって来た。

4年前、極秘に調査していた財閥連合社のオーロラ支部。私は早く仲間に情報を渡そうと焦っていた。だからムリに施設に近づいてしまった。

「支部近辺に不審人物発見！　ただちに拘束せよ！」

支部に鳴り響く警報。次々と兵士が出てくる。武器や魔法発生装置を持った兵士が……

「クッ！ バレてしまったか」

私は一目散に逃げ出した。雪の降る中、全力で走った。しかし、前からも兵士達が現れる。私は立ち止まる。後ろから、前から兵士。挟み撃ちにされた！

私は程なくして捕まった。私も魔法発生装置や武器を持っていた。だけどそれを使っていたのは僅かな抵抗だけだった。彼ら財閥連合兵を殺せなかった。手加減して戦ってしまった。

これが優しさがアダになってしまった瞬間だった。

そして、その後は思い出さくもない黒い過去。拷問、陵辱……私の黒い過去。無限ともいえる地獄に私は落とされてしまった……

：

第34話 優勝者

最悪のシナリオが出来上がっていく。第3回戦第1試合で勝ち上がったのはイプシロン。そして連続した棄権により決勝に進んだのはオミクロン。

どちらが勝っても優勝賞品として差し出されるサレファトは殺される。オミクロンは自分の能力アップの為。イプシロンは詳しい理由は分からないが殺す。

どちらが勝ってもサレファトに待ち受ける未来は明るいモノではない。死しかない未来。そこから助かる方法はもう……ない。

【ステイラルシティ 闘技場】

「バトルスタート！」

決勝。イプシロンVSオミクロンの試合。いや、殺し合いだろうか？

私は客席からその試合を見る事しか出来ない。サレファトが捕えられている所は知らない。だから助けに行く事も出来ない。私に出来る事はチャンスを待つ事ぐらいだった。

「さあて、“腰抜けコスーム人”よ。お前の最期の姿をこの観客共に焼付かせておくんだな！ お前は今日、俺に殺されるのだからな！！」

「……………」

イプシロンは何も言わず、タッチパネル式の携帯端末を弄り続けている。確か、アレには魔法発生装置が内蔵されている。そして、

それを操作する本人は毒のパーフエクター。パーフエクターと魔法発生装置。それでもオミクロンに勝つ事は難しいだろう。

「……その体で俺と戦おうとする事は凄いな。殺されたいのか？」

包帯を巻いた腕や脚。私がハンドガンで撃ち抜いた右腕にもそれは巻かれていた。魔法発生装置による回復にも限界があった。

「私は断言する。オミクロン、アナタは今日、私に負けて死ぬ」

「……そうかい、そうかい。なんの予言？ それとも予定？」

「いいえ、未来に起こる事を言って上げただけよ」

オミクロンが眉をひそめる。自分が憎むコスーム人であるイプシロン。自分より劣る人間。彼女に「負ける」と言われ、不快感を受けたのだろう。いや、誰であっても不快な気持ちになるな。

それよりも、彼女はオミクロンに勝てるのか？ 勝つ自信があるのか？

「さア、始めましょう。死への狂宴を！」

イプシロンは少しジャンプする。それと同時に彼女の周りを紫色の液体が覆う。液体は見る見る内に増えていき、彼女の体を完全に覆い、球状になる。

球状の毒液内に自らを閉じ込めた彼女は僅かに微笑む。球体の中で腕を動かす。すると、球体の一部が変形し、やがて分離する。

「な、何だ？」

分離した毒液は変形と続ける。分離した毒液は更に分離。また分離。そして巨大化と変形を続ける。一体何をしているんだ？

しばらくすると彼女のやろうとしている事が分かってきた。全部で5つの毒液の塊。それらが全て巨大化と変形を続ける理由も。私の中で彼女の言った言葉が蘇る。

——私は全部で5匹の大型生物を作り出せる。彼らは全て私の意思で動く忠実なペット

「ん？ なんだコイツらは？」

オミクロンの前に現れたのは5体の大型生物だった。右から順にカエル、サソリ、ムカデ、ヘビ……アレは飛龍か？

4体の陸上生物と1体の飛行生物。大きな翼を左右に持ち、羽ばたかせる大型生物。間違いなく飛龍の一種だろう。

「ハハハ！ 俺にはこんな連中、ザコ同然だ！ 何しろ俺は691人の力を有しているのだからな！」

そう言うとは彼は消えた。いや違う。そう見えただけだった。一般人の691倍の速度で動いていただけだったのだ。次に現れた時にはカエルが爆発していた。一般人の691倍の速度で動き、691倍のパワーでカエルを殴りつけたのだ。

「ハッハハハ！ ザコがッ！」

カエルは無残にもぐちゃぐちゃになってステージに散らばっていた。アレがゼリー状の毒液で構成されたからよかったものを……もし、アレが普通の魔物だったら見れないだろう。

オミクロンの後ろからはムカデが迫ってくる。彼は少し、後ろを向く。鋭い目がムカデを捉えた。その瞬間爆音。水が破裂するような音。今度はムカデが四散していた。

彼の体に紫色の毒液がへばり付く。私が受けた毒と同じなら彼も

痺れて倒れてしまうだろう。

「クククッハッハッハ！ 次は誰が死ぬんだ！？」

その時、サソリが突進して来る。オミクロンは突き飛ばされ、その場に倒れる。更に追い撃ちとばかりにヘビが近づいて来る。そして口を開き、彼を丸呑みしてしまった。まさか、イプシロンがこのまま勝利してしまうのか？

その時、ヘビが爆発した。お腹の辺りから一気に体全てが吹き飛んだ。

「クウ、やってくれるぜ……」

「……………」

イプシロンは何も言わず、動かずに彼の姿を見ていた。そんな彼女を睨みつけるオミクロン。その体はフラフラとしていた。毒が回って来たのか？ よく見れば彼の呼吸は荒かった。

「死ねッ！」

オミクロンは素早く動き、サソリに拳を繰り出す。水が破裂する音。それに似た音が鳴り響く。サソリの頭部が破壊されていた。頭部を失ったサソリはドロドロに溶けていく。

ドロドロになったサソリ。紫色のゼリーを掻き分けて進むオミクロン。その動きは遅く、フラフラとしていた。

「グウ…… ど、どうなってんだ？ 俺は691人の人間を取り込んだんだ、ぞ……」

彼はその場に膝をつく。その時だった。彼が激しく咳き込み、ド

ス黒い血を大量に吐きだしたのは！ それを見た時、私の背筋にゾクリとしたものが走った。

だが、一番、驚いているのはオミクロン、彼自身だった。口を押えた手についたドス黒い血。紫色の液体と混ざった自分の血。それを見て彼は震えだした。

「ど、どう、なって、俺の、ガッハッ……！」

再び血を吐きだす。しかもその血は最初に吐いた時よりも黒かった。

「アナタが今も触れている毒、さっきから触れている毒。それらは全て私が出せる最強の毒よ。少し触れただけで人を殺せる強毒」

自らを包み込んでいた毒の塊から出てきたイプシロン。彼女はオミクロンの前に立つ。その顔に表情はなく、その目には闇の炎が灯っていた。

「んだ、と……！？ この俺、に耐えられな、い……」

「アナタは691人の人を殺し、691倍のパワー、スピード、治癒力、抵抗力を得た。でも私の毒がそれに勝った。それだけの話よ」

オミクロンはその場に倒れる。それを見たイプシロンはナイフを取り出す。まさか……！

「まだ息があるようね。楽にしてあげるわ」

気を失ったオミクロンの喉に刃を当てる。私は反射的に顔を伏せた。もうこれ以上、見る事は出来なかった。近くの客席から悲鳴が上がる。それが何を意味するのか、容易に想像できた。

ガクガクと体が震える。私の頭にとある光景が横切る。

毒で散々苦しめられたサレファト。彼が私に助けを求める。だが、イプシロンは無視し、ナイフで彼の喉を切り裂く。喉からおびただしい血が噴き出し、彼は息絶える……

ゾクリとした。イヤな汗が流れる。このままだとサレファトは殺される。何とかしないと、今何とかしないとサレファトが殺されてしまう！

でもどうする？ 私に何が出来るんだ？ そんな思いが私の中を駆け巡った。

第35話 大会の狙い

【ステイラルシティ ステイラル防衛軍本部】

ステイラル大会優勝者・イプシロン。

最強にして最凶のパーフェクター・オミクロンを殺し、優勝した彼女は今、私の前にいた。彼女が私を誘ったのだ。あの試合の後、彼女が私の所に来て誘ったのだ。

——私と一緒に来ない？　きっと面白い事になるわよ。

私は彼女に着いて来てしまった。もしかしたらサレファトを助け出せるかも知れないという期待を心に抱きながら。

「賞品が渡されるのはステイラル防衛軍の本部基地。つまり、ここよ」

日が暮れ、辺りは人氣が減り始める。冷たい風が都内を吹き抜けていく。三日月が空に昇り、不気味な雰囲気をかもし出す。

これから何が始まるのか。私の心に不安が横切る。何が起きても対応できるようにあらゆる武器を持ってきた。ハンドガン、サブマシンガン、アサルトソード、ハンドボム、魔法発生装置。大丈夫だ。絶対、大丈夫だ。

「顔色悪いケド、大丈夫かしら？」

「……………！　大丈夫だ！　さっさと行くぞ」

「……………そう」

イプシロンが歩き始める。私はその斜め後ろから追うようにして

本部基地に入って行った。これが私の人生の大きな節目になるとは知らずに。

【ステイラル防衛軍本部】

豪勢な本部基地。それが私の第一印象だった。床は赤いカーペツト。天井にはシャンデリア。壁にはバラなどのステンドグラスや壁画。

私と優勝者イプシロンを案内するのは大会の最高責任者を名乗る男。彼はチョイスと名乗る。彼の横には大会で実況していた女性アナウンサーもいた。

「それではここでお待ちください」

私たちが案内された部屋は広い部屋だった。私たちが入ってきた扉と対称の位置にもう1つの扉。私から見て部屋の左側の壁には大きなステンドグラス。外に通じているのか？

しばらくすると私たちの先にある扉が開く。アサルトライフルを持った大勢の兵士。ステイラル防衛軍の兵士だ。その中心にいるのは……！

「……………！ パトラーさん！」

中心にいたのはサレファトだった。彼は目を見開き、驚いたような表情をしている。それはそうだろうな。まさか、私がここに来るとは思っていなかっただろう。

「くゥ、なんで…… まさか、パトラーさんが優勝者……！」
「優勝したのは私じゃない」

「え？ あ、いや、でも……」
「……………」

サレファトの様子が少しおかしい。何か、動揺している感じだった。何かあったのか？

私はふと、周りを見る。いつの間にかステイラル防衛兵が私たちを取り囲んでいた。……“賞品”の引き渡してそんなに危険なのか？

「さて、優勝者イプシロンさん。アナタに……」

「パトラーさん！ 逃げて下さい！！」

「は？」

一瞬、彼の言っている事の意味が分からなかった。逃げて？ 誰から？ 何から、だ？

サレファトを取り囲んでいたステイラル防衛兵が彼を取り押さえる。私はさっと、周りを見渡す。取り囲んでいたステイラル防衛兵が銃口をこっちに向けていた！

「動くな！」

「貴様ら全員をこの場で拘束する！」

……………！！？ どうなっているんだ！？ なぜ私たちまで！？

「サレファトも、大会優勝者である私も“売る”んでしょ？ アポカリプス大陸に」

「な、なにッ！？ なぜ、貴様そんな事も知っているんだ！？」

は？ は？ は？ 売る？ アポカリプス大陸に！？ 何言っているんだ！？ イプシロンは知っていたのか！？

早くも私の頭は混乱を始めていた。ただ1つだけ分かった事は今、私もイプシロンもサレファトも窮地に陥っている、それだけはよく分かった。

「フフフ、実力高い毒のパーフェクターとコスーム人2名。これら3名をアポカリプス大陸に売れば莫大なおカネが我らがタイラント様に入ってきますからねえ」

大会責任者のチョイスがニヤニヤしながら言ってくる。そうか、そういう事か。この大会は実力の高い人間を探し出す為の大会だったのか！

「さア、テメエらは奴隷として生きろ！ タイラント様のおカネとなるのだ！ この手柄で私の地位は盤石なモノとなるのだ！！」

チョイスが狂ったような笑い声を上げる。クソッ！ ふざけやがって！ お前やタイラントの為に私たちを犠牲にするのか！ 絶対にそうはさせないッ！

「さア、2名を拘束しろ！ ステイラル防衛師団！」
「イエッサー！」

ステイラル防衛兵が私たちに向かってくる。その手にはスタンロッド。銃を使わないところを見ると傷つけたくはない、という事か。私はサブマシンガンを取り出す。絶対にお前たち、腐った政府関係者のおカネにはならない！ 何としてでもここから逃げてみせる！

「捕えろ！」

「たかが女2人だ！」

「喰らえッ！」

一瞬、引き金を引くかどうか迷った。でもここは戦場。殺らなければこっちが殺られる。いや、殺されはしないが最悪の運命を辿る事になる。私はそんなのはイヤだ！

「死んでも後悔するなよ！」

私は引き金を引いた。銃の反動が手を伝^{つた}う。激しい銃撃音が鳴り響き、銃口が火を噴き、おびただしい数の弾が飛ぶ。数人の兵士が胸や腹から血を噴いて倒れる。

「な、なにッ！？　なぜ、サブマシンガンを！？　違法じゃねえか！！」

「残念だったな。私は元政府軍人だ！」

私は次々と近づいてくる兵士に向かって発砲する。

スタンロッドを使い、私を気絶させようと考えている兵士達。その為には近づかなければならない。必ず近距離戦になる。だから近づかれる前に倒す。私に指一本触れさせない！

「ぐエッ！」

「ギャアッ！」

別の方向から兵士の叫び声上がる。私はそっちの方に目を向ける。そっちではイプシロンが戦っていた。紫色の毒液が全くないのを見ると魔法発生装置で戦っているのだろう。

「コイツ、魔法発生装置を！」

「ええ、そうよ。パーフェクターだからと言って使わない、なんて事はないわよ？」

私は数名の兵士を撃ち倒すとサレファトの下に向かう。そこには
チョイスと大勢の兵士達。私は再びサブマシンガンの銃口を向け、
発砲した。耳を塞ぎたくなるような銃撃音。それを共に兵士が血を
噴き上げ、倒れていく。

「邪魔だ！」

「グエツ！」

「グアッ！」

サレファトを取り押さえている兵士を倒し、私はサレファトを拘束している手錠に触れる。普通の手錠…… 彼が“電気のパーフェクター”である事はバレていないようだ。もし、バレているのだしたら魔法能力を抑える手錠を使ったはずだ。

私は彼の手錠を撃ち壊す。ハンドガンを使えば一発だった。

「あ、ありがとうございます！」

「ここから絶対に逃げるぞ！」

「もちろんです！」

サレファトは大勢の兵士に向かって電撃を放つ。眩しい光と共に大勢の兵士の悲鳴が上がる。

ステイラル防衛師団本部。その建物のある部屋で誰も考えもしなかった戦闘行為が始まった！

第36話 逃走!

部屋に鳴り響いた電気の音。大勢の兵士が倒れる。

「ど、どうなってんだ!? まさかアイツ、パーフェクターなんじゃないのか!?」

チョイスが驚いたような表情で言う。やはり、気づいてなかったか。サレファトをただの子供としか思ってなかったようだ。だが、それは間違い。彼は電気のパーフェクター。つまり、イプシロンと同じパーフェクターだ。

「くそオ! 女子供すら捕まえられんのかア! ゴミのような人間3人だぞ!」

「し、しかし、パーフェクター2名に元軍人となつては……!」
「ええい、数で勝負だ! 本部基地の兵をこの部屋に集めろ!」

チョイスが叫ぶ。計画が狂い相当焦っているようだ。だが、このままでは私たちはいつか負ける。数で勝負されると私たちはいつか負ける。だったら勝つ道は……!

「イプシロン、サレファト、こつちだ!」

私はこの部屋にある唯一のステンドグラスに向かって走る。ステンドグラスを撃ちながら…… 一か八か、やるしかない! ステンドグラスが音を立てて割れる。美しいガラスは粉々になっていく。ステンドグラスの先には夜のステイラル防衛本部。

「アイツ、飛び降り自殺するつもりか! イイぞ! やれやれ!

剥製にして売ったるわ！」

誰が死ぬか！ 私は逃げるんだぞ！ お前たちの思惑通りにはならない！

私は割れたステンドグラスから夜の防衛本部基地に飛び出す。たちまち、降下し始める体。このまま落ちればチョイスの言うとおり飛び降り自殺になる。私は魔法発生装置で強力なシールドを張る。これで無傷で着地できる。

着地地点を見れば多くの兵士が走っていた。私はサブマシンガンの銃口を下に向け、発砲する。数人の兵士が倒れ、他の兵士は突然の発砲に混乱を起こす。

「な、何だ！？」

「邪魔だ！」

私は着地と共に周囲の兵士に向かって発砲する。彼らは悲鳴を上げながら次々と倒れていく。それとほぼ同時にイプシロンとサレフアトも着地する。

上を見ればチョイスが私たちを睨みながら叫んでいた。でも気にしている暇はない。今はここから逃げる事が最優先だ。

「こ、これからどうしますか！？」

「ヘリを奪って逃走する」

「だったらまずはヘリポートに向かうのがいいでしょうね」

「分かってる。ここもすぐに兵士が集まってくる。すぐに向かおう」

私がそう言うといプシロンが先行して走り始めた。着いて来いという事か。彼女は知っているのだろう。ヘリポートの位置も。

「貴様らァ！ 逃げれると思うなよォ！ ステイラル大会最高責任

者の名においてお前たちを必ずとっ捕まえてみせるわ!」

しばらく外を走っていると前方に10名ほどの兵士。彼らは私たちを見つけるとアサルトライフルの銃口を向ける。発砲許可が出たのか?

「喰らえ!」

「反逆者共が!」

私たちは強力なシールド張っているから銃弾を喰らっても大きなダメージはないがそれでも弾が当たると痛い。目に当たったら失明は確実だろう。シールドを張っていても油断は出来ない。

「死にたくなかったら道を開けろ!」

「バカが! 誰が道を開けるものか!」

彼はそう言うのと発砲してくる。シールドに防弾コート。銃弾による攻撃はほぼ無い。顔に弾が当たらないように気をつければ問題ない。

私は魔法発生装置を取り出す。それを使い、衝撃弾を飛ばす。兵士の1人が吹っ飛ばされる。彼には目もくれず他の兵士に向けて衝撃弾を飛ばしていく。

「どけッ!」

「僕に任せて下さいッ! “エレキハンドガン”!」

サレファトが突然、私の前に立つ。彼は人差し指の指先を兵士に向け、電気の弾を撃つ。その動きは早くあっという間に残りの兵士を倒してしまう。

普通の銃と違って一応魔法攻撃だからリロード（弾薬補充）の必要もなく、きつと連続で撃てるのだろう。

「早く行こう。ヤツらが押し寄せてくるわ」

「ああ、そうだな」

私たちは再び走り出す。ヘリポートでヘリを奪い、本部基地から逃げる。ステイラルシティから出ればなんとか落ち着けるだろう。と言ってもすぐに追手がやって来るかもしれないが。

「アレよ。ヘリポートは」

イプシロンの指差す方向に広いコンクリートのヘリポート。そこにはヘリが4機。その近くには警備兵が……

「来たぞ！」

「援軍の到着まで持ちこたえろ！」

私は魔法発生装置を取り出す。下手にサブマシンガンやハンドガンを使ったらヘリを傷つけてしまうかも知れない。だから魔法発生装置で1人ずつ倒していくしかない。

「どきなさい」

無表情のまま言い放つイプシロン。彼女の右手には球状をした毒の塊。彼女はそれを投げる。投げた方向には兵士。その兵士の胸に当たる。

「バカめ！　俺たちは装甲服で守られているのだ！　毒玉など効かんわ！」

「……………！」

「だったら僕が！ “エレキハンドガン”！」

サレファトの指先から電気の弾が飛び、それが兵士の胸に直撃する。その兵士はその場に倒れ、激しくのた打ち回る。そうか電気の弾だけに痺れさせる事も可能なのか。

「グアッ！」

「撃て、撃てッ！」

「ギャアアッ！」

声のする方向を振り返ればイプシロンが戦っていた。その手にはあの携帯端末。彼女はそれを使い、魔法攻撃を行っていた。衝撃弾、火炎弾、電撃弾…… それらが飛び、兵士を次々と倒していく。

「へりは頂くわ。アナタ達は任務失敗の報告をすればいいのよ」

そう言うとな彼女は近くのへりに入っていく。いや、入って行くこうとした。なぜ入らなかったのか。それは上空から大型の“生物兵器”が現れたからだった！

第37話 脱出

夜の空に浮かぶ“ソレ”は生物兵器だった。魔物ランフォリンクスを機械化して作り出された軍用の生物兵器。

ランフォリンクスは私が予選で戦った魔物でもあった。あの大きな翼を持つ大型の翼竜。私が苦戦した相手。それを改造して作り出されたのがコイツ。

「翼撃機ランフォリンクス」ね。国際政府の特殊軍が開発・製造した生物兵器」

クッ……！ あと少しで逃げれるのに……！

だが、コイツを倒さないと逃げる事は出来ない。なぜなら、コイツを残したままヘリで空中に飛んでも叩き落されるのがオチだ。いや、叩き落としてはしないかも知れないが、空中だったらコイツの方が圧倒的に有利だ。

「仕方ない、コイツを瞬殺してヘリに乗り込むぞ！」

私はサブマシンガンの銃口を翼撃機ランフォリンクスに向ける。赤いスコوپライトがソイツの眉間を照らす。

「喰らえェッ！」

引き金を引き、ヤツの頭めがけて発砲する。銃口から火を噴き、弾が飛ぶ。それらはヤツの頭に当たり、火花を散らす。

普通の魔物だったら頭に当たったら相当のダメージを与えられるし、怯んでくれる。だが、コイツはもはや機械。装甲によって防がれ、ダメージ量は少なく、怯む事はない。

「反乱者共！」

「ただちに降伏せよ！」

「……………」

私は後ろから聞こえてきた声に振り向く。思った通り、ステイラル防衛師団の兵士達がいた。もう追いついて来たのか！　後ろに兵士。前方には翼撃機ランフォリンクス。挟み撃ちだ！

「“ランフォ”は僕に任せてッ！　“サンダー”！　“エレキロケツトランチャー”！！！」

一本の雷。その後には巨大な電気の槍が彼の腕から飛び、翼撃機ランフォリンクスの胸に直撃する。ヤツは苦しそうな声を上げ、空中をのた打ち回る。

私はそれだけ見ると兵士の方を向く。アサルトライフルを持った兵士。ショットガンを持った兵士。その数は合計して20名くらいだろうか。もっと後ろを見れば魔法シールドと呼ばれる盾を持って走って来る兵士までも。

「捕まってたまるかッ！」

私はハンドボムを投げる。多数の敵が相手の時は爆発系の武器を使った方がいい。爆発で一気に吹き飛ばす。それが一番だと思う。

ハンドボムは兵士が集まっている所に落ちる。それを見た兵士達は慌ててそれから遠ざかるが、もう遅い。それは爆発する。爆発し、お腹に響く轟音と共に数人の兵士が吹っ飛ぶ。

「ぐアッ！」

「ク、クソッ！」

私は生き残った兵士の下に駆け寄り、間髪入れずに彼を殴り倒す。そして落ちているアサルトライフルを奪い取る。

別の兵士達がやって来る。その手には蒼色の魔法シールドとアサルトライフル。

「クッ、やっかいな敵だな……」

魔法シールドを使われるとアサルトライフルやサブマシンガンの銃弾を防がれる。魔法発生装置による攻撃も同じだ。

私はもう一度、ハンドボムを投げる。火と煙。それらが炸裂し、また兵士が吹き飛ばされる。でも、もうハンドボムは2つしかない。後、2回使えばもうなくなってしまう。

「パトラーさん、早くヘリに！ ランフォは倒しました！」

ランフォって何で略してんだ？ いや、今はそんな事どうでもいい。それよりもヤツが倒れたのならもうヘリで飛べる。

「よし、行くぞ！」

「はいッ！」

サレファトと私はヘリに飛び乗る。運転席にはイプシロンが乗っていた。(いつの間に?) 彼女は素早くパネルをタッチしたりレバーを引いたりし、ヘリを動かし始める。

私はヘリのドアから奪ったアサルトライフルで追って来る兵士を銃撃していく。兵士に乗り込まれてたまるか！

「ぐエッ！」

「ギャアッ！」

「撃てエッ！ 奴らを捕えろ！」

強い風と共にヘリが地面から離れる。私はそれでも銃撃の手を休めず追って来る兵士を撃ち続ける。ヘリと地面の距離は離れる。もう大丈夫か？ さすがにこれだけ離れれば飛び乗ってくるヤツはいないだろう。

私はアサルトライフルの銃口を下げる。

「よし、なんとか……」

そこまで言った時、私の左脚に銃弾が当たった――！

「……………！！」

第38話 世界の敵に

「うッアッ！」

何かが落ちる音。その後にパトラーさんの苦しそうな声。その声に僕は驚き、彼女の方を見る。彼女は脚を押さえて倒れ込む。押さえている左脚のすね。黒いブーツで覆われたすね。そこから血が流れ出していた。

「パ、パトラーさん！？」

「クッ、アッ……！」

彼女は苦痛に顔を歪める。銃弾が当たったのか？ でも彼女は魔法発生装置でシールドを張っていたはず。なんで喰らったんだ？

その時、彼女の魔法発生装置が床に転がる。スタンロッド型の魔法発生装置が。それに表示されている数値は「0」を示していた。彼女は気づかなかったんだ。銃撃を受けている間に魔法発生装置のエネルギーが切れ、シールドが消えた事に！

「グウッ、クッ！」

ど、どうしよう…… 何とかしないといけないのは分かる。でも僕にはどうしようも出来ない。せめて魔法発生装置があと1個あったら彼女の痛みを和らげる事が出来るだろうに。

何かないかと見回している時、外の景色が視界に入った。ヘリが3機、僕らを追いかけていた。きつとあのヘリポートに停めてあった他のヘリだ。僕らを捕まえようと追って来たんだ。

「ただちに降伏しろ！ 国際政府に逆らう反乱者共！」

ヤバい！ ヤバい！ ヤバい！ 僕はどうすればいいんだ！ ヘリ内には苦しむパトラーさん。外には政府のヘリが3つ！

大人しく降伏すれば殺されはしないだろうか？ いや、そんな保証はどこにもない。それに降伏しても僕らは売られる。コスーム人を憎むアポカリプス大陸の人間に。売られればどうなるか分からないケド、きっといい未来は待っていない。

「ク、クウ、捕まって、たまるか！」

「貴様ら3名で何が出来るッ！ 大人しく降伏せよ！」
「クッ、“エレキロケットランチャー”！」

僕は右腕を突き出し、ヘリを目がけて電気のロケット弾を撃ち込む。それは一直線に飛び、先頭のヘリに直撃する。ヘリは眩しい炎を上げ、爆発する。破片が辺りに飛び散る。

爆発を見た他のヘリは突然、向きを変え、逃げ始める。さっきの攻撃で怯んだのだろう。

「……何とか、逃げ切れそうですね」

僕はパトラーさんの方向を向いて言う。彼女はまだ脚を押さえていた。押さえている所からはおびただしい血。一部、乾いて茶色く変色しているのもあった。

「逃げて、その後が問題だ」

「え？ どういう意味ですか？」

「理由はどうあれ、私たちは国際政府に逆らった反逆者だ」

は、反逆者……！ そこまでは考えてなかった。

「お前も私も、な」

僕らはコスーム大陸を支配する国際政府の敵。もっと言えば世界の敵になってしまったんだ。

……僕は元々、政府と敵対する組織・財閥連合の幹部。ぶっちゃけ昔から反逆者だ。財閥連合の幹部として政府と戦った事もある。だから反逆者となったのは今じゃない。

でもパトラーさんやあの知らない女性（イプシロンさん、だっけ？）も反逆者に……

「……ごめんなさい」

「別に、謝る必要はない。アイツらに逆らったのは私の意思だ」

「でも…… 僕と一緒にあの街に行かなかったら」

「あの街に行ったのも大会に参加したのも全部、私の意思でやった事だ」

そう言うパトラーさんは撃ち抜かれた脚を押さえながら近くの座席に移動する。

こんな時、なんて言えいいんだろうか？ 最初は政府の軍人だったのに今は政府に逆らう反逆者。僕は彼女の事をよく知っている。僕の所属していた財閥連合という一大組織が減ぶ前から。

彼女は政府の軍人で政府の味方。仲間を大切にする人だった。そんな人が今や政府の反逆者で政府の敵……

「イプシロン、今、どこに向かっている？」

「……コスーム大陸北のシリオード大陸」

「シリオード大陸だと？」

シリオード大陸？ 確かコスーム大陸の北に位置する大陸で陸地全てが氷に覆われている大陸。一年中、雪が吹雪く冬の大陸。それ

が僕の知っているシリオード大陸だ。僕らはその地に向かっているのか？

「何でシリオード大陸に向かっているんだ？」

「安全だからよ。そこの方が」

「安全？ 確かにコスーム大陸は危険だが……」

「タイラントは国際政府前総帥の息子。その“力”で私たちを探し出そうとするわ。……国中の警備軍や特殊軍を使って」

タイラントって確か、ステイラルシティの長官の名前だ。まさか、国際政府前総帥の息子だったなんて……

もう僕らは政府の敵。今まで守ってくれた政府は僕らの敵。この日、僕らは世界の敵になった――

第39話 シリオード大陸にて

【国際政府首都グリードシティ 軍事総本部】

従わぬのならば殺してしまえ――

国際政府に逆らったパトラー、サレファト、イプシロン。3人は世界の敵。討ち滅ぼされるべき敵。生きてはいけない存在。掃討しろ、国際政府。絶対的な正義な名の下に！

「国際政府総帥・ダイレイ閣下は昨夜未明、政府特殊軍率いるレイズ長官を“第2反乱者討伐長官”に任命しました。レイズ長官は「逃走を続ける反乱者の身柄を確保・処刑する」と発表。同長官はファルガ將軍を北の……」

第2反乱者……

ステイラルシティから脱出を図ったパトラー、サレファト、イプシロン。パトラーの敬愛するフィルド。この4人の討伐に動きだした国際政府。

残酷な運命は4人を追い詰め始める。国際政府に敵視されれば世界に敵視される。強大な力によって討ち滅ぼされる。

殺されたくなければ殺してしまえ。殺されたくなければ国際政府を滅ぼし、人間の社会を壊してしまえ――

*

真っ白な世界。上も下も真っ白な世界。冷たい世界。絶えず雪が降り注ぐ世界。極寒の大陸。僕らはシリオード大陸にやって来た。政府の追撃を逃れる為、安全な地を求めて。

しかし、ここは安全なのだろうか？ 確かにこんな所までは政府は追って来ないだろう。だけど、ここは環境が厳しすぎる。

「ほとんど人のいない大陸、シリオード大陸。ここも安全じゃないわね」

「ここはここで危険というワケか」

絶えず激しく降り続ける雪。こんな所にいたら間違いなく凍死する。それにこの大陸にも魔物がいる。人が討伐しないから魔物はたくさんいる。彼らに殺されないようにしないといけない。

「一応、シリオード大陸にも人の住む所があるらしいからそこを目指して歩けばいいわ」

イブシロンさんがヘリのドアをこじ開け、そこから出て行く。

僕らをここまで乗せてくれたヘリはこの大陸のとある所で不時着した。きっとエネルギーが0になったのだろう。ここからは自分で歩かなければいけない。人のいる所まで。

「お、オイ、どこ行くんだ？」

「私は1人で行かせて貰う。あとは適当に頑張りなさい。ここでアナタ達とは別れるわ」

それだけ言うとな彼女は自分の周囲にシールドを張り、ここから去って行った。僕らはそんな彼女の背中を只々（ただただ）、見ていくだけだった。

「ど、どうしましょうか？」

「……どこか、人のいる所に行くしかなさそうだな」

「でも、そんな所、あるんですか？」

「なければここで死、だ。あっても辿りつけなければ死」

そう言うとパトラーさんはヘリから白色の極寒世界に飛び降りる。彼女の頭や肩に早くも雪が付く。僕も同じように外に飛び出る。出るまで分からなかったけど、むちゃくちゃ寒い。いや、冷気がもはや痛いと感じた。

「クッ！ 寒すぎる……！」

「行くぞ、サレファト」

パトラーさんは自分の膝まである雪を掻き分けながら歩き始める。僕もその後について行く。

口から出る息が白い。呼吸し、体内に入ってくる冷気がとても冷たい。コスーム大陸では絶対にありえない環境だった。パトラーさんと再会したコールド地方もとても寒いケド、ここは比にならないくらい寒い。こういう所を極寒地獄というのかも知れないな。

「ハア、ハア、うウ…… 寒くて体が凍りそうです」

「無駄口叩く暇があったら歩け」

「……………？ アレ、何ですか？」

僕は確かに見た。パトラーさんの進む先に何かがいるのを人型の何か。

「……………！」

ソイツは細く長いロープのような物を使い、それをパトラーさん

の右腕に巻き付ける。……白いロープ？

「な、何だこれは？ クッ、そこにいるのは誰だ！」

応答はない。ソレが近づいてくる。パトラーさんが左手でサブマシンガンを取り出す。相手は魔物か、人間か。一体どっちなんだ？ 雪のせいで正体が分からない。

その時、もう一本の細長いロープが飛んでくる。それが僕の腕に巻き付く。飛ばしているのは間違いなくアイツだ。

「クッ、離セッ！」

パトラーさんがサブマシンガンを使い、謎の相手に向けて発砲する。銃口が火を噴き、何度も弾を放つ。それらが謎の相手を撃ち抜く。

撃っちゃっていいのか！？ もしアレが人間だったら…… いや、違う。アレは人間じゃない。触手型魔物・スノウプランツだ。倒れる時、分かった。ソイツの頭部は花で出来ていた！

「さっそく魔物か。でも所詮はザコモンスター。ワケない」

そう言いながらパトラーさんは腕に巻き付いた触手を振り払う。あの程度の魔物ならコスーム大陸にもいた。別にシリオード大陸固有の魔物というワケではない。

……僕が最初に見たのはあのオーロラ支部の近くだったな。僕がまだ姉さんと一緒に財閥連合に入ったばかりの……

「サレファト！ 伏せろ！」

「え？」

その瞬間、僕の背中に激痛が走った――

第40話 誰もいない大陸

巨大な人間……じゃない。アレは魔物の一種だな。長い爪を持った人間型の魔物・ヤシャ。これは私が政府に所属している時に知った魔物だ。シリオード大陸のみに生息する強力な魔物。長い爪で相手を斬り、ズタズタにして獲物を食べるらしい。おお、怖いな。

「ゴオオオ……!!」

ヤシャは血の付いた爪をサレファトに向け、突き刺そうとする。彼は氣を失ったのか、ピクリとも動かない。

クツ、世話ばかりかけるヤツだ。私が“また”助けないといけないのか？ ウォーズダスト、ステイラルシテイ、そしてシリオード大陸。これで彼を救うのは3度目だぞ？

彼を見捨てる事ぐらい簡単だった。ヤシャが彼を食べている間に逃げれば私は確実に助かった。でもそれが私には出来なかった。殺されるのを黙って見ている事が出来なかった。

「サレファトに、触れるな!」

私はサブマシングンの銃口をヤシャに向け、発砲する。白い毛皮で覆われたヤシャの肩が、胸が、腹が血を噴く。

ヤシャは私の攻撃に怯む。その隙について私はアサルトソードで頭を突く。頭部から血を噴き、倒れるヤシャ。

どんな生命体だろうと頭をやれば倒れる。それはシリオード大陸の魔物だろうと変わりはない。

「サレファト! だいじょ……!!」

大丈夫、なワケなかった。背中から流れ出るおびただしい血。挟まれた皮膚。その傷に覆う雪。それが彼の傷に染み込んでいく。彼を抱きかかえる。私の手やコートに血が付着する。私は政府から支給された防御コートを着ているからこの寒さも耐えられる。でも彼は普通の服。長袖の冬服だがその程度の服ではシリオード大陸で行動できない。すぐに体温を奪われ、凍死するだろう。それに加えてこの傷。早く何とかしないと本当に死んでしまう。

「全く、電気のパーフェクターなのに普通の人間である私に助けられてばっかじゃないか！ 普通は逆じゃないのか？」

私は彼を抱きかかえて走る。腕に血が付き、ポタポタと流れ落ちる。これは相当酷い。早くなんとかしてやらないと……！

でも辺りは雪の、極寒の世界。人間の住んでいる所なんて全く見当たらない。私は仕方なく近くの森に入る。

森の中。私は大きな木の下にサレファトを仰向けに寝かせる。本来なら魔法発生装置を使って治した方がいいのだが、魔法発生装置は2つ共使い切ってしまった。1本はステイラルシティから逃げる時に、もう1本は私の脚を治す時に使ってしまったのだ。残っているエネルギーはほんの僅かしかない。

「……“ケア”！」

魔法発生装置から蒼色の光の弾が飛び、彼の背中に当たる。これで全てのエネルギーを使ってしまった。でも彼の傷はかなりよくなった。……それでも完治はしなかったが。

私はふと空を見上げる。薄暗くなり始めていた。寒さが本格的に酷くなってくる。防御コートを着ている私でも耐えられるかどうか分からない。

シリオード大陸の冬の夜。それが間もなくやって来る。そうなれば彼は間違いなく凍死する。

「どうすればいい……?」

私は彼を後ろから抱きしめる。少しでも体温を逃がさないように、少しでも温まるように。でもこれではダメだ。これでは夜を乗り越えられない。

もう時間もない。どうする? どうする? どうする? どうすればいいんだ!

「……ね、え……さん」

「サレファト?」

私はサレファトを抱きしめながら彼に呼びかける。だが、彼から返答はなかった。

そういえばコイツには姉のサルリファスがいたはずだ。彼の姉サルリファスは時間と空間のパーフエクター。彼女はどこに行ったんだ?

私は彼と出会ってから今に至るまでを思い返す。コールド地方、ウォーズダスト、ステイラルシティ、シリオード大陸……

彼と彼女が一緒にいる場面は一度もなかった。そして、彼自身、姉の事については一度も話さなかった。

「……すまん」

私はサレファトのポケットに手を入れる。いい大人が少年に抱き付き、その上、勝手にポケットに手を入れるなんて周りから見ればただの変態としか見られないのかも知れないな。……ここには誰もいないからその心配は無用なのだが。

私は彼のポケットから1つのハンドガンを取り出す。

「……財閥連合、サルリファス……？」

ハンドガンにそう書かれていた。という事はこれはサルリファスのハンドガンなのか……？　なんで彼が彼女のハンドガンを持っているんだ？

その時、強い風が吹く。とても冷たい風が。私はつい彼を抱きしめる腕に力を入れてしまう。

「そ、そうだ。今はこんな事を考えている場合じゃないな……」

私は彼を抱き上げると薄暗い雪の世界を歩き始める。寒さで手が震え、指先の感覚がなくなってくる。一応、手には防護用の白い手袋をつけているのだが……

「クッ、誰か……　誰か」

いるはずもない人間。こんな大陸に住むのはごく少数の人間。彼らに出会うなんて奇跡でも起こらないと無理だ。

私はサレファトを抱きかかえ、やみくもに走る。誰もいない。寂しい、怖い。このままじゃ彼が死ぬ。いや、私もきっと死んでしまう。誰か、誰か助けて！

吹雪く残酷で過酷な世界。冷たさは無限大。誰もいない世界。誰も助けてくれない。人で溢れ返っているコスーム大陸とは全く違う。それがシリオード大陸だった。

冷たく厳しい大陸、シリオード――

第41話 小さな洞窟で

小さな洞窟の中。なんとか私はここまで辿り着いた。ここなら寒さをしのげるだろう。なにしろ冷たい風が当たらないからな。

私は洞窟の一番奥でサレファトを静かに寝かせる。洞窟の一番奥と言っても出入り口からそんなに遠くはないが。

「これでなんとかなる……よな？」

洞窟の外は既に真っ暗になっていた。激しく強い風が吹き荒れ、全てを殺す無慈悲な風が吹き続けていた。

イプシロンはどうしただろうか？　ヘリで別れてから全く見てない。彼女は生きている、と思うが、彼女は一応、人間だ。防御に特化した能力はない。あるのは攻撃に特化した毒の能力だけ。

「姉さ、ん……」

サルリファス。お前はどこにいるんだ？　なんで弟と一緒にいてやらない？　どこで何をしているんだ？　コールド地方、ウォーズダスト、ステイラルシティ。お前の弟は何度も危険な目に合っているんだぞ。

「サレファト……」

私は再びサレファトを抱きしめる。彼が寒くないように。少しでも温まるように。私は彼を抱きしめたまま、洞窟の奥に寝転がる。彼の静かで小さな鼓動が手の平を介して伝わってきた。

＊

……………。

洞窟の出入り口から射し込む光。朝、か。

ぼんやりする頭。私の腕に抱かれるのはサレファト。そうだ。私は昨日サレファトを抱きしめたまま寝てしまったんだ。

「サレファト、サレファト！」

私は彼から腕を離し、彼を揺さぶりながら、大きな呼びかける。

「ん、パトラー、さん？」

ゆっくりと開かれる彼の目。よかった。彼は生きていた！正直、死んでしまふんじゃないかと思っていた。背中のだメージと夜の寒さで。でも彼は生きた。今、こうして会話が出来る！

「こ、ここは……？」

サレファトは目を擦りながら辺りを見回す。

「ここはシリオード大陸。それは分かるよな？ そのシリオード大陸の雪原にある小さな洞窟だ」

「シリオードの、洞窟……」

彼はそれだけ呟くように小さな声で言う。そこからしばらくの間、無言の状態が続く。が、突然、サレファトが口を開き、喋り始めた。

「……パトラーさんが僕を助けてくれたんですね」

「なんで分かるんだ？」

彼は私に抱きかかえられていた。その時、彼は間違いなく気を失っていたはずだ。それなのに、何で分かったんだ？ そんな私の疑問に答えるようにして彼は語り始めた。

「意識はなかったケド、誰かに抱かれている感覚はあったんです。僕を温めてくれていたんですよね。あの寒さから僕を守ってくれていたんですね」

そう言うサレファトの目から僅かに涙が流れる。

「ウォーズダストの時も助けてくれて、ステイラルシティの時も……あの街で捕えられていた時、本当に怖かったです！ 誰かの奴隷になんてなりたくなかったんです！ 怖くて怖くて、何度も死ぬのと考えました！ 誰かの奴隷になるなんてイヤ、死んだ方がマシ。何度もそう思いました！ でも死ぬのも怖くて出来なかった……生きるのも怖いし死ぬのも怖い。本当に気が狂いそうでした！」

僅かな量だった涙は次第に大粒の涙になる。サレファトの体は震えていた。

「でもパトラーさんは僕を助けてくれました。本当に嬉しかった！ 本当によかった！」

ステイラルシティの監獄に入れられ、お前は奴隷だ、と言われたら私はどんな気持ちになるだろうか？ きつと絶望の淵に追い込まれる。彼と同じように死を考えるかも知れない。でも私も死ぬのはイヤだ。絶対に死にたくない。

延命は奴隷。奴隷は延命。死は解放。解放は死。

私は気が狂っていたかも知れない。怖さに耐えきれず心が壊れてしまっていたかも知れない。

「……ぼ、僕を助けてくれて、本当に有難う御座います！」

彼は泣きながら、でも笑顔で私にそう言った。



【シリオード大陸 とある街】

私達に安全な地はどこにもない。例え、コスーム大陸を出たとしても国際政府の手を逃れる事は出来ない。世界の果てまでも奴らは追って来る。

「全部…隊…に通…ファル…ガ將軍…の命令に、従い…」

パトラー、サレファト。2人はまだ生きているかしらね？ 生きていても捕まってるかも知れないわね。サレファトはともかく、パトラーは……

「特にパト、ラ……は、元政府、軍人……がしては……らない」

私は今、軍の通信を盗聴している。そこから得た情報。それは少ない。分かった事といえば、この地に国政府の特殊軍がやって来ている事。その軍の指揮官がファルガ將軍だという事。それくらいしか分からない。

冷たく、人の少ないこの大陸にも国際政府の力は及ぶ。私達が助

かるには……殺すしかない。“国際政府を殺す”しかない。つまり、
“国際政府を滅ぼす”しかないのかも知れない……

「国際……府の威信に、かけ、反乱者……を捕え、よ」

第42話 1人5万〓2人10万

【シリオード大陸 とある雪原】

今日こそはどこか人のいる所を見つけないかならない。夜になれば再び気温は下がり、この地は極寒地獄と化す。そうなれば凍死するだろう。

ではあの洞窟にいればいいじゃないか。私は一瞬だけそう思った。しかし、あの洞窟にいたら凍死はないとしても、今度は飢え死にする。私もサレファトも食料は何も持っていないからな。

どちらにしろ、人のいる所を見つけないと最終的には死んでしまふんだ。

「も、もうすぐ、夜、じゃないですか？　なんか、暗くなって、きまし、たし……」

私に背負われているサレファトが小さな声で言った。クツ、なんでコイツを私が……　彼は洞窟を出てすぐに動けなくなった。寒さと昨日のケガで体力をほとんど失ってしまったからだろう。

私は寒さをも防ぐ服を着ているからある程度はマシ。しかし、彼は普通の服。この寒さをしのげるハズもなく、寒さは私よりも強く感じてしまうだろう。

「クウ、寒い、う、ウ……」

私を抱きしめる彼の腕の力がより一層強まる。その体は震え続ける。薄暗くなってきた、寒さが激しくなってきた。クソッ……　私も、もう体力が……！

その時、私の、いや、私たちの前から何かが近づいてきた。魔物

？ いや、車？ ……飛行型の車だ！ その車は地面スレスレの所を飛びながら進む。

「あ、アレ、誰か」

「オイ！ コッチだ！ コッチに来てくれ！！」

私は声を張り上げ、助けを求める。その声が聞こえたのか、それとも私達の姿が見えたのか、車はコッチに近づいてくる。

車は私達のすぐ近くに止まり、扉が開かれ、中から人が降りてくる。

「……珍しい格好をした者だな。何者かね？ いや、そんな事はいい。見た感じ、助けて欲しいようだな」

「……………！？ 何で分かった？ いや、今はそんな事はどうでもいいか。とにかくこの状況を何とかしないと。」

「ああ、道に迷っているんだ。できたら街に連れて行ってくれないか」

「構わんとも。ただし、“おカネ”はたっぷりと頂くぞ」

「は？」

おカネ？ おカネって物を売り買いする時に使われるアレの事、か？

「我々も生活が苦しいのでな。そうだな、1人5万は頂こうか」

「ご、5万！？」

私とサレファトで10万も取るのか！？ 何なんだ！ こいつらは！ おカネの亡者か！？

車から降りてきた男たちは困惑する私を見て、ニヤニヤと気持ち悪い表情を浮かべる。

「フッフ、不満かね？ 不満なら別に払わなくてもいいんだぞ？ 払わなかったら凍死するだけだな」

クソッ、足元見やがって！ でも、払わなければ、死。死にたくなかったら10万出せて事か。命とおカネ。大事なのは言うまでもなく命だ。私はゴクリと唾を飲み込み、言った。

「わ、分かったよ。10万、今は持っていないケド、後で払うから！」
「よし、大儲けだぜ…… 乗りな」

私はサレファトを背負ったまま、倒れ込むように車に乗り込んだ。温かい空気が私たちを包み込む。車のドアはすぐに閉められ、動き出す。

クソッ！ おカネを払わないと助けないなんて奴らなんだ。助け合いというのを知らないのか？ 見返りがなかったら助けないのか！ 目の前で死にかけている人を見て何とも思わないのか！ おカネを払わないと言ったら見捨てるのか！！

窓から見えるのは薄暗くなった空と雪。人工の温かい空気が私の冷たくなった体を温める。その車内の温度は少し暑苦しく感じた。

「10万、大儲けだな」

「フッフ、今年の冬は温かい冬になりそうだ」

温かい冬？ どういう意味だ？

しばらくそれについて考えていたが、眠気が私を襲う。まぶたが重い。今までずっと歩き続けて、疲れたのかな……？

ふと隣を見れば、サレファトは目をつむり、寝ていた。途中から

声が聞こえなくなっただけだと思っただけだ。私はしばらくの間、その寝顔を見ていたが、やがて、私の意識もまた闇の中へと消えていった。

第43話 押し付け

天井……？ 薄い黄色のかかった天井が僕の目に入る。温かい。僕はどうしたんだっけ？ 確かシリオード大陸にきて魔物にやられて、……それから、パトラーさんに助けてもらって……

ダメだ。頭がぼんやりして何も考えられない。柔らかい枕と温かく包み込む、布団。それが僕を眠りにつかせようと…… 柔らかい枕？ 布団？

僕は跳ね起きる。そうだ！ 僕らはシリオード大陸の雪原にいたハズ。そこをさ迷っている途中、確か、車が飛んできて……そこからはもう覚えていない。車が来て安心して寝てしまったんだ。

「ここは、ドコだ？」

僕は起き上がって辺りを見渡す。ベッドが1つ。机が1つ。テレビがあって、明かりが点いていて、窓があって、……曇っていて窓から外が見えない。僕は窓の近くにより、曇ったところを手で擦る。外は雪が降っていた。それに街が見える。チラホラと人が歩いていた。

「ここはシリオード大陸の街、なのか？」

建物が並ぶ街。人々が荷物を持ち、マフラーで顔を隠し、早歩きしながら、どこかへ向かっていく。恐らくここはシリオード大陸の中央部。中央部の“シリオードシティ”だ。

「お目覚めかね？」

「……………！」

突然、この部屋の扉が開かれ、太った男が1人入ってくる。誰だ？ この人は。

「さっそくだが、例のおカネを頂きたいのだが……」

「おカネ、ですか？」

おカネ？ 何の話だ？ 男はニタニタしながら、話を続ける。

「俺達が^{ただ}無料で助けるワケないだろお？ ほら、1人5万、だよ……」

1人5万？ 以前も聞いたセリフだ。僕は今までの事を思い返す。すぐにそのセリフがなんなのか思い出した。アレは僕の意識が消えていく時に聞いたセリフだ。

——我々も生活が苦しいのでな。そうだな、1人5万は頂こうか。

あの時、車が近づいてきた時、助かったと安堵した僕は急に眠くなってきた。パトラーさんと車の男たちが何か話していたのは分かったが細かい所までは聞いてなかった。それに内容を理解できなかった。眠さで意識がもうろうとしていたからだ。

あの時の5万はおカネだったのか…… 知らなかった。

「えっと、その……」

どうしよう…… 僕は5万なんて大金は持っていない。持っている物といえば、姉さんのハンドガンぐらい。ハンドガンの弾が数発。ないって言ったら怒られるよな。絶対、怒るよね。

「まさか、ないって言うんじゃないだろうな？」

「え、あ、そ、そんな事は！」

「じゃ、早く出せよ！」

うわあっ！ ヤバい、ヤバい、ヤバい！ ホントにどうしよう。

そんな大金、持ってないよお……

って言うか、おカネがないと助けてくれないのか？ おカネがなかったら助けてくれないのか？

寒いワケでもないのにガクガクと体が震える。両手を握りしめ、心を落ち着けようとするけど全く効果がない。

「なあ、コイツの相棒が払ってくれるんじゃないのかネ？」

突然、今までの男の声とは違う別の男の声が聞こえてきた。僕が顔を上げると、太った男の後ろに別の男がいた。彼は最初の男とは対照的にやせ細っていた。

「そうなんだろう？ 君の相棒が全部払ってくれるんだろう？」

相棒？ 僕の相棒？ ……パトラーさんの事か。でも、そんな話は聞いていない。彼女が10万という大金を持っているかどうかは知らない。

でも、僕には払えない。どうやっても払う事の出来ない金額だ。どうしよう…… ないって言ったらどんな目に会わせられるか……

「どうなんだ？」

「……………」

「早く言えッ！」

「あ、はい！ え、と、パ、パトラーさんが……たぶん、その、払ってくれま、す……」

ごめん、なさい！ ホントにごめんなさいッ！

「おおっ、そうか。それならよい」

2人の男達は部屋から出て行く。僕はまだガクガクと震えていた。つい“パトラーさんが払ってくれる”と言ってしまった。男たちが怖くてつい……

僕は布団に潜り込む。頭にパトラーさんが浮かび上がる。彼女に押し付けた。10万という大金を。彼女の顔が脳裏に浮かび上がる度に胸が挟られるような感覚を覚える。

ごめんなさい！ 謝っても許される事じゃないですよ。僕って最低、ですね……

第44話 持っていないおカネ

温かい流水を浴びながら私は考えていた。この家の住人に貸してもらった浴室。そこで時々、下唇を噛みながら考える。

かなりマズイ事になった。10万というおカネ。今、私はそれを持っていない。今持っているおカネは“0”だった。

おカネは全て銀行に預けている為、引き出さなくちゃならない。しかし、引き出すためのカードも、僅かなおカネが入った財布も全て、あのステイラルシティのホテルに置いてきた。

「クッ、財布ぐらい、持って来いよ……」

持ってきたのはサブマシンガンとその弾。スタンロッド型の魔法発生装置2本。財布という重要な物を持って来なかった自分に対して舌打ちしたい気分だった。

サレファトなら持っているだろうか？ 一応、彼は財閥連合社の元幹部。おカネなら持っているそうだが…… いや、その組織自体4年前に滅んだからな。滅ぼしたのは私達だが。

「ハア…… アイツにも頼れそうにないな」

まさか、おカネがこんなにも大切に思える日が来るなんて思ってもいなかった。おカネなんて最低限あればOKだと思っていた。

出来る事なら時間を戻したい。ステイラルシティに入ったところ辺りからやり直したい。あの時、サレファトを突き離さずに一緒にホテルに連れて行ってやればこんな事にならないで済んだのに……！

「クウッ……！」

私は浴室から出るに出来なかった。どうしよう…… おカネがないと知ったら彼らは私達をどうするんだろうか？ 黙ってそのまま追い出されるならいい。でも、それはないだろう。……じゃ、どうなるんだ？ まさか、殺される……？

私は浴室から出ると置いてあったタオルで体をふく。温まった体でも、心はブルブルと震えていた。怖い。それが正直な気持ちだった。

そして、心の中で、おカネがないと助けない彼らに怒りに似た感情をぶつけていた。おカネがなくても助けてやれよ！ 人は支え合うもんじゃないのかよ！

そう思う一方で、なぜおカネに固執するのかという疑問も頭をよぎる。ただ単におカネに対する欲が大きいのか？ それとも他に何か理由があるのだろうか……？

体をふき、洗濯されてあった自分の服を着た私は部屋に戻った。部屋ではサレファトがベッドに座っていた。その表情はそうとう暗い。どうしたんだ？ やっぱ10万の事か？

「……サレファト？」

「あ……お、お風呂、出たんですね」

彼は私の胸の方を見ながら言う。どこ見てんだ。服着てんだから見えないだろ。

「10万の事も考えないとな」

「そ、そうです、ね」

今度は自分の手を見ながら言う。その口調は何だかたどたどしい。……なるほどな。なんか私に対して顔向けできない事したな。コイ

ッ。

「具合、悪いのか？」

「い、いえッ、別に！」

今度は窓の方、私とは真逆の方を向きながら言う。

私はそんな彼の横に座る。彼がビクリと一瞬、体を震わせた。その手は微かに震えていた。

「……………」

「……………」

黙ったままの空気。気まずい空気が漂う。コイツ、そうとうマズい事したんだな。私の裸でも想像していたのか？ ……んなワケないか。

「……………あ、あの……………」

「どうした？」

「……………何でも、ないです」

再び漂う気まずい空気。しばらく無言の状態が続いた。が、突然、サレファトが立ち上った。そして、そのまま、私の前を通り過ぎて行こうとした。私はその手を掴む。

「……………！ な、何ですか？」

「何を隠している？」

「べ、別に！ 僕は何も……………！」

かなり慌てたように言う。その顔には焦りがハッキリと見えていた。掴んだ手には汗が滲み出て、血管が激しく脈打っていた。

「ホントに何もないのか？」

「……………」

彼は無言で首を横に振った。どうしても言えない、か。

その時、部屋の扉が開かれ、4人の男達が入ってくる。その内、2人は車の男、つまり、この住人。後の2人は同じ服を着ていた。藍色の帽子にコートを着て、手には白い手袋。そして、その手にはショットガンと思われる武器を所持していた。そして、何故か全員がガスマスクのような物を持っていた。

「さて、約束の10万円を頂こうかね！ パトラー、だっけ？」

家の住人と思われる男が私を見ながら言った。彼らの手にもハンドガンと思われる武器があった。

私はサレファトの方をチラリと見る。彼はサッと顔を背けた。なるほど、な。10万を私に押し付けたってヤツか。……チッ！

「持っていない、って言ったら？」

「ああ、構わんよ。……こうするだけだからな！」

そういうと彼は私に向けて発砲した！ 私の肩に痛みが走る。でも、その痛みは撃たれた痛みじゃなかった。硬い何かが直撃したような痛みだった。

私の足元に何かが落ちる。それは白いハンドガンの弾のようだった。当たった所からは出血していない。

「これは……？」

私がそれを拾おうとした瞬間、それは爆発し、大量の煙を辺り一

帯に撒き散らした。まさか、この煙……！

煙の効果に気付いて窓から逃げようとした時には遅かった。既に煙の効果が現れ始めていた。フラフラとする体。強烈な睡魔。急速に遠ざかっていく意識。

この煙は睡眠ガスだ！ 眠らせてどうするつもりだ！ 何をする気なんだ……！ そんな事を考えながら、私の意識は暗闇へと消えていった。

「……遭難している人って大体持っていないからなあ」

「まあ、“ご領主様”に売れば、カネにしてくれる。若い女性は7万。少年は3万だったかねえ…… コイツらも無残に殺されるんだろう……」

第45話 恐怖の穴

……。ぼーっ、とする頭。ここはドコだ？ 石造りの部屋。壁も地面も石造り。

私は重い体を上げ、辺りを見渡す。牢屋、か。牢屋の隅っこにはサレファトが転がっていた。まだ意識を取り戻していない。目をつむって寝ていた。

「オイ！ 誰かいらないのか!？」

私は牢屋の鉄柵を蹴りながら言う。返事はない。鉄柵のすぐ向こうは壁。このフロアにある牢屋は3つか4つ程だった。左側にもう3つか4つあるくらい。右側には牢屋はなく、上に通じる階段が1つだけある。

「……ア、アナタも売られたの？」

「……………」

隣の牢屋から声が聞こえてきた。姿は見えないが、声からして少女だろう。……この声、どこかで聞いたぞ？ しかも、つい最近だ。どこかで聞いたんだが……

「売られた？ どういう事だ？」

「……“年貢”を払えなかった家は、全財産没収か、若い女性を差し出す事になるの」

年貢って、1年に1回、その地を支配する人間や組織に税金を納める事だよな。シリオード大陸ではそんなシステムなのか？

彼女の話だと、払えなければ財産没収。または若い女性を差し出

す。……後者は人身売買になってないか？ 国際政府は禁止しているハズだ。

「もし、若い女性がいなかったら？」

「……財産没収」

「で、お前は家族に売られたのか？」

「……ううん。違うよ」

違う？ 売られたワケじゃないのか？ ……という事はただの犯罪者として捕まっているのか？

「私はね、この街の外、コスーム大陸から来たんだ。街を歩いていたら急に捕まって、催眠ガスで……そして、その人達に売られた」

完全な人身売買だろ。どうなってんだ、この街は。人を売ってまでおカネが欲しいのか？

「後で知った話なんだけど、若い女性は“領主”に1人7万で売れるんだって。少年は3万だったかな？ そして、売った家は今年、年貢を払わなくてもよくなる」

私はチラリとサレファトの方を見る。私が7万でサレファトが3万。合計で10万になるな。彼らが10万を払えって言ったのはこういう事だったのか。

「この後、どうなる？」

「……バトルさせられるの」

またバトルか。ステイラルのバトル大会ではえらい目に合ったわ。予選では殺されそうになるし、本戦ではイプシロンに負けた。……

そのイプシロンはドコ行ったんだ？

「で、バトルに負けたら？」

「……死」

な、何ッ！？ バトルに負けただけで殺されるのか！？ 私は目の前の鉄柵をギュッと掴む。

「わ、私も1回勝っちゃった。そしたらその子、私の相手の子が……」

その時、階段を降りてくる足音が聞こえてきた。それも複数だ。私は鉄柵から少し離れる。

降りて来たのは藍色の服をした兵士と思われる人達。全員がショットガンを持っていた。あの家で見た2人の男達と同じ服装……

“領主”の兵士達、か。

やって来た兵士達は私とサレファトにショットガンの銃口を向けながら言った。

「パトラーとサレファト。N O . 4 と N O . 8 、 出ろ」

N O . 4 ? N O . 8 ? 番号呼びしているのか？ そんな事を思っていると2人の少女が牢屋の外に連れ出されていた。恐らく隣の牢屋にいた子だろう。……片方の少女はすでに重症を負っていた。顔や頭、腕に巻かれた包帯を見れば分かる。

私は後ろで寝ているサレファトの方を振り返る。彼はゆっくりと立ち上がる。なんだ、起きていたのか。

「何の用だ？」

“西の王”がお呼びだ」

西の王？ “領主”の事か？ 私が思っていると重症の少女が呟くように言った。その声はさっきの少女の声と同じだ。

「西の王はこの領主の事だよ。 “シリオード皇帝”の……」

「勝手に喋るな！ No. 4！」

No. 4と呼ばれた少女はビクリと体を震わせる。ピンク色の髪。細くてキレイな手足。そして、この顔。どっかで見たような気がする。せめて包帯を外してくれば分かりそうなんだが……

彼女の正体を掴めず、私達は階段を上らされる。その途中で私は一度だけサレファトの方を振り返った。彼は私と目が合うとすぐに俯く。まだ、10万の事が頭にあるのだろう。この事も後でちゃんと話さないとな。でも、今はコッチだ。また面倒な事になってきた。

【西城 決闘場】

私達が連れて来られたのは、正方形の大きな部屋。部屋の中央部に大きな穴のある部屋だった。何か変な音がするあの穴には何があるんだ？

そして、私達が入ってきた扉から見て奥の扉の上の方。そこに突き出た場所、閲覧所のような所。そこに3人の男がいた。

左右の男は頭に黒いフードを被っていた。纏っている服も黒。手に持っているのは槍。中央の男を守る者だろうか？ そして、中央の男は派手な衣装を着ている若い男だった。

「クゝフフフ！ よゝこそ…… 我が名はシリオード皇帝の息子、クロノス…… どうぞ、宜しく」

白銀の髪をした中央の男がニヤニヤしながら言う。シリオード皇帝の息子、クロノス……。彼がこの地の領主で“西の王”と呼ばれているヤツか。……白銀の髪？ 同じ色の髪をしたヤツをどこかで見たな。

「初めていらしたパトラー君とサレファト君に面白いものを見せて上げよう…… No. 4とNo. 8、いつもの場所で試合を行え。負けた方はその穴の中に落とす」

重症状態のNo. 4と特にケガのしていないNo. 8。勝つのはどう考えてもNo. 8じゃないのか？ って言うか穴には何があるんだ？ 私は穴に近づいて穴の中を覗いた。こ、これは……！

「な、何考えてんだ！ クロノス……！」

私は高い位置にある閲覧所に向かって叫ぶ。クロノスはニヤリと笑いながら言った。

「なについて？ 面白いだろお？ 負けた方は穴の中行きだよ……」

… 死の穴へ、ね」

「クッ……！」

私はクロノスを睨めつける。ふざけるな……！ これは“穴の恐怖”を利用した最低な試合だ！ 負けた方はこの穴に入れられる。だから、必死に戦う。その姿を見て楽しむなんて、最低だッ！

「うッ……！」

穴を覗きこんだサレファトが口を手で押さえながら後ずさる。その顔には明らかな恐怖が浮かんでいた。

「もっと見ていいんだよね…… 遠慮しなくてもおっけーだよお
〜……」

薄気味悪い表情を浮かべながら言うクロノス。

私はもう一度、穴を見た。石造りの穴の中。その底にはおびた
しい数の小さな生き物達がいた。大きな毒蜘蛛。小さな人食いヘビ
や毛虫。サソリやムカデ。そんな小さな虫が大量にいた。

「さあ、No. 4 VS No. 8! ゴー トゥ ザ ゲーム!!」

第46話 苦痛の果ての死

私達が入ってきた扉から見て奥の扉と“死の穴”の間、そこに設けられたフィールドの上に立ったNo.4とNo.8。負けた方は穴の中に落とされ、殺される。穴の中で散々苦しめられて……

「な、No.4の子、重症じゃないですか……！　　こんな酷過ぎる！」

「……………」

サレファトが叫ぶ。そう、No.4はかなりの重症を負っているんだ。どう考えてもNo.8の勝利だ。クロノスのヤツ……　　こんな事してなにが楽しいんだ！　　何が楽しくてこんな事するんだ！！

「……い、行くよ？　　覚悟はいい？」

「……………」

No.4の弱々しい声にNo.8は俯いたまま、コクンと頷いた。その体は震え、今にも泣きそうな顔をしていた。勝ったら相手を殺す事になる。負けたら自分が穴の中に……

「クッフッフッフ！　　さア、殺せえ〜！」

「黙れ、貴様ア！」

私はクロノスに向かって力の限り叫んだ。だが、彼はコツチをチラリと見ただけですぐに試合の方に視線を戻す。クソッ！

「うわああああッ！」

N O・4が包帯だらけの体を動かし、N O・8に向かって走る。そのスピードはかなり早い。とても重症を負っているとは思えない速さだった。そして、一気にN O・8に迫ると拳を繰り出し、彼女の顔面を殴りつける。

「ギャツアツ！」

彼女は激しく顔面をバトルフィールドに打ち付け、その場に倒れる。その口から苦痛の声上がる。あんなに強くやったら首の骨が折れるぞ！……もしかして、それを狙ったのか？ どうせなら、楽に、一撃で殺してやろう、というヤツか？ でも、それって……

「ゲッホッ……！ グウウウッ！」

倒れたN O・8は苦しそうな声を上げる。よかった、まだ生きている。でもアレじゃN O・4に勝てない。圧倒的な力の差がある。サレファトのようなパーフェクターなら勝てるかも知れないが、素手じゃ勝つのは不可能だ。

でも、N O・4の方も相当痛そうにしている。殴った方の腕を押さえてフラフラとN O・8から下がる。その顔は、包帯で分かりにくい、苦痛に歪んでいた。

「ざぁんねえくん。N O・8は敗北だよお。……穴に落とせ」

気持ち悪い表情を浮かべながらクロノスがそう言う。それと同時に2人の兵士が負けたN O・8に近づく。彼女は涙を流しながら、首を横に振る。「来ないで！」と言いたいのだろう。

しかし、そんな願いを聞き入れるハズもない。兵士達はN O・8の服に手をかけ、お構いなしに引き裂いていく。彼女も必死で抵抗するが、瀕死の状態での抵抗。1分もしない内に全裸にされてしま

った。……穴に落とす前に犯すのか！？　ふざけるな！

「クロノス、テメェ！」

「なあに、犯すなんてそんな事はしないよお。素っ裸にして穴に放り捨てるのさ。そっちの方が体を守るものがないから全身にダメージが」

「お前は人をなんだと思っているんだ！　散々苦しめて殺すなんて……！」

自分の楽しみの為だけに何の罪もない少女達を無残に殺す。それがどういう事かコイツは分かっていない！　人間は心のある生き物だぞ！　何の感情もなしに動く機械やアンドロイドじゃないんだぞ！　私は彼女を助けたかった。しかし、私やサレファトの近くにも兵士。武器を持った兵士。彼らのせいで動けなかった。

「イヤああああ！！」

「……………！」

空気を切り裂くような悲鳴。私は悲鳴のした方に視線を向ける。全ての衣服を無理やり剥ぎ取られた少女が穴に落とされたところだった。彼女は穴の下に落ちる。

「貴様ッ！」

「いやッ！　いやぁッ！　助けてッ！」

穴に落とされた少女の体に群がり出す無数の虫。彼女の柔らかそうな肌に牙を立て噛み付くへび。噛み付かれた所の皮膚が抉られ、鮮血が流れ出る。

彼女の体を守るものは何もない。人食いへびは思い思いの所の皮膚を食べていく。全身をめっちゃくちゃに食いちぎられていく少女は

恐怖と苦痛に泣き叫び、苦痛と助けと許しを訴える。

「クフフフ！！ 最高だ！ これほど聞き心地のよいBGMないッ！ 食われ、バラのように赤き血に染まる白く美しい個体！ 最高のシーンだ！」

「……………ッ！」

怒りが私の体を駆け巡る。強烈な殺意が沸き起こる。アイツを殺してやりたい！ 同じように散々、苦しめて殺してやりたい！ 死ね！ 世界一のゴミ！！

「いやアッ！ た、食べ、食べない、でッ！ もう、許しでッ……！」

彼女の悲鳴を聞いて、激痛に悶え苦しむ姿を見て、可哀想だと思わないのかッ！ なんでそんな非道な事が簡単に出来るんだ！ 私は悔しさと苦しむ彼女の姿を見て歯ぎしりする。目から涙が溢れる。こんな殺され方をする少女が可哀想だ！ まだ、彼女は子供なのに、悪い事をしたワケでもないのに！

「さあゝて、今度はパトラー君とサレファト君に戦って貰いましょうかねえ……………」

「……………！？」

な、何だと！？ クロノスの言った言葉で私はハッと我に返る。次は私達の番……………！？

「クッフッフッフ…… お互い恐怖に心を歪ませ、相手を全力で敗北させればいい！ 我の前で醜く争い、美しい死にざまを披露するのだ！」

第47話 サレファートの決断

僕とパトラーさんに課せられた試練。2人が戦い負けた方が死。あの穴に投げ込まれて……

死ぬのはイヤだ。まだ死にたくない。死なない為にはパトラーさんに勝たなければならない。でも、僕が勝てば彼女は死ぬ。さっきの女の子と同じように殺されてしまう。

「クアッハッハッハ！ 殺せ！ 絆と愛を引き裂き、殺し合うのだ！」

僕が勝ったらパトラーさんが死ぬ。負けたら僕自身が殺される！ どっちもイヤだけど、イヤだけど……

初めて出会ったあの施設。再会したあの森、ごみ置き場みたいな所、キレイで危険な街、シリオードの雪原、10万円…… 僕が彼女に出会ってから僕は彼女に迷惑しかかけていない。

ここで迷惑の集大成として彼女を殺すのか？ イヤだ！ もう彼女に何も迷惑をかけたくない！ 今度は僕が助ける番だ！ 僕が彼女を助ける……！

僕はチラリと穴の方を見る。暗い穴。その穴の底では気味悪いもの達が動き回っている。彼女を助けるという事は自分自身である穴の中に飛び込まないといけない。そして、苦痛を死ぬまで味わわないといけない！

「パ、パトラーさん、今まで、どうも、ありがとう、御座いました」「……………!?!」

ガクガクと震える体。上手く喋れない。僕って最期まで情けないんだな。ホントは死ぬのが怖いんだ。でも、彼女の為だッ！ 今ま

で迷惑かけ続けてきたんだからここで返さないと！

「さ、さような、ら！」

「待てッ！ お前、なに考えているんだ！」

すぐに分かりますよ。僕が何を考えて何をしようとしているのかぐらい…… 今まで色々すいませんでした。

僕は穴の方を向く。ホントは死にたくない。でもこの状況、どうにもならない。僕が死ぬ事でパトラーさんが助かる。それなら、それならいい！

「よせ！ やめろッ！」

僕は目をつむり、穴の方に向かってゆっくりと歩く。これでいいんだよね。ゆっくり歩いているなんてやっぱりホントは死にたくないんだな。情けないや。走って穴の中に飛び込むぐらいの勇気が欲しいよ。

「やめろッ！ サレファト！」

「……………」

近くでパトラーさんの声がした。その声と共に僕の体は後ろから掴まれ押し倒される。押し倒したのはパトラーさんだった。

「バカな事はするな！」

「パ、パトラーさん！？」

確かに自分から死のうとするのはバカな事かも知れない。でも、そうしないとパトラーさんが殺されてしまう！ 彼女が死ぬなんて僕には耐えられない！ そんなら僕が死んだ方がマシだ！

「は、離して下さいよ！　僕が死にますからパトラーさんは生きて！」

僕は何とか彼女の手から逃れようともがく。が、その瞬間、彼女は僕を抱きしめた。温かい体が僕を覆う。力強い腕でしっかりと僕の胴体を握る。

「……………！？　パ、パトラー、さん？」

「落ち着け、サレファト」

「ほお、面白い展開になってきたじゃないですか。勝敗はどうやって決めるのかなねえ……………」

え？　えっと、どうしたんですか？

「あ、あのパトラーさん？」

「…………お前の“能力”ならあの男を倒せるんじゃないか？」

「へ？」

パトラーさんは僕を抱きしめたまま耳元で、小さな声で言った。あの男や兵士達に聞こえないように…………　僕的能力を使えば…………？

「ステイラルシティから逃げる時に見たけど、あの指から電気の弾を撃つやつ、あっただろ？」

「…………エレキハンドガンですか？」

「それでアイツを狙い撃ちすれば…………頼んだ」

そ、そうか！　その手があったか！　全然気づかなかった。確かにそうすれば僕とパトラーさんが戦う必要はなくなる！

パトラーさんはボクから離れ、僕は立ち上がる。そして、高みの

見物をするクロノスの方を向いた。

「ん〜？ どっちが死ぬか決まったのかねえ〜？」

どっちが死ぬかって？ そうだね。負けはお前だ、クロノス！

僕は彼に人差し指を向け、黄色く光る電気の弾を撃った。熱い弾が指先から飛び、クロノスの肩を撃ち抜く。彼は血を飛ばし、後ろにひっくり返る。

「ひウツ？ グ？ グアアアツ！」

「閣下！」

クロノスの側にいた槍を持った騎士みたいな男が彼に駆け寄り、助け起こす。

「ウ、グアツ！ ア、アイツ、しまった、パーフェクターだッ！」

「閣下、お下がりを！ 危険です！」

「ク、クソ！ 殺せえ！ 全員殺せ！」

「イエッサー！」

肩だから死なないよな。クロノスの声が聞こえなくなると、黒いフードの騎士が姿を現す。彼は槍をコッチに向けると叫んだ。

「兵士共！ パトラー、サレファト、ローを殺せ！ これは王の命令だ！」

ロー？ No. 8と呼ばれている女の子か。僕以外も標的にされるなんて！僕は素早く兵士達の方を向く。ショットガンを向けていた。一方、騎士の男は背を向け去って行く。逃げんのかよ！

「死ね！」

ショットガンから弾が放たれる。僕は素早く電気のシールドで自分とパトラーさんを覆う。ショットガンの弾は電気の力で消える。僕は彼らに向かって走る。

「喰らえ！ “サンダー”！」

白く、眩しく輝く電気の線が彼らの真上から襲う。攻撃を喰らった兵士達はその場に倒れる。この程度の攻撃じゃ死なないよね。たぶん、気絶程度だと思う。

「グアッ！」

「うわアッ！」

「……………！」

別の方向からも悲鳴が上がる。見ればN.O. 8が兵士達を次々と殴り倒していた。その速度はかなり早い。無駄のない動き、繰り出す拳は一撃で相手を壁に吹っ飛ばし、気絶させる。

あの子は元々政府軍人だったのだろうか？ 普通の女の子じゃない。それは誰の目からも明らかだった。……………もしかしてパーフェクター？

「グ、アッ！」

「ク、クソッ！ ギャアッ！」

「グえッ！」

ピンクの髪の毛をした彼女はあっという間に兵士達を倒してしまった。彼女が倒した人数は11人。僕は3人だった。失礼だけどパトラーさんは0人。武器を持ってないから仕方ないよね。

彼女は全ての兵士を倒すとその場に倒れ込む。僕とパトラーさんが驚いて彼女に駆け寄った。

「大丈夫か？ えっと……No. 8」

「う、うん。私は大丈夫、だよ。あと、本当の名前はロー……パトラーってステイラル大会の参加者、だよね？」

アレ？ この子、パトラーさんの事知っているのか？ もしかして知り合い？ 確かに牢獄で話していたけど。

「ロー……？ そうか、思い出したぞ！ お前はステイラル大会に参加していたローだろ？」

「うん、そうだよ……」

「え、え？ 誰ですか？」

「ああ、そうか。お前は捕まっていたから知らなかったんだな。彼女はステイラル大会の参加者の1人だ」

そこからパトラーさんは彼女について話してくれた。それによるとNo. 8……ローさんはステイラル大会の本戦参加者でコピーのパーフエクターらしい。

他人の能力を自分のモノに出来るパーフエクター。それで彼女は225人の力を得ている。でも、彼女は本戦でオミクロンという吸収のパーフエクターに敗北。その時にかなりの重症を負った。全身に巻いた包帯はそれが原因だった。

「でも、何でここにいるんだ？」

「実はあの大会に参加する1ヶ月前にクロノスに捕まったの。それから城の、クロノスの奴隷にされた少女を助ける為にあの大会に参加したの」

「助ける為に、ですか？」

「そう…… クロノスは大会で優勝すれば全員を解放してやるって言って……」

そう言うローの表情は曇る。大会で敗北。それで少女達を助けられなかった。それを心の中で責めているのだろうか？

「大丈夫だ。もうこの穴の前で殺し合いは行われない。私がクロノスを倒す。アイツがいなくなればいいんだろ？」

「え？ クロノスを倒すの！？」

「それ以外、道はなさそうだが？」

確かにそうだ。パトラーさんの言うとおりだ。クロノスに攻撃をした今、彼を倒すしか生き残る道はない。城から逃げても広大な雪原に阻まれて他の街に行くのも難しい。

だったら、ここでクロノスを倒すんだ。そうすれば今後、誰かがこの穴で死ぬ事もない。街の人々がおカネ欲しさに人を差し出す事もなくなるかも知れない。

「やりましょう！ クロノスを倒してみんなを救いましょう！」
「ああ！」

パトラーさんが元気な声で言い、それから僕の肩にポンと手を置いた。そして微笑みながら言った。

「ステイラル大会の件、シリオードの件、10万の件、もちろん覚えてるよな？」

「ん？ はい、もちろん……」

「じゃ、クロノスとその騎士2人はお前に任せたぞ。私、武器を持つてないんで」

「え？ あ、はい」

僕が返事をする。パトラーさんはローさんを背負う。そっか、彼女はあのケガだから歩けないよな。ローさんが戦闘不能でパトラーさんが彼女を背負うから……で、僕が戦うのか。彼女達を守りながら。

こ、これは責任重大だッ！　僕はニヤリと笑う。パトラーさんを背にヒヤヒヤしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8867s/>

僕とアノ人とのイケナイ関係

2012年1月9日19時53分発行